

# 研究紀要

## 第9号

北奥における古代の鉄器について	齋藤 淳	1~22
考古学的分類に関する一考察 —ひとつの記号学的見地からのアプローチ—	岩田 安之	23~28
雪国の考古学 —忘れられた縄文の冬—	福田 友之	29~34
南部地域の古代製塙土器について	森 淳	35~44
松ヶ崎遺跡から出土した円筒上層式土器	中村 哲也	45~50
畠内遺跡出土繩紋晚期土器付着炭化物の炭素年代測定	小林 謙一 今村 峰雄 坂本 稔 佐藤 智生	51~58
動物形内蔵土器 —近野遺跡の追加資料—	成田 滋彦	59~60

2004.3

青森県埋蔵文化財調査センター

# 北奥における古代の鉄器について

齊藤 淳

## はじめに

日本列島における鉄器の導入は、九州北部を中心に弥生時代早期より始まったとみられ<sup>(注1)</sup>、中期前後には舶載鉄素材等を用いた鉄器生産（鍛冶）が開始されたと考えられている。中期から後期にかけては、「クニ」同士の争いを背景に、鉄製武器が発達普及するとともに首長権が拡大の一途をたどり、やがて鉄器が集中的に副葬される巨大墳墓の出現に至るとされる。端的に述べれば、鉄器の在り方が、技術・経済・社会・政治等の変革と変遷を反映しているととらえられている。

翻って本州北端に位置する北奥地方<sup>(注2)</sup>においては、鉄器はどのような役割を果たしてきたのであろうか。本稿は、右の課題に従って当該域における鉄器の出現から普及発展までを概観し、地域社会の変遷との関わりのなかで、鉄器がどのように位置づけられてきたのかを考察することを目的としている。

## 弥生時代（縄繩文時代前半期）以前／黎明期

北奥地方においては、弥生時代前期の段階に弥生文化を受容し、弘前市砂沢遺跡や田舎館村垂柳遺跡等津軽地方において、当該文化を表徵する農耕文化の所産である水田・コメ・木製農具等が発見されている。しかしながらこれらの遺跡では、弥生文化を構成する要素の一つである鉄器が欠落しており、生産具・工具を中心として石器が主体を占めることが明らかである。

そのような一般的な状況下、弥生時代前期の大間町大間貝塚<sup>(注3)</sup>、あるいは中期の川内町板子塚遺跡<sup>(注4)</sup>など、下北地方に所在する遺跡から、きわめて断片的ながら鉄片（刀子？）の出土が報告されている。板子塚遺跡においては、各種の石器・玉類ほかが副葬された弥生中期の土壙墓が9基検出され、そのうち第8号土壙墓から134点の石鐵・ヒスイ製勾玉とともに、小鉄片が発見されている。

一方津軽海峡をはさんだ北海道では、釧路市貝塚町1丁目遺跡における縄文晩期後葉の鉄片が知られているのをはじめ、石狩市紅葉山33号遺跡・羅臼町植別川遺跡など縄文時代前半期以降の土壙墓から、絶対量は少ないものの鉄片や刀子・鎌・短剣等の鉄器が継続的に出土している<sup>(注5)</sup>。

当該期には、一般墓に比して格段に副葬品の多いいわゆる多副葬墓が出現し、集団の首長墓と解されているが、鉄器はそれらに伴う場合が多い<sup>(注6)</sup>。板子塚遺跡第8号土壙墓も多副葬墓と見なすことが可能であり<sup>(注7)</sup>、鉄片が遺構に伴うと仮定した場合は<sup>(注8)</sup>、利器としての性能よりもむしろ、稀少性ゆえに琥珀・ヒスイ等と同等の価値を有していたと考えられる。

ところで当該期における北海道ならびに下北地方に散見される鉄器は、どのようなルートでもたらされたのであろうか。縄文時代前半期は、本州において北海道系遺物が目立たない時期であるとともに、北奥地方における鉄器の稀薄な出土状況を見るかぎりは、当該域を経由してもたらされたものが主体とは考えにくい。既に鉄器が普及している地域から直接もたらされたか、あるいは一部の製品は、大陸から北回りでもたらされた可能性がある<sup>(注9)</sup>。

弥生時代後期、東北地方全域は、天王山式土器が卓越する圏内となる。天王山式期においては、石

鐵の減少が認められるとされるが<sup>(注10)</sup>、鉄器の普及に起因する現象なのかどうかは、当該期の遺構が少ないとあいまって、鉄器出土例が寡少であるため判然としない。

総じて北奥地方においては、弥生時代における鉄器の痕跡は稀薄であり、技術・経済・社会等に大きな影響を及ぼすまでには至っていない段階ととらえられる。

### 古墳時代（続縄文時代後半期）／導入期

弥生時代末から古墳時代（続縄文時代後半期）に相当する3世紀後葉から6世紀代にかけては、土器や墓制をはじめとする文化内容や生活様式、集団間の諸関係等について、東北地方の南と北において明瞭な違いが生じる時期である。仙台平野から置賜盆地、庄内平野以南の東北南部は、北陸や関東からの文物流入により古墳文化が成立する。

弥生時代末に方形周溝墓が出現し、いち早く古墳文化を受容した福島県会津地方については、土器様式や堅穴住居跡の構造から北陸地方の影響が考えられている<sup>(注11)</sup>。東北南部地域では、前方後円墳や堅穴住居跡に伴って各種の鉄器が出土するとともに、5世紀後葉～6世紀初頭頃の羽口・鉄滓を伴う鍛冶遺構が確認されており<sup>(注12)</sup>、この頃には既に鉄の加工が開始されたと考えられる。

一方、北奥地方においては、後北C2-D式や北大式といった北海道系の土器や墓制が津軽海峡を越えて広がる段階である。北海道系土器を伴う土壙墓から、鉄製の刀子や農工具が出土する例が増加し、鉄器の本格的な導入期ととらえられる。これらの鉄器は、共伴する土師器・須恵器等の存在から、東北南部の古墳文化との密接な連携、あるいは活発な交流によってもたらされたことがうかがわれる。

秋田県能代市寒川II遺跡では、6基の土壙墓から後北C2-D式、弥生終末期の土器とともに板状鉄斧とされる鉄器<sup>(注13)</sup>、岩手県盛岡市永福寺山遺跡からは7基の土壙墓から弥生終末期の土器（赤穴式）、後北C2-D式、塩釜式と目される土師器とともに刀子・鉄鎌<sup>(注14)</sup>が出土している。また天間林村森ヶ沢遺跡では、20基の土壙墓から、北大I式、南小泉式と考えられる土師器・須恵器、刀子類を中心に剣や吊金具、鎧・環状鉄製品など多くの鉄製工具・武具が出土したとされる<sup>(注15)</sup>。

一方、八戸市田向冷水遺跡において、当該期の集落跡が発見されている。住居跡の構造ならびに出土遺物からは、古墳文化の影響が考えられ、とくにカマドの構築は穀類を中心とする農耕社会の生活様式の流入と受容ととらえられる。北大I式や南小泉式併行と考えられる土師器、玉類・黒曜石製石器等が出土しているが<sup>(注16)</sup>、鉄器は鉄鎌数点のみであり<sup>(注17)</sup>、土壙墓の副葬品内容とは質的な隔たりがある。

当該期は土壙墓出土資料を中心であるが、古墳文化の流入を背景として前代に比して鉄器の種類が増えるとともに、一部黒曜石製石器の併用が残るとしても、工具のほか武具の鉄器化が着実に進行している様子が理解される。これらがもたらされたルートについては、後北C2-D式以降の北海道系土器の分布が、宮城県大崎平野まで拡大しつつ集中することを根拠に、同域が古墳文化圏との主要な交流帯となり、鉄器等入手の窓口となつたとする説がある<sup>(注18)</sup>。おそらくその役割は、律令期の城柵周辺域、平安後期の北奥地方へと引き継がれていくのである。

交流帶（境界域）をはさんで南北の文化圏が交錯する構図は、律令期以降も同様であるが、当該期もう一つの地域差が顕在化はじめる。太平洋（陸奥）側と日本海（出羽）側といった東西間の相違である。南北の文化内容ほどには違いが目立たないものの、後北式以降の北海道系土器は陸奥側に偏

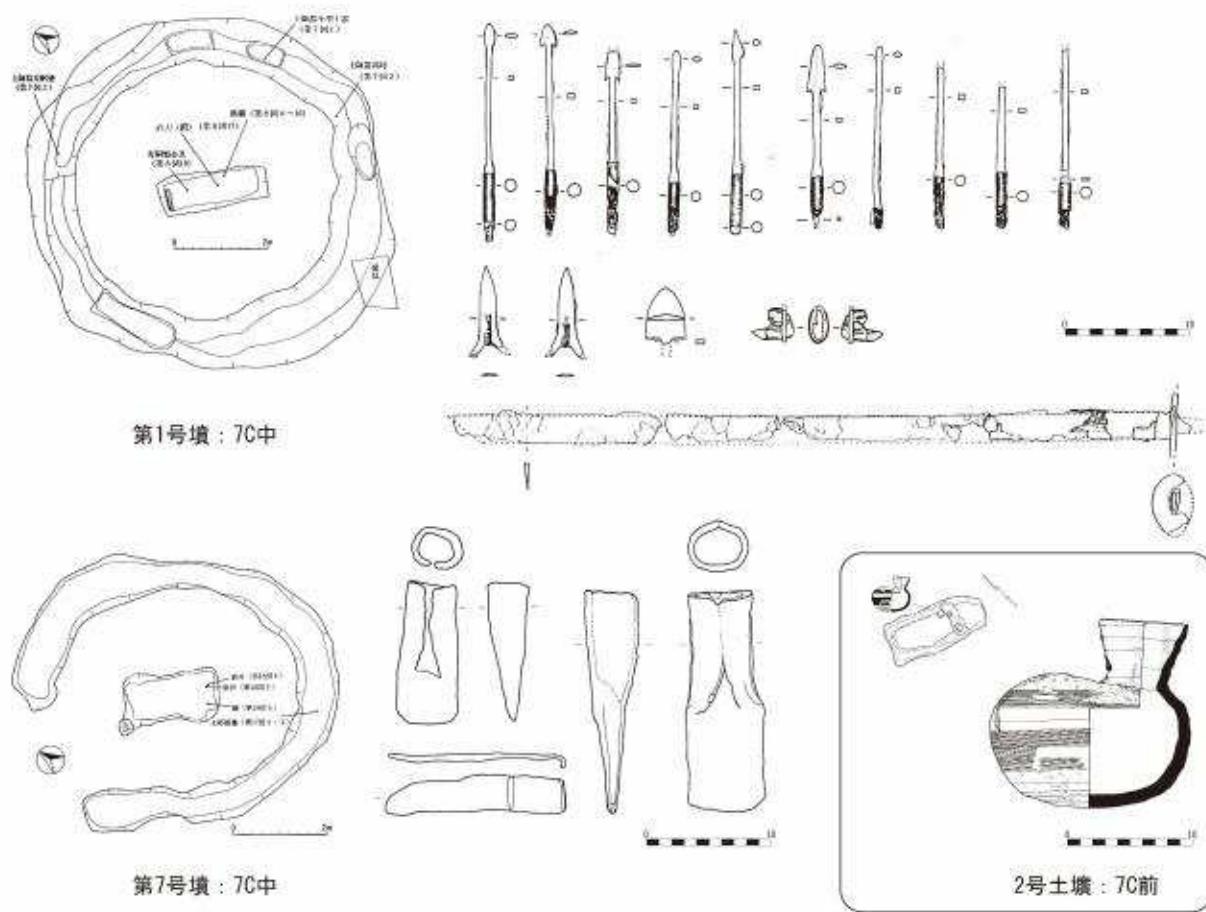


図1 阿光坊遺跡（下田町）

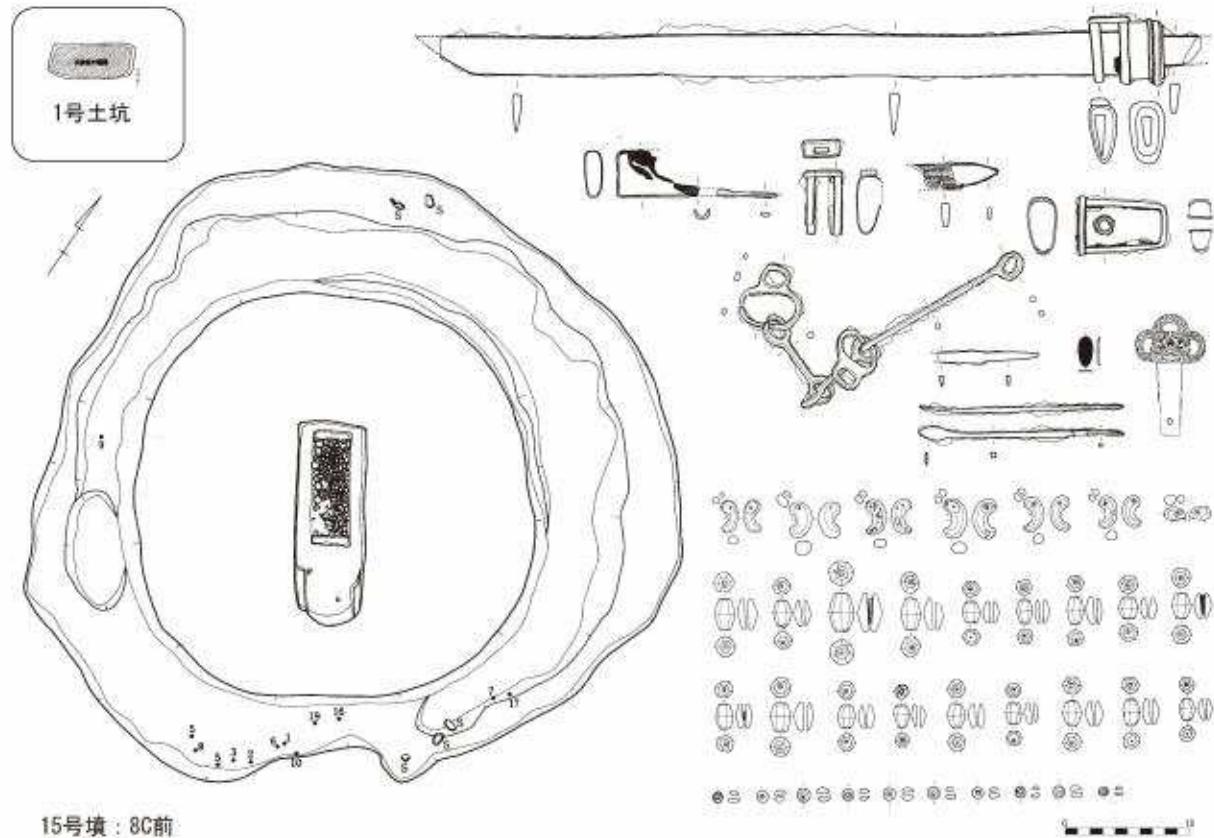


図2 丹後平古墳（八戸市）

在するとともに、鉄器の流通も太平洋側のルートが卓越している様子がうかがわれ、以降拡大する地域差の起点ととらえられるのである。

東西間の格差は、局地的な気候や地形等の違い、あるいは縄文時代以来培われてきた経済的な交流範囲や、技術・情報伝達の経路（物流ルート）の差異に基づく緩やかなものであって、移動性の高い狩猟採集生活から、土地を基盤とする農耕社会へと移行するに応じて固定化され、地域性として顕在化してきたものと考えられる。

### 飛鳥・奈良時代（7～8世紀）／普及期

文献史料においては、7世紀の大化改新前後、国家の政策として鉄生産技術が全国に移植され、地方における鉄生産が飛躍的に拡大するとともに、半島からの鉄輸入の記事が消滅し、列島における鉄生産が新たな段階に入ったことが推定されている<sup>(注19)</sup>。一方、鉄が北方世界との贈与や交易に利用されていたこと、あるいは北方世界が鍛冶などの加工技術を有していたこと等が、阿部比羅夫の北方遠征を記した「日本書紀」齊明天皇六年三月条ほかの記事から推察されている<sup>(注20)</sup>。

文献と符合するかのように、7世紀後葉頃には、福島県浜通地方北部に所在する武井・金沢地区製鉄遺跡群等で大規模な鉄生産が開始される。導入期の長方形箱形炉は、近江から東海・関東にかけての太平洋沿岸に分布する炉に類似することから、当該地方からの技術移転による官営的な操業が推定されている<sup>(注21・22)</sup>。

8世紀前葉には陸奥国に多賀城が設置され、律令国家による東北経営が本格化する。当該期、多賀城周辺の柏木遺跡では製鉄炉・炭窯・鍛冶炉などが一体となった鉄生産関連遺構が見つかっている。炉の形態等からは北関東や福島県地方との関連が考察されており、同地方からの技術移入によって、國家の管理の下鉄生産が行われた可能性が高い<sup>(注23)</sup>。生産された鉄器類は、城柵ほか北奥地方の在地有力者層等へ供給されたと考えられている<sup>(注24)</sup>。

北奥地方、すなわち当該期頃から「蝦夷」と呼称された人々の住む地域においては、7世紀前後より陸奥を中心とした墓制「終末期古墳」が成立する。同遺構は、前代において北海道系土器が分布する地域において、比較的多く認められるようである。従来の土墳墓における刀子や農工具に加えて、新たに武具や馬具をはじめとする豊富な鉄製品が副葬され、階層化の進行に伴う首長権の拡大がうかがわれる。また鉄器を多量に補充できるという前提から、鉄器を介した律令国家との安定した関係も推測されるのである。

下田町阿光坊古墳群<sup>(注25)</sup>（図1）・八戸市丹後平古墳群<sup>(注26)</sup>（図2）を例にあげれば、鉄鎌・直刀・薙手刀等の武具・馬具類を副葬する一群、玉類や剣・耳環を豊富に副葬する一群、鉄斧・鎌等農工具を副葬する一群、殆ど副葬品の見られない周濠を持たない土墳墓群が認められ、かなり複雑な階層性社会の一端を垣間見ることができる。

終末期古墳から出土する代表的な鉄器である薙手刀は、東日本を中心に九州から北海道まで250点ほど出土しており、特に終末期古墳の多い岩手県・宮城県に集中的に見られる。古型式の多い信濃地方が起源と考えられており、東山道沿いに伝わってきたと考えられるが（図4）、鋒形状の違いに地域性が認められることから、少なくとも東北～北海道、関東～中部地方、西日本の地域ごとに製作されたと推測されている<sup>(注27)</sup>。青森県においても14振ほど知られているが、そのうち発掘調査で出土し

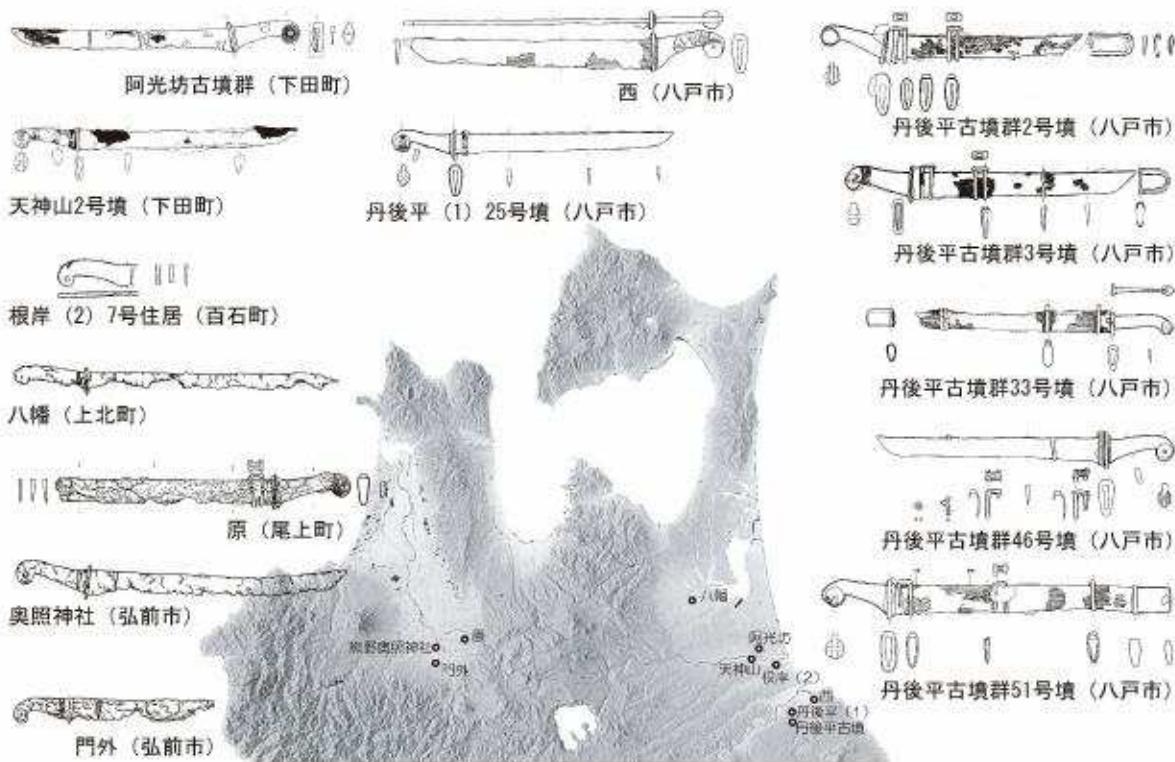


図3 青森県内における藤手刀の出土分布

たものは八戸市丹後平古墳群5振<sup>(注28)</sup>・丹後平(1)遺跡1振<sup>(注29)</sup>・下田町天神山遺跡1振<sup>(注30)</sup>・百石町根岸(2)遺跡1振<sup>(注31)</sup>であり、いずれも8世紀代のものと推定されている(図3)。

また当該期の集落も、陸奥を中心とする増加傾向となる。一般的な竪穴住居跡においては、武具・馬具の出土が少ないものの、工具・農具に関してはおおむね種類が出そろい、鉄器の普及と開拓の進展が表裏一体にあることをうかがわせる。ただし八戸市田面木平(1)遺跡<sup>(注32)</sup>(図5)や下田町中野平遺跡<sup>(注33)</sup>(図7)等に見られるように、一部の竪穴住居跡群に集中遺存する傾向が把握される。こうした一部の住居からは馬具や藤手刀、小札など特殊な遺物が出土する場合もみられ<sup>(注34)</sup>(図6)、鉄器の集団共有が想定されるとともに、管理者と持たざる人々との階層差は、墓制にみられるのと同様首肯されるように考えられる。もう少し飛躍的に言えば集落内の階層的在り方が、墓制にも反映され、用途を問わず鉄器が象徴的な威信財としての役割を果たしているといえる。

一方出羽では8世紀前葉に出羽柵(秋田城)が活動を始め、周辺域において若干の鉄生産関連遺跡が認められる<sup>(注35)</sup>。秋田城以北では、秋田県鹿角周辺に8世紀代の集落・終末期古墳群が認められるが<sup>(注36)</sup>、出羽全般に7~8世紀の集落は少なく、鉄器の出土量も寡少である。当該期の津軽地方では、津軽平野南部(弘前~尾上付近)に集落が集中するほか、深浦町西浜折曾の関遺跡<sup>(注37)</sup>、

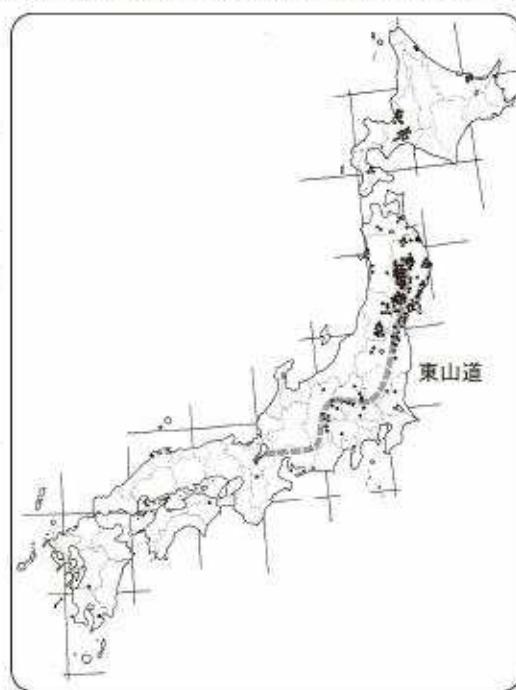


図4 藤手刀出土分布図

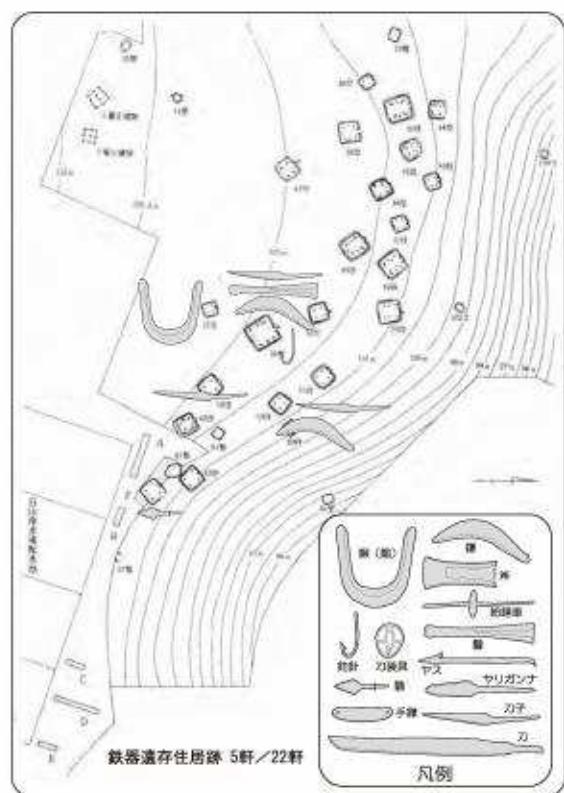


図5 田面木平(1) 遺跡(八戸市) : 7C中

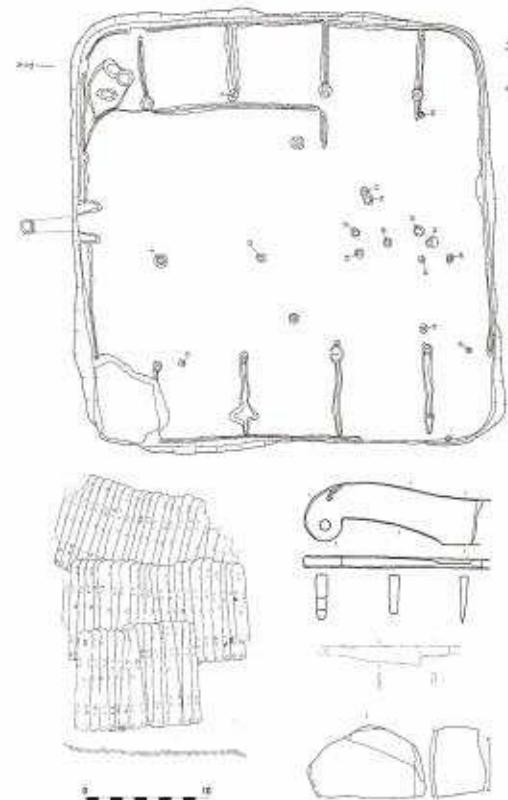
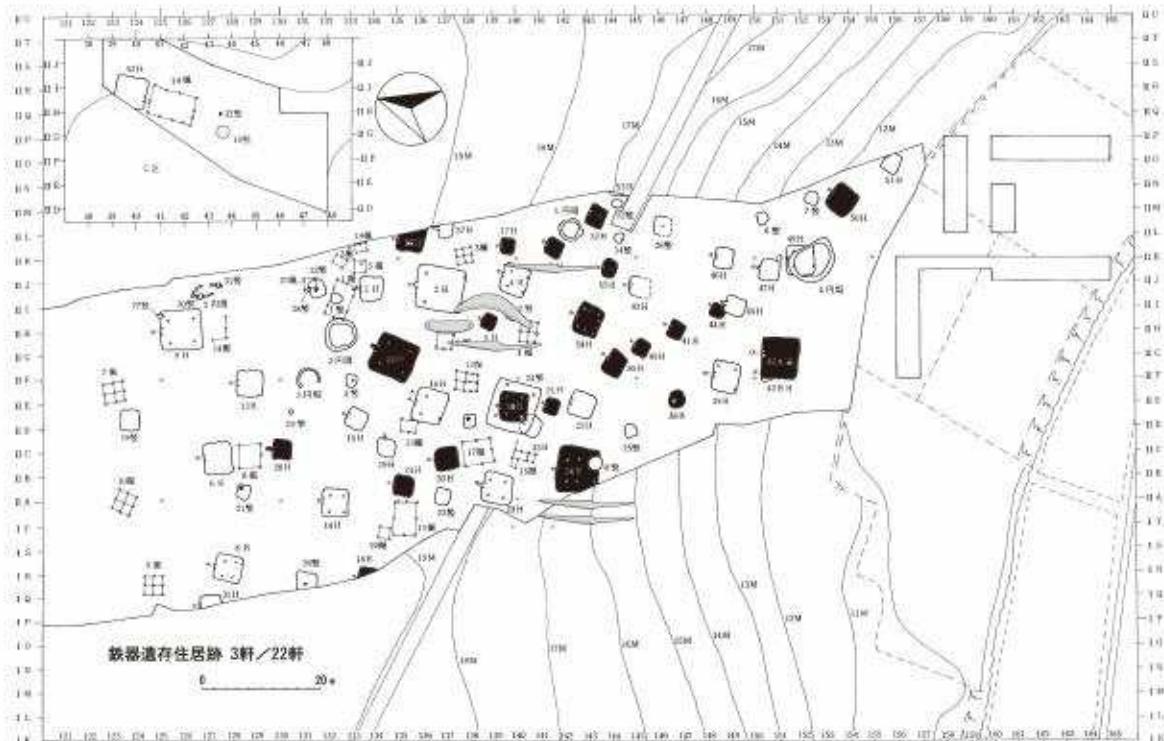
図6 根岸(2) 遺跡(百石町)  
第7号竪穴住居跡: 8C後

図7 中野平遺跡(下田町) : 8C後

鰺ヶ沢町舞戸<sup>(注38)</sup>、市浦村十三湊遺跡<sup>(注39)</sup>・中島遺跡<sup>(注40)</sup>等日本海沿岸の遺跡において、当該期の多条沈線文土器が散見される（図8）。したがっておそらく鹿角方面からの組織的・継続的な流れと、秋田城<sup>(注41)</sup>付近から日本海沿岸を飛び石伝いに波及する流れの二者が想定されるが、太平洋岸を北上し北海道中央部を突き抜ける陸奥側の奔流とでも言うべき流れに比して微細なものである。

律令期の東北地方においては、律令国家が主導した鉄生産拠点を背景に、陸奥側・太平洋側の鉄流通ルートが卓越し、その流れは北海道にまで到達したと考えられる。蝦夷社会においては、工具に加えて農具が普及するが、城柵関連の集落以外では鍛冶遺構・遺物が少なく、鉄器の加工・生産については限定的である。住居構造や日常生活様式の大枠においては、北方の文化要素は薄く、東北南部における律令文化そのものといつてもよいほどであるが、終末期古墳の築造に見られる墓制や、各種の沈線文が施された土師器等、一部の土器製作技法等の面では北奥地方の在地的な様相が色濃く見受けられる時期である。

#### 平安時代前期（9世紀代）／安定期

山田町上村遺跡・沢田II遺跡等三陸沿岸部において、8世紀後葉頃鉄生産が始まり、周辺集落からは多量の鉄器が出土する<sup>(注42)</sup>。当該域は、律令支配が直接及んでいない地域であることから、蝦夷側の鉄供給源であった可能性もある。この頃から蝦夷と律令国家の対立が激しくなり、いわゆる「三十八年戦争」が繰り返すが、9世紀前葉頃までには律令側の勝利のうちに終結し、岩手県北から上北地方に及ぶ広範囲が平定されるとともに、城柵の再編や建郡を通じてより直接的な支配へと移行する。

陸奥では志波城が設置されるが、同城跡からは鉄鎌に代表される多量の鉄器類と鍛冶遺構が検出されている（図19）。志波城周辺では集落が倍増し、鉄器の出土量が増加するとされる<sup>(注43)</sup>。出羽側においても、秋田城周辺で9世紀前葉頃の鉄生産関連遺跡が見つかっているが、これらも律令国家が主導した官炉と考えられている<sup>(注44)</sup>。

当該期の北奥地方は、律令支配の強化によって、土器様式の面ではそれまで一体の文化圏を構成していた北海道南部と分断され、東北南部の文化圏に組み込まれる時期とされる<sup>(注45)</sup>。北奥地方特有の在地的な土器はほぼ消滅し、口クロ土師器や須恵器、律令祭祀に関わると考えられる遺物が出土することから<sup>(注46)</sup>、蝦夷社会においても律令的生活様式の一端が受容された時期ととらえられるが、前代に比して集落数は著しく減少する<sup>(注47)</sup>。

当該期の終末期古墳（円形周溝墓）は、八戸市丹後平（1）遺跡<sup>(注48)</sup>（図9）・殿見遺跡<sup>(注49)</sup>（図10）等で見つかっている。前代同様副葬品の少ない土壙墓群を伴うものの、終末期古墳自体は主体部が退化し、副葬品も次第に簡素化する傾向にある。

出羽では、秋田県秋田市湯ノ沢F遺跡において、元慶の乱時の戦死者の集団墓と推定される土壙墓群が見つかっている。鉄鎌・蕨手刀・直刀をはじめとする武具や農工具が多量に副葬さ

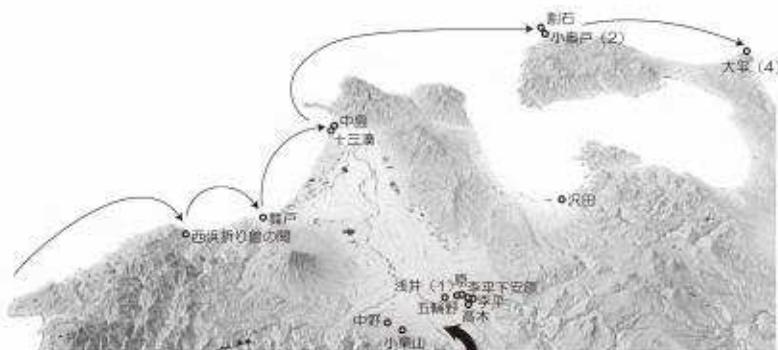


図8 多条沈線文土器の分布（8世紀）

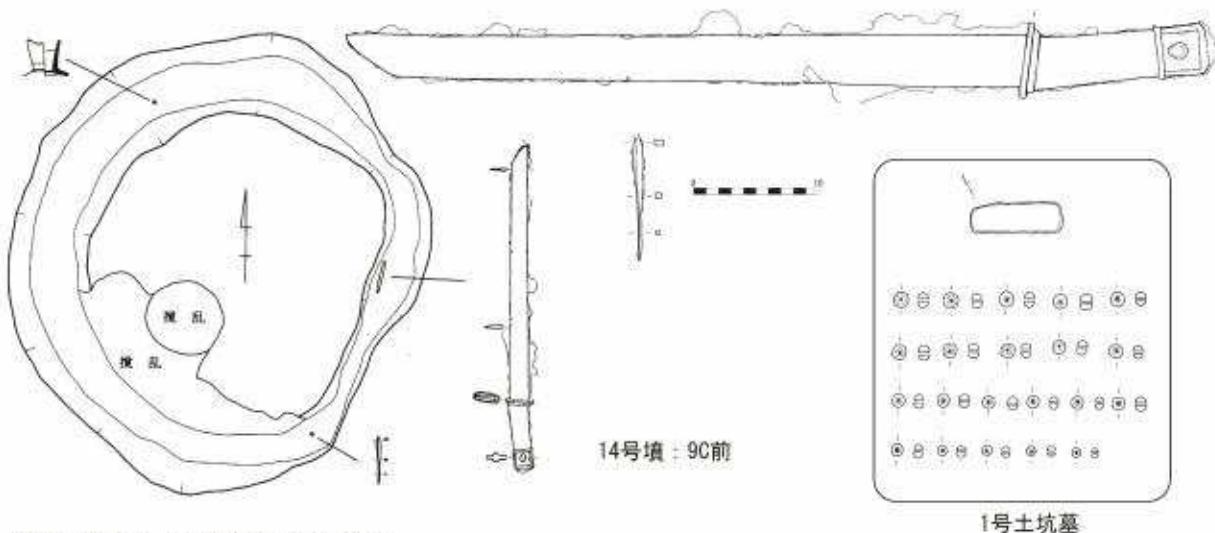


図9 丹後平（1）遺跡（八戸市）

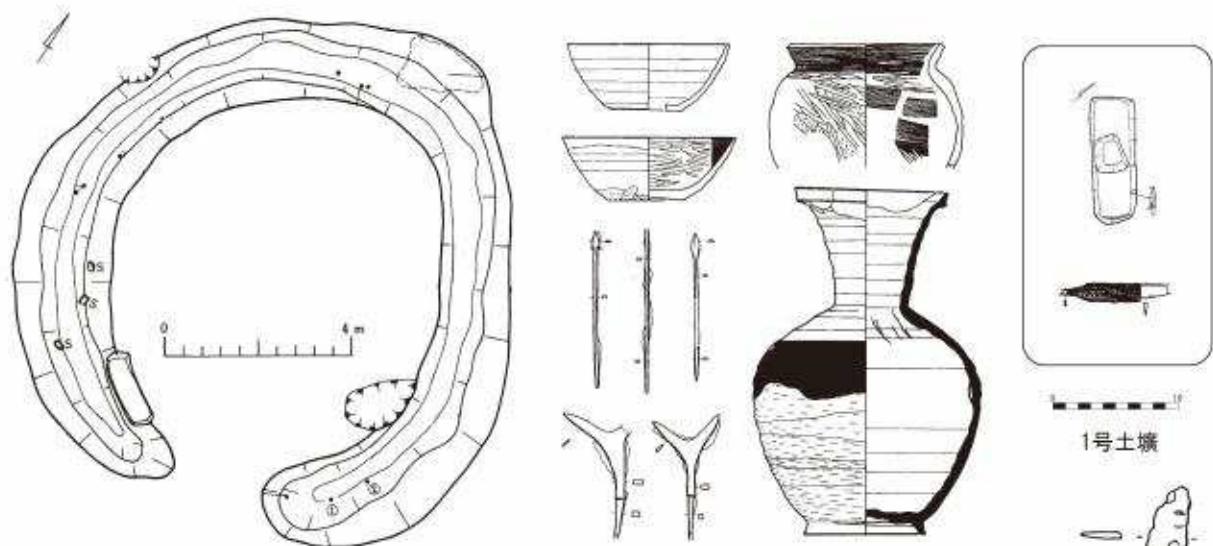


図10 殿見遺跡（八戸市）

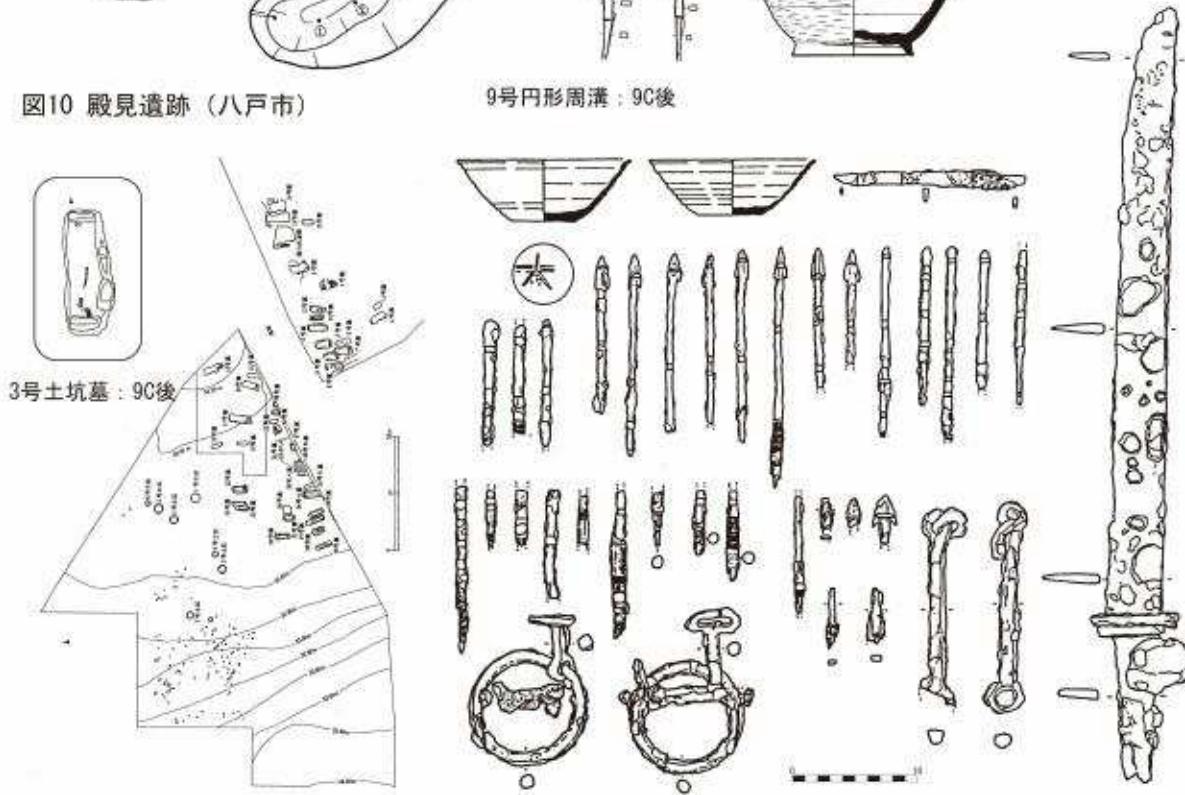


図11 湯ノ沢F遺跡（秋田県秋田市）

れており<sup>(注50)</sup>、当該期の鉄器普及の一端をうかがうことができる（図11）。陸奥とは異なり、多量の副葬品が特徴的であるが、同土墳墓群特有の現象であり、出羽における一般的な傾向とは考えにくい。

当該期は、対蝦夷戦争を経て律令支配が強まる時期であり、食器をはじめとする生活様式に各種の変化がもたらされる。鉄器については、秋田城・志波城等の城柵周辺において官炉的な工房が発見されているが、蝦夷の一般集落における状況は、調査例が少ないとあって不明の部分が多い<sup>(注51)</sup>。あるいは、城柵側の鉄関連技術の管理が厳密であり、蝦夷側への流出が少なかった事実を示すものかもしれないが、基本的には前代同様の状況といえそうである。

#### 平安時代中期（9世紀末～10世紀中葉）／変革期

9世紀後葉、北奥地方においては考古学上の大きな画期が訪れる。たとえば、秋田県内では、從来秋田城周辺に集中し、同城のコントロールの下操業されていたと考えられる鉄生産関連遺跡が、9世紀後葉を画期として、米代川下流域に出現するとされる<sup>(注52)</sup>。米代川下流域は一挙に集落が増え、たとえば能代市十二林遺跡など、製鉄炉・鍛冶構造・炭窯・土師器焼成構・須恵器窯等が一体となった複合生産遺跡も見られるようになる<sup>(注53)</sup>。

津軽地方においても同様の状況であり、集落数の急増ならびに分布の拡大化が認められる。五所川原須恵器窯の操業や、本来は北海道系の土器様式である擦文土器が青森県内で散見されるようになるのも当該期頃からと考えられる<sup>(注54)</sup>。

これらの動態が、いかなる社会状況によってもたらされたのかは明らかではないが、文献等では、陸奥出羽両国において住民の多くが課役を忌避して「奥地」へ逃亡するという記事が9世紀中葉（承和年間）頃から、盛んに見えるようになるという。この場合の「奥地」の比定については、時空的な変化があるものの、郡制施行地から相対的に離れた地と理解されている<sup>(注55)</sup>。

さらに、9世紀後葉には、秋田城司の苛政に対して男鹿・能代・米代川流域等の村々が反乱（元慶の乱）を起こすが、その直後には「国内黎氓、苦來苛政、三分之一、逃入奥地。（「日本三大実録」元慶三年三月二日条）」の記事が見え、同乱の勃発前後には住民の三分の一に及ぶ多くの人々が「奥地」へ逃亡している状況が看取される。同記事は、元慶の乱収束後を受けて記録されたものであるから、この場合の「奥地」は米代川流域以北の津軽地方を含めた範囲を意味する可能性が高い。あるいは津軽地域において当該期に認められる集落の急増現象は、これらの混乱が波及した結果とも考えられる。また、米代川流域以北における須恵器窯や鉄生産関連遺跡等の急増についても、原因を元慶の乱前後の律令国家側の懷柔策もしくは処理策に求める説がある<sup>(注56)</sup>。

当該期の集落跡においては、刀子を中心に鋤先・鎌・手鎌<sup>(注57)</sup>といった鉄製農具が普通に見られるとともに、紡錘車もほぼ鉄製に置換される（図12）。出土例は少ないものの、鉄鍋もこの頃から出現する。煮炊具として用いられたのか、鉄素材として搬入されたのかは判然としないが、当段階ではカマドと土師器甕・壺を用いた煮炊きが支配的であるため、後者の可能性が高いと思われる。

出土（遺存）パターンは、前代に引き続き特定の竪穴住居跡への集中化現象が見られる集落（図21・22）とともに、鉄器の遺存率が比較的高く、各竪穴住居から普遍的に出土する集落（図23・24）が認められる。なかでも南郷村砂子遺跡<sup>(注58)</sup>・八戸市風張（1）遺跡<sup>(注59)</sup>等、馬淵川流域における武具（鐵鎗）の遺存率の高さはきわめて特異な状況といえるが（図19）、武具のなかでも鉄鎗のみが突出し

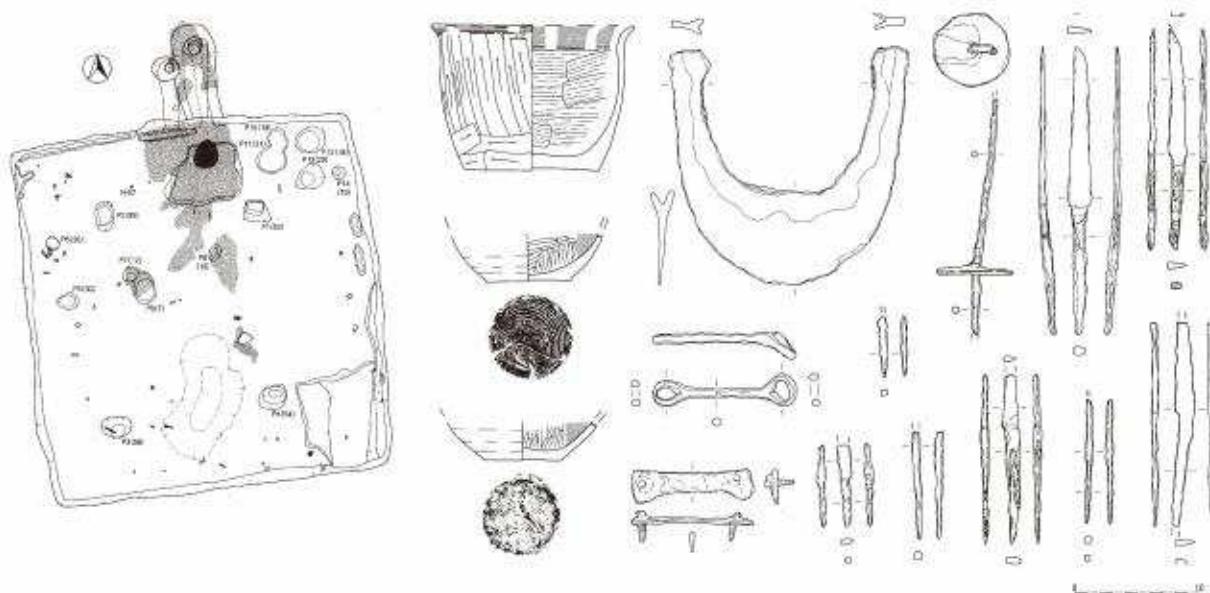


図12 岩ノ沢平遺跡（八戸市）／B-40号竪穴住居跡：100前

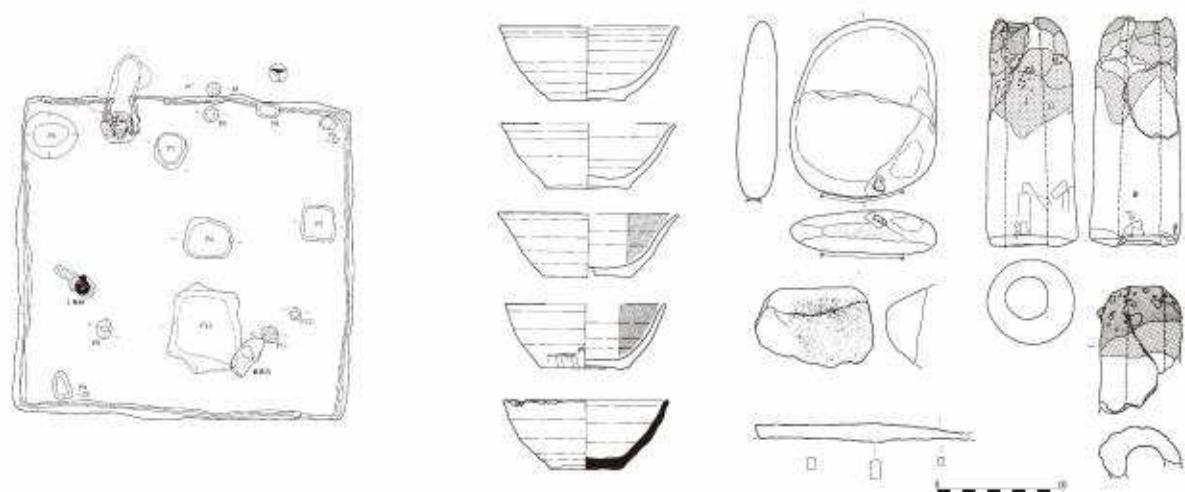


図13 安田 (2) 遺跡（青森市）／第1号鉄関連遺構：100前

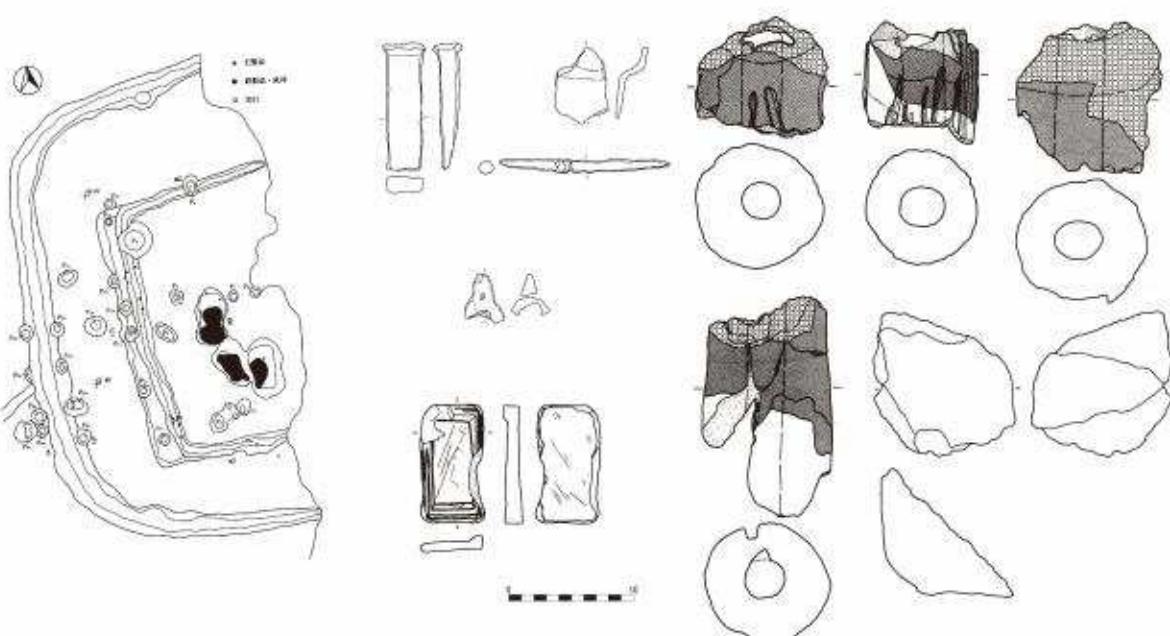


図14 山元 (2) 遺跡（浪岡町）／第1号鍛冶遺構：100後

ているとともに、竪穴住居跡あたり1~2点の遺存にすぎないため、戦闘用ではなく狩猟用とする見解もある（注80）。

また当該期から八戸市岩ノ沢平遺跡（注81）・平賀町鳥海山遺跡（注82）等、鑿・鉄鋤等の鍛冶具を出土する集落が現れるとともに、鍛冶構造あるいは羽口・鉄滓・砥石等の関連遺物もこの頃から急増し（図13）、ほどなく「1集落1鍛冶構」といった状況となる。鉄器加工・生産の本格的な開始期と位置づけられるが、極短時間で一気に普及した要因としては、元々蝦夷社会に鍛冶技術や知識が潜在していた可能性が考えられる。同時に、当該期の鉄器需要を賄えるほど大量の鉄素材が存在したことが前提となり、そのためには鉄の生産ならびに流通体制の変革を想定せざるを得ない。

たとえば、馬淵川流域においては、この頃から鍛冶関連遺物の多い山間地の集落と、鉄器が多いものの鍛冶関連遺物が極端に少ない低・中位段丘平坦地の集落が見られるという（注83）。これらの現象も、鉄器需要の拡大に伴って、燃料の豊富な山間地に鉄器生産機能が分離移行した結果とも考えられ、鉄器遺存率の高い集落は、そうした職能的集落であった可能性もある。

一方津軽地方においては、鉄生産遺跡が、資源（砂鉄・粘土・木炭等）の豊富な八甲田山北麓・梵珠山麓・岩木山北麓等に出現する（注84）。これらはいずれも当該期に集落が急増する地域と重なることから、急激な鉄需要に対応した地域内供給型の操業と考えられ、小規模な生産体制であるものの、専業化へ向けての胎動ととらえられる。また、当該域における鍛冶構・遺物には、土鈴・土玉や錫杖状鉄製品・蘇手状刀子等の特殊な遺物が伴う例が知られている（注85）。土鈴・錫杖状鉄製品は、ともに太平洋側を中心に出土することが知られており、前者は工人集団に関係する遺物（注86）、後者については神仏習合の要素をもった雑密系の祭祀具と推定されている（注87）。当該域における鍛冶技術の系譜や担った人々の信仰形態を考えるうえで興味深い現象である。

流通面においては、当該期から生産が始まる五所川原産須恵器が、北奥地方ならびに北海道全域に流通し、当初から広域流通を念頭に置いた操業形態であることが知られている（注88）。同時に陸奥湾周辺域において擦文土器の出土も目立ち始めることから（注89）、おそらくこの頃から陸奥湾・太平洋ルートを通じた交易体制に転換が訪れ、北海道への鉄素材・鉄器流入も本格化すると考えられる。

当該期は、9世紀後葉を画期とする急速な集落増ならびに各種生産活動の進展によって、鉄器需要が大幅に伸び、それに対処するための鉄生産・鍛冶技術の拡散拡大と、職能集団の顕在化、海峡交易の拡大等、各分野の変革が相乗的に進行した時期と位置づけられる。

#### 平安時代後期（10世紀後葉～11世紀中葉）／発展期

10世紀後葉、北奥地方においては再び大きな画期を迎える。指標の一つは、集落立地ならびに形態・構造の変化である。前代集落の大半は、当段階に継承されることなく廃絶し、丘陵や台地などに立地する集落が継続、もしくは新たに出現する。したがって、前代の集落が集中する三八・上北地方ならびに東青・中弘南黒地方においては、集落が急激に減少するよう見える。一方、前代から新たに集落が形成される津軽半島や西海岸部においても、集落立地は高位段丘面や丘陵が主流となり、前代の主体であった沖積地に接する低位段丘集落は限定的となる。そして殆どの集落は、壕や柵を巡らした区画集落へと移行する。区画集落の出現については、前代からの急速な経済発展に伴って生じた土地や水利・交易を巡る争いなど、地域間（集落共同体）相互の利害関係が想定され、その過程には集落

の統合組織化・序列化の進行が看取される<sup>(注70)</sup>。

二つ目の指標は、土器様式の変化である。須恵器や土師器は減少傾向となり、律令期以来続いた食器様式は終焉を迎える。食膳具が木器に置換される一方、小皿・小壺ほか、把手付土器・内耳土器・羽釜等当該域特有の器形が新たに組成に加わる。限定的ながら、煮炊具として鉄鍋・内耳鉄鍋が導入されるのもこの頃からと考えられる。

もう一つの指標は、津軽海峡交易を軸とした交易圏の顕在化である。当該期から急激に出土量が増える擦文土器の出土状況からは、陸奥湾沿岸域・岩木川流域・馬淵川流域の三地域に大別され、それらは海峡を越えた北海道との経済交流の差異に由来するものと考えられる。すなわち、太平洋・陸奥湾ルートを通じて道央部と連携する陸奥湾沿岸域、日本海・岩木川ルートを通じて道南部と結びつく岩木川流域、北海道との交流の痕跡が目立たない馬淵川流域となる<sup>(注71)</sup>（図15）。

前代よりいち早く活性化し始めた陸奥湾・太平洋ルートに対し、当該期からは岩木川・日本海ルートが隆盛となることが推定される<sup>(注72)</sup>。鉄素材や鉄器もこれらのルートを通じて、北海道へもたらされたものと考えられるが、鉄器の微量元素分析によれば、時期・地域によって鉄素材の組成が変化するとともに、北海道・津軽地域の組成比はほぼ一致、県南地方は異なるという<sup>(注73)</sup>。これらの考察は、時期・地域によって原料鉄の流通ルートが異なることを示しているとともに、当該期における北海道の鉄器流入に関しては、津軽地方が大きく関与していることをうかがわせる。

鉄生産遺跡は、従来の米代川下流域や八甲田山麓に代わって、主として米代川中～上流域・岩木山麓において集中的に見られるようになる。いずれも従来の集落内経営とは規模・供給範囲の異なる集中・專業的な経営であり、日本海交易を前提とした北方への広域流通を目指したものととらえられる。それらの経営主体については、在地勢力もしくは国家側の積極的な関わりが考えられるが、当該期における経済活動の活性化、区画集落発生に見られる地域統合への動き、政治段階からすれば、前者としても格別奇ではない。

なお、区画集落を主とする当該期の集落からは、自給的とするにはあまりにも多量の羽口・鉄滓等が出土するとともに<sup>(注74)</sup>、複数の精錬遺構・鍛冶遺構が認められることから、專業的な鉄生産とは異なる形態の精錬・鍛冶一貫による鉄器生産が行われ、集落外へ供給されたものと考えられる。

当該期の鍛冶作業は、堅穴住居内の鍛冶炉において行われる例や（図17）、専用の工房で行う例（図14）が認められる。いずれも、円形もしくは梢円形状の火窯炉であり、棒状鉄器や鉄鍋等の既存鉄片を利用して、鉄器の生産・加工を行って



図15 古代の交易模式図（10世紀後葉～11世紀）

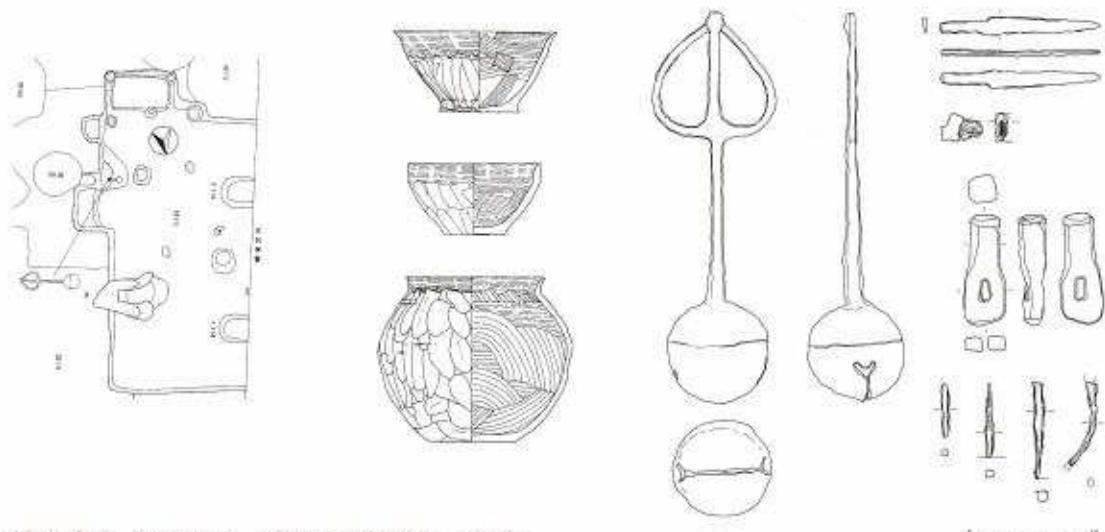


図16 五輪野遺跡（尾上町）／第33号住居跡：10C後

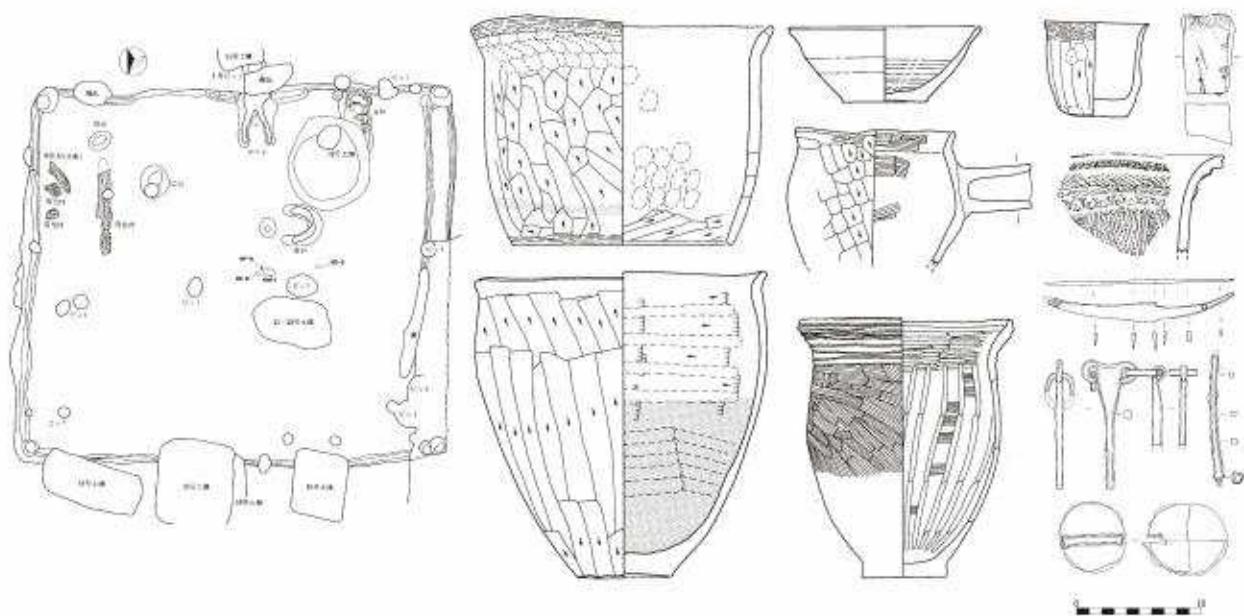


図17 蓬田大館遺跡（蓬田村）／14号住居址：10C末～11C初

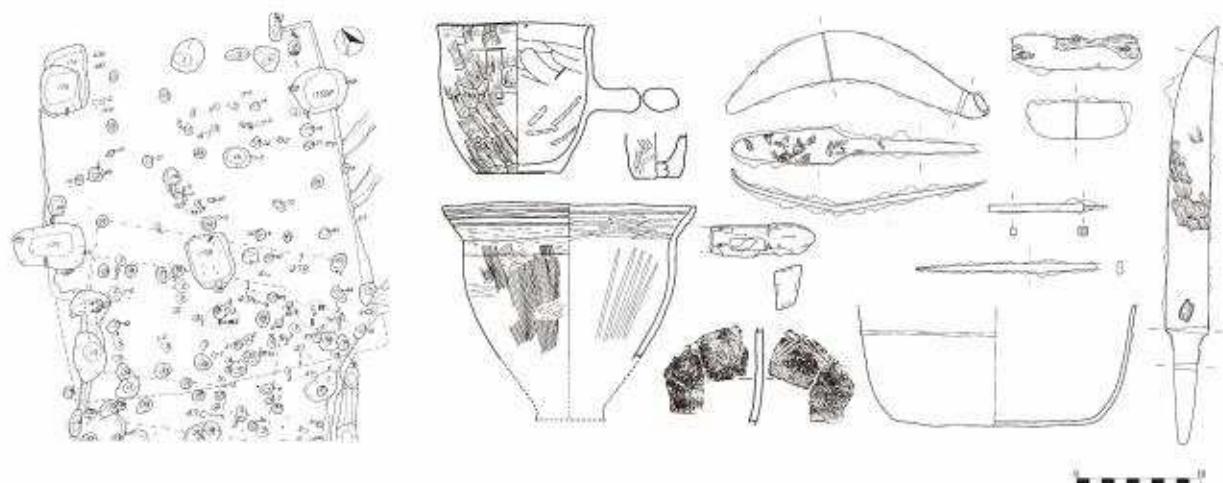


図18 古館遺跡（碇ヶ関村）／第47号跡：11C前～

いたと考えられる。鍛冶作業に伴う祭祀具は、土鉢が急減し、鉄鉢・錫杖状鉄製品・鍔手状刀子等が卓越する（図16・17・表1）。また、集落出土の鉄器は、刀子・農具に加え、斧・鎌・鑿等の工具が一定量見られるようになる（図18）。

当該期は、前代の変革から約一世紀を経て、拡大の一途をたどった各種生産が、集落内消費を上回り、集落外・国外へ輸出された時期である。その波は、効率を求めて次第に分業化・専業化へと向かうとともに、生産・流通手段の拡大は、地域間の対立を招き、区画集落を生じせしめたと考えられる。生活様式も、北奥地方特有のものへと変容する。経済発展を背景として、北奥地方社会が相対的な自立と新たな政治段階へ進みつつある様子が看取されるのである。それらの流れの中から地域豪族層が台頭し、やがて広域を統べる統一勢力の誕生によって区画集落は役割を終えると考えられる。

遺跡	市町村	土鉢	鉄鉢	錫杖・鉄製品	鍔手刀子	時期
朝日野	青森市	○				80後～100前
鶴見(1)	浜田町	○				80後～100前
鶴見(2)	五所川原市	○				80後～100前
鶴見(4)	五所川原市	○				80後～100前
鶴見(12)	五所川原市	○				80後～100前
山元(2)	浜田町	○				80後～100前
鶴見(2)	浜田町	○				80後～100前
奥津山	牛賀町	○				80後～100前
舟子	南郷村	○				80後～100前
羽根平(1)	浜田町	○	○			80後～100前
羽根(4)	浜田町	○		○		80後～100前
赤木平(4)	六ヶ所村	○				80後～100前
月ノ口	七戸町	○				80後～100前
朝日山(2)	青森市	○				80後～100前
松九	浜田町	○				80後～100前
山元(3)	浜田町	○				80後～100前
鶴木	青森市	○				80後～100前
松山	浜田町	○				80後～100前
神岡町	会津町	○				80後～100前
船ノ沢平	八戸市	○				80後～100中
上仁崎	八戸市	○				100前～中
黒坂(1)	八戸市	○				100前～後
高木	浜田町	○				100前～後
高木政綱	浜田町	○	○			100後～110
種見城跡	船ヶ沢町	○	○	○		100後～110
宮窓	弘前市	○				100後～110
監野堂	浜田町	○				100後～110
古船寺	尾上町	○	○	○		100後～110
移木平	大鰐町	○	○			100後～110
越田大蛇	浜田町	○	○			100後～110
深瀬平	浜田町	○	○	○		100後～110
大光寺新規跡	平賀町	○				100後～110
中里城跡	中里町	○				100後～110
高城(1)	黒石市	○				100後～110
有川	田舎館村			○		100後～110
古釜	船ヶ瀬村	○		○		100後～110

表1 祭祀具出土状況

### 平安時代末期（11世紀後葉～12世紀）以降／新段階

続く11世紀後葉～12世紀代は、列島規模で政治的な再編が進行する時期である。自立性を高めつつあった北奥地方にあっても、前九年後三年の役を経て、朝廷の支配下におかれることとなる。実質的な支配者奥州藤原氏の下、津軽地域の建郡と陸奥国編入が行われ、新たな段階へと移行する。

この間に区画集落ならびに、土師器・擦文土器ほか前代までの土器様式がほぼ姿を消し、遺構・遺物ともに一気に減少する。背景には社会構造の変化、遺跡の立地変化、食器の木器・鉄器への完全置換、建物構造の変化等が潜在すると考えられ、大きな画期を想定すること可能である。

したがって、鉄・鉄器生産、集落内における鉄器使状況も考古学的には把握できない状況であるが、前代までの鉄器生産の専業化・広域流通化への流れから推察するならば、小規模な鉄生産は衰退し、より大規模な鉄生産地に集約される一方、鉄素材・鉄器の交易は量・質ともに拡大するものと考えられる。

### 遺存鉄器からみた北奥社会（まとめに代えて）

#### ①鉄器組成(注75)ならびに遺存率の変遷（図19・20）

北奥地方における鉄器の本格的な導入は古墳時代と考えられるが、集落における利用状況は明らかではない。一般集落において、鉄器がある程度出土（遺存）し、導入期と目されるのは7世紀前後と考えられる。汎用工具である刀子を主体に、絶対量は少ないものの鎌・鍬（鋤）先等の農具が伴う。刀剣類・馬具等の出土は少なく、殆どは終末期古墳等の副葬品として見られるのみである。

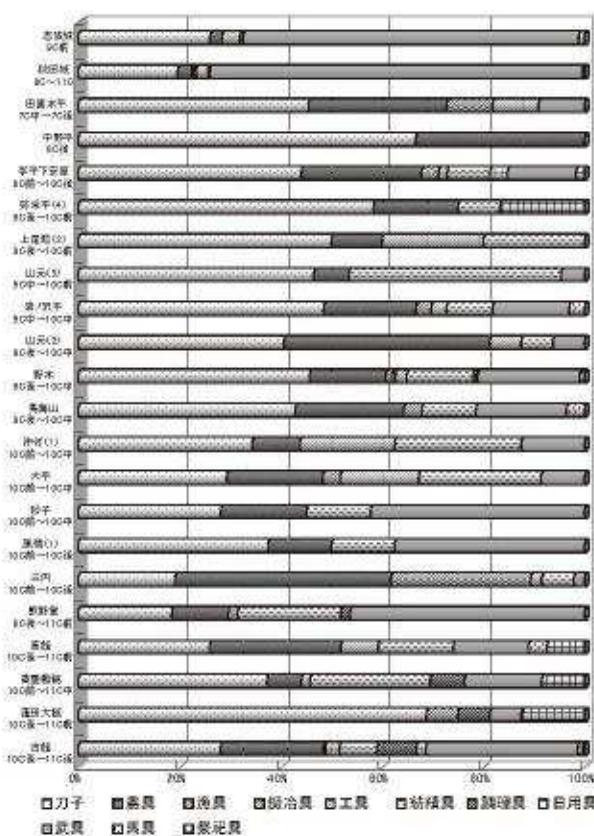


図19 鉄器遺存比率

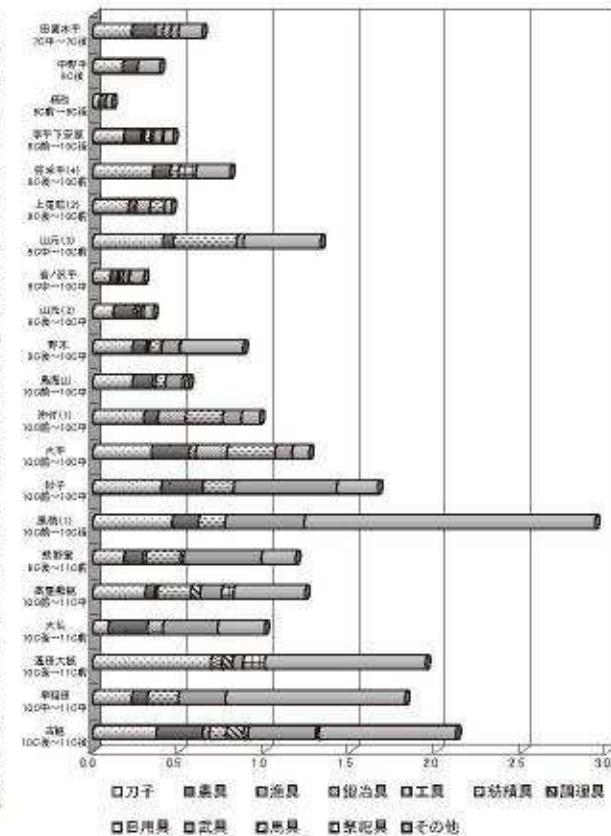


図20 竪穴住居跡1軒あたりの鉄器遺存数

集落全体の遺存点数そのものは少なく、竪穴住居跡1軒あたりの遺存量は0.2~0.6、遺跡毎の偏差が大きいものの数軒から5軒に1点程度の割合に過ぎない。あくまで遺存した鉄器に基づくデータであり、実態を表すものではないが、未だ稀少性の高い性格が読みとれよう。

こうした一般的な状況において、特定の竪穴住居跡への鉄器集中遺存現象が見られるとともに、小札・蘇手刀等が出土した百石町根岸(2) 遺跡第7号住居(注76)のように、量的な集中に加えて、質的にも他から隔離している例が認められる。おそらく、鉄器が威信財としての役割を果たしていると考えられ、多量の副葬品がみられる終末期古墳の成立と併せて、首長権の確立並びに階層差の拡大という背景が理解されるのである。

9世紀後葉以降の変革期においては、一気に鉄器の生産・加工技術が普及する。農具の出土が一般的となるとともに、鉄製紡錘車への置換が進行する。また少ないながらも鉄鍋・直刀等の武具・馬具・工具・鍛冶具・宗教具等様々な鉄器が見られるようになる。

各集落の、竪穴住居跡1軒あたりの遺存量は0.4~1.2、相変わらず遺跡毎の偏差が大きいものの、数値的には倍増している。特定の竪穴住居跡への集中遺存傾向は、当該期においても継続して見られるが、鉄器の普及により、前代よりも階層差が反映されにくく状況である。一方、当該期から大鷲町大平遺跡(注77)や南郷村砂子遺跡(注78)のように、竪穴住居跡1軒あたりの遺存量が1.5~3.0に及ぶ、遺存率の極端に高い集落が出現する。前者は当該期から明確化していく職能的(工人)集落、後者は突出した鉄鎌の遺存に表徴される馬淵川流域の特性として理解される。

10世紀後葉以降の発展期においては、当該期に出現する内耳鉄鍋ほかの調理具、鉄鎌に代表される武具、工具、祭祀具の定量存在に特徴づけられる。また、「その他」とした用途を確定できない多種

多様な鉄器が多量に出土するのも当該期の一般的傾向である。これらの鉄器が遺存率を押し上げた結果、竪穴住居跡1軒あたりの遺存数量は1.0～2.0となり、前代に比してさらに倍増する。鉄・鉄器生産がピークを迎え、低価格の鉄器が多量に流通した結果と考えられる。遺跡毎の偏差も小さく、ようやく鉄器が一般化した時期と評価される。

集落単位の遺存鉄器の組成・数量の検討からは、上記のような鉄器普及ならびに位置づけの推移を想定することが可能である。画期は7世紀前後、9世紀後葉、10世紀後葉、12世紀初頭に求められ、他の考古学的知見から得られる画期と略一致することが判明している。

## ②集落内の鉄器遺存状況

上記において、北奥地方における鉄器の出現から普及発展までを、各期集落の遺存率で概観した。一方、集落内における遺構単位の遺存状況については、どのような傾向がうかがわれるであろうか。本項では、六ヶ所村沖附（1）遺跡<sup>(注79)</sup>、大鶴町大平遺跡<sup>(注80)</sup>を例に挙げ、遺存鉄器から類推される竪穴住居跡間の諸関係について、些かの試案を述べるものである。

### 沖附（1）遺跡

沖附（1）遺跡は、尾駿沼南岸の段丘上（標高約60m）に立地する。灰釉陶器をはじめとする出土遺物の特徴から10世紀前葉から中葉にかけての集落遺跡と考えられる。3つの調査区から全く重複のない状態で37軒の竪穴住居跡が検出されており、I～III期の変遷とともにカマド構造の類似する竪穴住居跡同士が集中的な配置を呈することが知られている<sup>(注81)</sup>。

カマド構造の違いに基づく竪穴住居群の集中領域は、各期とも4～5単位認められ、単位毎に移転を繰り返している様子が看取される（図21）。基本的に1～2軒の中・大型住居と、1～3軒の小型住居から構成される各領域には、それぞれ鉄器の集中遺存住居が存在するが、前者の住居跡に遺存される例が多いようである。

以上のように、当該集落は、複数の竪穴住居群から構成される領域の集合体としてとらえられる。現在のところ、当該領域の性格に言及できる材料は見あたらないが、あえて仮定するのであれば主屋（母屋：主世帯）ならびに副屋（離れ：支世帯）・倉庫・工房等諸施設から構成される「家」空間もしくは世帯共同体ととらえることができるかもしれない。その場合、鉄器は各「家」共同所有であり、主屋において集中管理されることが多いと解釈される。

### 大平遺跡

大平遺跡は、平川上流の右岸段丘上（標高約135m）に立地し、平野部との比高差は約60mある。出土遺物の特徴から、やはり10世紀前葉から中葉にかけての集落遺跡と考えられ、ほぼ重複のない状態で50軒の竪穴住居跡が検出された。そのうち17軒が焼失家屋であり、うち3軒から12点の木器荒型が出土している。また、先述したように工具を中心とした鉄器遺存率が高く、職能集落としての性格が推定される遺跡である。

当該住居群を、土師器口クロ調整壺・持子沢系須恵器壺・長頸壺が出土するI群ならびに、土師器ケズリ調整壺を主体とするII群に大別すると、等高線に平行するように複数の竪穴住居群集中領域の

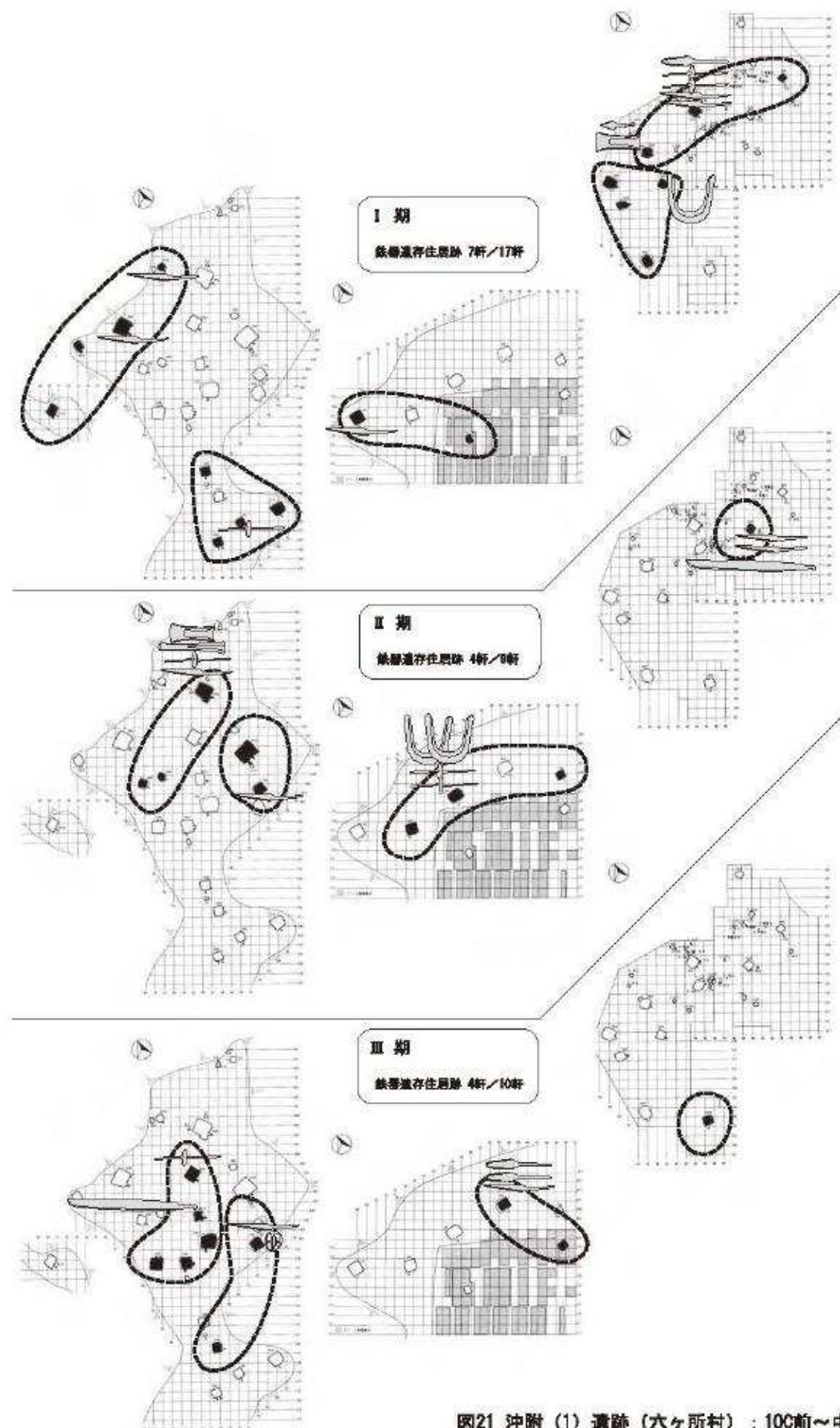


図21 沖附(1) 遺跡(六ヶ所村) : 100前～中

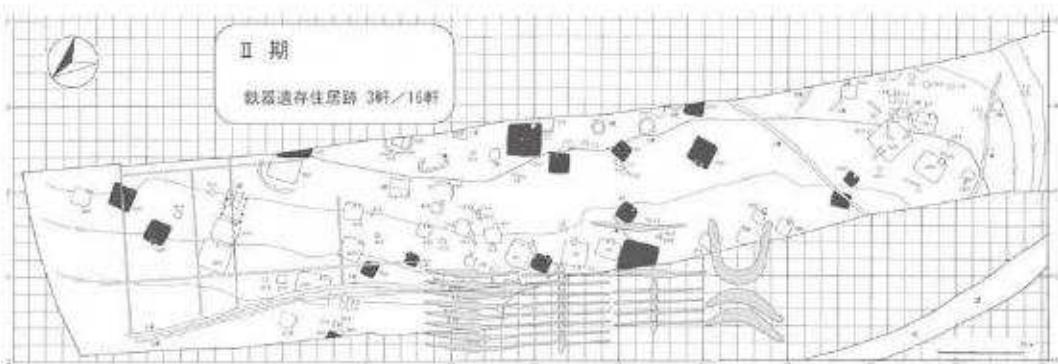


図22 山元(3) 遺跡(浪岡町) : 10C前

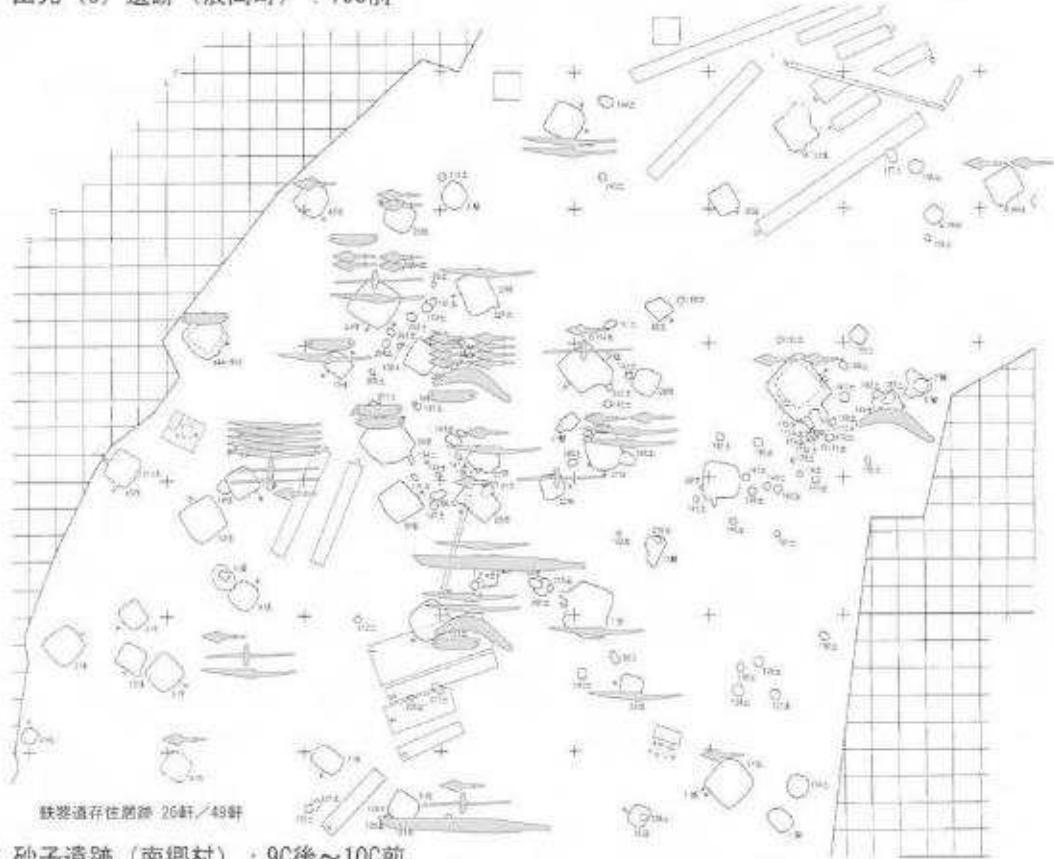


図23 砂子遺跡(南郷村) : 9C後～10C前

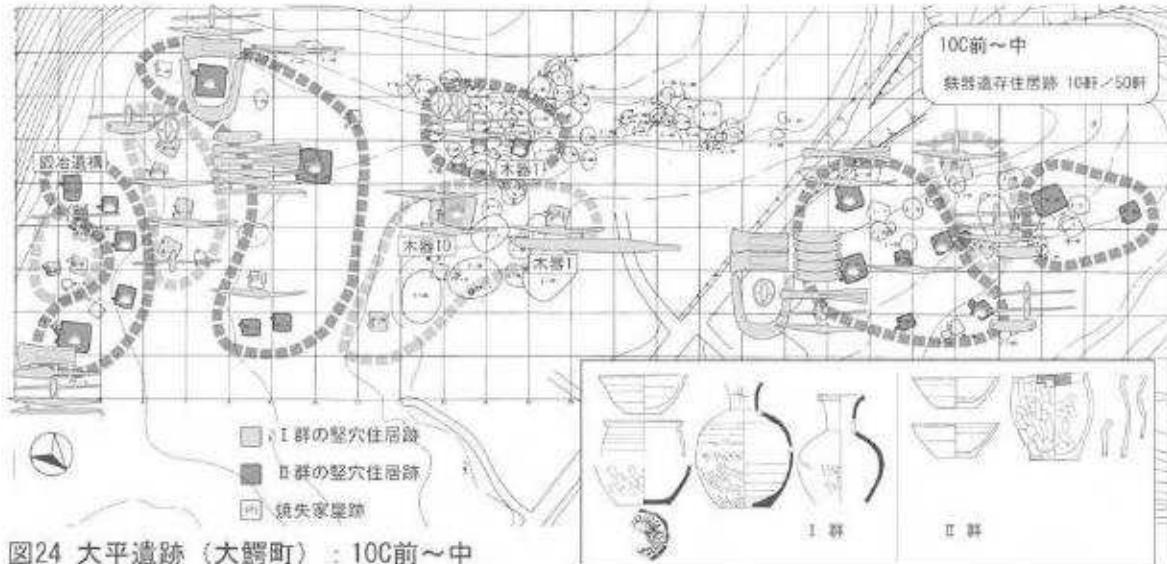


図24 大平遺跡(大鰐町) : 10C前～中

存在が認められる（図24）。I群・II群領域は相互に隣接するとともに、各領域は沖附（I）遺跡同様、1～2軒の中・大型住居と、1～4軒の小型住居から構成され、それぞれ鉄器集中遺存住居跡が認められる。I群領域は、刀子・紡錘車が集中、またII群領域においては5点以上の鉄器や斧・鑿等の工具が遺存する住居跡・石組力マドを有する住居跡・焼失家屋等が集中し、住居構造ならびに遺存鉄器の質の違いが認められる。

I群とII群領域の性格については、時期差とも考えられるが、遺存鉄器の質の違いに着目するならば、機能空間の相違と推定される。当該集落は、中央部の領域から手斧・鑿成形による木器荒型が多数出土していることから、木器生産過程の荒型成形作業を担った木地師集落とも推定されている（注82）。対応する成形工具が、他のII群領域に集中遺存することから、同領域は工人の作業領域と推定されるとともに、集落内における分業体制が存在し、II群各領域は作業内容に対応した存在と看取される。一方、紡績具が卓越するI群領域は、工人と配偶者・家族の居住領域と考えられ、当該集落の在り方は木器製作作業の各段階に応じて、作業領域と居住領域がセットとなっていることを示すものと推察される。

以上2遺跡について、鉄器の遺存状況から、集落内構造について簡単な考察を試みた。両遺跡とも複数の竪穴住居群から構成される領域が想定され、沖附（I）遺跡にあっては「家」領域、大平遺跡にあっては作業領域と居住領域ととらえた。いずれの場合も、律令期の馬淵川流域のような階層差と求心力を見出すのは困難であるが、それらの集落間における構造の違いが、時期差もしくは地域差・集団差に基づくものなのかなは現状ではわからない。今後の多様な集落の類例と分析が必要であるが、その際に遺存鉄器が些かの示唆を与えることは間違いない。

#### 注

- 1 AMS法年代を巡る、近年の弥生時代の始まりに関する議論のなかで、鉄器の年代観が焦点のひとつとなっている。とくに導入期の鉄器の解釈については賛否両論の齟齬が大きい部分である（「特集 弥生開始年代」「考古学ジャーナル」510）。
- 2 本稿では、おおむね北緯40°以北の、青森県全域ならびに秋田・岩手両県北地域、いわゆる円筒土器文化圏の本州側地域を指す。
- 3 横 善光ほか 1974 「青森県大間貝塚調査概報」「考古学ジャーナル」99
- 4 青森県教育委員会 1995 「板子塚遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
- 5 鈴木 信 2002 「北海道における道具の鉄器化の進展-論旨-」第30回古代史セミナー 東京 グループα「古代国家と周辺世界」資料
- 6 青野友哉 1999 「大洞～恵山式土器の墓と副葬品—研究成果と今後の課題—」『日本考古学協会1999年度鉄路大会 海峡と北の考古学—シンポジウム・テーマ2・3資料集Ⅱ—』
- 7 木村 高氏は、石鎚の形態分析等から、質量とともに第8号土塙墓の特殊性を導き、階層差を表徴するものとしている。  
木村 高 1997 「弥生時代・統繩文化の墓—板子塚遺跡土塙墓出土遺物の検討—」「青森県考古学」第10号
- 8 当該小鉄片は、覆土上層からの出土であるが、当該期の土塙墓においては、塙底とならんで塙口付近（埋土内・直上）への副葬（供獻）例も知られている。（注6同）
- 9 菊池俊彦氏は、鉄路市貝塚町1丁目遺跡出土鉄片ならびに羅臼町植別川遺跡出土の刀子は、アムール流域よりサハリンを経てもたらされたものと推定している。菊池俊彦 1990 「北方大陸からの鉄」「北の鉄文化シンポジウム予稿集 鉄をとおして北の文化を考える—古代末～中世を中心として—」
- 10 阿部義平 1999 「蝦夷と倭人」シリーズ日本史のなかの考古学
- 11 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会—北奥地方社会の形成と交流—」「古代蝦夷の世界と交流」
- 12 能登谷宜康 1999 「福島県内における製鉄・鍛冶遺構の調査研究の現状」「東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産 1999年度（第6回）鉄器文化研究集会資料集」

- 13 小林克 1991 「農耕社会に南下した狩猟採集民」『考古学ジャーナル』341
- 14 盛岡市教育委員会 1997 『永福寺山遺跡』
- 15 注10同
- 16 八戸遺跡調査会 2001 『田向冷水遺跡Ⅰ』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第1集
- 17 小保内裕之氏のご教示による。
- 18 注5同
- 19 福田豊彦1996 「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』57
- 20 福田豊彦1995 「鉄を中心とした北方世界」『蝦夷の世界と北方交易』
- 21 熊谷常正1990 「古代東北の鉄生産」『北の鉄文化』岩手県立博物館
- 22 福田豊彦氏は、律令国家の蝦夷対策としての製鉄兵站基地と位置づける（注20同）。
- 23 注21同
- 24 八木光則 1996 「蝦夷社会の地域性と自立性—陸奥を中心として—」『古代蝦夷の世界と交流』
- 25 下田町教育委員会 1988 『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 26 八戸市教育委員会 1991 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書X 丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集ほか
- 27 注24同
- 28 八戸市教育委員会 2002 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書XIII 丹後平古墳群 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第83集ほか
- 29 注30同
- 30 下田町教育委員会 2003 『下田町内遺跡発掘調査報告書6 十三森（1）遺跡・天神山遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第19集
- 31 百石町教育委員会 1995 『根岸（2）遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第4集
- 32 八戸市教育委員会 1989 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書VII 田面木平（1）遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 33 青森県教育委員会 1991 『中野平遺跡 第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書134集
- 34 たとえば百石町根岸（2）遺跡における最大の住居である第7号住居（約10m四方）からは、小札・腰刀・刀子・砥石等が集中的に出土しており、首長クラスの住居と目されている。（注31同）
- 35 高橋 学 1996 「古代末の出羽—米代川流域の徹関連遺跡—」『季刊考古学』57
- 36 小松正夫 1996 「元慶の乱期における出羽国の蝦夷社会」『古代蝦夷の世界と交流』
- 37 青森県教育委員会 2003 『西浜折曾の関遺跡—西海岸広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書341集
- 38 高杉博章・木村徹次郎 1975 「津軽半島における擦文式土器の新例と問題点」『北奥古代文化』7
- 39 青森県市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 2000 『十三森遺跡—第86次発掘調査報告書—』市浦村埋蔵文化財調査報告書第11集
- 40 桜井清彦 1958 「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』
- 41 秋田城ならびに近隣の後城遺跡から、まとまった量の多条沈線文土器群が見つかっている（高橋 学 1997 「口縁部に沈線文をもつ土師器—秋田県域での事例—」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ 資料集—』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会）。当該土器の起源は秋田城周辺とも考えられる。
- 42 注24同
- 43 注24同
- 44 注35同
- 45 三浦圭介 1993 「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』
- 46 9世紀中葉に位置づけられる黒石市甲里見（2）遺跡第2号竪穴住居跡からは、土師器・須恵器とともに、土馬・勾玉・小形土器・つまみ型土製品等が出土している。（黒石市教育委員会 1989 『甲里見（2）遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告第8集）
- 47 宇部則保 2000 「馬淵川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』東北大学文学部考古学研究会会報3
- 48 八戸市教育委員会 1996 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書XII 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 49 八戸市教育委員会 1993 『殿見遺跡発掘調査報告書I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第49集
- 50 注36同

- 51 当該期の実情を反映しているとされる「延喜式」様物価法において、陸奥や出羽で、鉄の価格が他の2~3倍に及ぶこと、元慶の乱で焼かれた秋田城の武器の大半が皮製の甲や、木製の盾であったことから9世紀後半頃までは鉄生産が増大していなかったとする福田豊彦氏等の見解がある。(注20同)
- 52 注35同
- 53 秋田県教育委員会 1989『福井遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡』一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 秋田県文化財調査報告書第178集
- 54 斎藤 淳 2001「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『研究紀要』4 青森大学考古学研究所
- 55 熊田亮介 2000「九世紀における東北の地域間交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』84
- 56 注35同
- 57 青森県内における古代の鉄器平均7.5%を占める「手鎌」は鉄器の用途における課題の一つである。両端に目釘痕を残す片刃の形態の鉄器であるが、「穂摘具」あるいは「苧引金」等と称されているものを含む。もとより前者は穂類の収穫具としての位置づけから農具として、後者は麻の纖維を摘き取る紡績具の範疇として理解されるものであるから、厳密には用途が全く異なる用具として理解されているわけである。いわゆる「穂摘具」は、全国的には石包丁に換わって弥生時代末から古墳時代にかけて盛行し、稔熟の一定しない初現期の稻の穂首刈りに用いられたと解釈され、種の安定に伴って根刈り用の鉄鎌へと置換される性質のものであると解釈されている。
- 右の解釈に従えば、北奥地方における急速な稻作農耕の展開は、耐寒冷種の出現定着まで、念熟の不摘いもしくは不稔熟の割合が高いがために穂首刈りを余儀なくされ、平安後期まで「手鎌」が鉄鎌とともに併存したとも考えられる。その場合は時の経過とともに比率を減じて次第に鉄鎌への置換がみられるはずであるが、北奥地方においては古墳時代に出現が認められる鉄鎌よりも後出であり、律令期以降普及するようであり、時間の経過とともに漸減する兆候も認められない。
- 一方「苧引金」は、紡錘車とともに麻の栽培と麻糸の生産を意味する用具であり、古代の信州地方においては「コ」の字型の苧引金具が盛行するほか(岡田正彦 1996「長野県の鉄製品と製鉄・鍛冶関連遺物」「信州の人と鉄」)、中世においても同様の形態のものが普通に見られる。また、浪岡町山元(2)遺跡(青森県教育委員会 1995『山元(2)遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書171集)において、麻の実が付着した当該製品が出土していることも「苧引金」との解釈を有利にしているが、上記のごとく形態がやや異なること、また実際の出土例では必ずしも紡錘車とセットにならず、むしろ鎌と共に伴する例も多いこと等から疑問が残る。
- 本稿では疑問を残しながらも「穂摘具」的機能を優先させ、農具として取り扱ったが、実態は、汎用具として性格が強いものであろう。なお同様の見解を述べている浅田智春氏は、中世の「苧引金」は系譜が異なると推定している(青森県教育委員会 2003『野木遺跡Ⅲ 青森中核工業団地整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書281集)。
- 汎用の掘削具と考えることも可能な鍬(鏟)先や、狩猟用か戦闘用か評価の分かれる鎌についても同様であり、鉄器組成から生産等を規定するにあたっては、遺存の限界性も含めて慎重な検討が必要であろう。
- 58 青森県教育委員会 2000『砂子遺跡 八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書280集
- 59 八戸市教育委員会 1991『風張(1)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 60 注58同
- 61 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡 東北縦貫自動車道八戸線(八戸~八戸)建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書287集
- 62 青森県教育委員会 1977『鳥海山遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道青森県内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書032集
- 63 注47同
- 64 設楽政健 2002「青森県内の製鉄遺跡 一炉形状からの再検討ー」『青森県考古学』第13号
- 65 例えば、青森市朝日山(2)遺跡第205号竪穴住居跡ならびに外周溝からは、各種の鉄器とともに鋸杖状鉄製品・土玉ほか、鉄鉗・砥石等の鍛冶関連遺物が出土している(青森県教育委員会 2002『朝日山(2)遺跡V-県道青森浪岡線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告ー』青森県埋蔵文化財調査報告書325集)。
- 66 下山信昭 1996「東北地方における土鈴集成」『研究紀要』第1号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 67 井上雅孝 2002「鋸杖状鉄製品の研究—北東北における古代祭祀具の一形態—」『岩手考古学』第14号
- 68 三浦圭介 1991「本州の擦文土器の変遷と分布について」『一市川金丸先生古稀記念献呈論文集—海と考古学とロマン』

- 70 齋藤 淳 2003 「古代の区画施設を有する集落—古代環濠集落の景観—」『遺跡と景観』
- 71 注69同
- 72 注69同
- 73 赤沼英男 2000 「第3節 出土遺物の組成からみた砂子遺跡における鉄器製作とその使用」(注58同)
- 74 例えば当該期の区画集落である浪岡町高屋敷館遺跡においては、200点前後の羽口と20,000点以上の鉄滓が出土している（青森県教育委員会1998『高屋敷館遺跡 浪岡バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書243集）。
- 75 刀子、農具（鍔（鐵）先・鎌・手鎌）、漁具（鉛・釣針）、鍛冶具（鑿・金鉄・金槌）、工具（斧・ヤリ・ガナ・鑿等）、紡績具（紡錘車）、調理具（鍋・内耳鍋）、日用具（鉢・火打金等）、武具（小札・刀・鎧・刀装具）、馬具、宗教具（鈴・鎧杖）に分類した。分類における問題点については、注57参照。
- 76 注31同
- 77 青森県教育委員会 1980『大平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書52集
- 78 注58同
- 79 青森県教育委員会 1986『沖附（1）遺跡 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書100集
- 80 注77同
- 81 北林八洲晴 1987「第V章 分析・考察」『弥栄平（4）（5）遺跡発掘調査報告書 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書106集
- 82 三浦圭介 1995「古代」「新編弘前市史 資料編I-1 考古編」

#### 図表出典

- 図1 下田町教育委員会 1988『阿光坊遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書第1集 ほか を一部改変／図2 八戸市教育委員会 1991『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書X 丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集 を一部改変／図3 盛岡市教育委員会文化財調査室 1999『蕨手刀集成（第2版）』文化財資料集第2集 ほか を基に作成（分布図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）・20000（地図画像）を利用し、カシミール3D Ver8で作成）／図4 猿谷常正1990「古代東北の鉄生産」「北の鉄文化」岩手県立博物館 を一部改変・加筆／図5 八戸市教育委員会 1989『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書VII 田面木平（1）遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第34集 を一部改変／図6 百石町教育委員会 1995『根岸（2）遺跡発掘調査報告書』文化財調査報告書第4集 を一部改変／図7 青森県教育委員会 1991『中野平遺跡 第二みちのく有料道路建設に係る埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書134集 を一部改変／図8 宇部則保 1997「7・8世紀の沈線文土師器—青森県—」「蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムII資料集一』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 を基に作成（分布図は、国土地理院発行の数値地図50mメッシュ（標高）・20000（地図画像）を利用し、カシミール3D Ver8で作成）／図9 八戸市教育委員会 1996『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書XII 丹後平（1）遺跡・丹後平古墳』八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集 を一部改変／図10 八戸市教育委員会 1993『殿見遺跡発掘調査報告書I』八戸市埋蔵文化財調査報告書第49集 を一部改変／図11 東日本埋蔵文化財研究会北海道大会準備委員会 1997『第6回東日本埋蔵文化財研究会 遺物からみた律令国家と蝦夷 資料集』より転載／図12 青森県教育委員会 2000『岩ノ沢平遺跡 東北縦貫自動車道八戸線（八戸～八戸）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書287集 を一部改変／図13 青森県教育委員会 2001『安田（2）遺跡II 東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書303集 を一部改変／図14 青森県教育委員会 1995『山元（2）遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書171集 を一部改変／図16 青森県教育委員会 1997『垂柳遺跡・五輪野遺跡 南津軽広域農道改良事業に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書219集 を一部改変／図17 桜井清彦・菊池徹夫編 1985『蓬田大館遺跡』早稲田大学文学部考古学研究室報告 を一部改変／図18 青森県教育委員会 1980『碇ヶ関村古墳遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書54集 を一部改変／図19 志波城・秋田城については、津野 仁 1999「古代の鍛冶構造と鉄器生産—軍事と官衙造営の関連から—」『東北地方にみる律令国家と鉄・鉄器生産 1999年度（第6回）鉄器文化研究集会資料集』を基に作成／図21 青森県教育委員会 1986『沖附（1）遺跡 むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書100集 を改変／図22 青森県教育委員会 1994『山元（3）遺跡 浪岡バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書159集 を改変／図23 青森県教育委員会 2000『砂子遺跡 八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴う遺跡発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書280集 を改変／図24 青森県教育委員会 1980『大平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書52集 を改変／表1 井上雅孝 2002「鎧杖状鉄製品の研究—北東北における古代祭祀具の一形態—』『岩手考古学』第14号 を基に作成

# 考古学的分類に関する一考察

## —ひとつの記号学的見地からのアプローチ—

岩田 安之

### 1 はじめに

考古学で用いられる分類は分類学でいう類型分類が多い。中尾佐助氏によれば、「人間が頭脳によってやるいろいろのタイプの分類のやり方は、大分類として、類型分類、規格分類、系譜分類、動的分類」(中尾 1990:80)があるとする。類型分類とは、例えば考古学でいう、「形態で分類する」、「文様で分類する」などというさまざまな分類基準をその時々に応じて採用するという分類方法である。規格分類は数値による明確な分類で、考古学の分類例でいえば、器高が1mを超えた大型、0.5~1mまでは中型、0.5m以下は小型とする分類である。系譜分類は、例えば生物の系統樹をつくりあげるという作業である。つまり、生物でいえば生物の過去の歴史の分類であるため、その正確な分類は最終的には一つである。動的分類とは、「同一事象を異なったシステムで独立して分類した結果を、総合的にまとめあげた分類というもの」(中尾 1990:320)である。考古学でいえば、多変量解析が動的分類の1種類とすることができる。

先にも述べたように類型分類の特徴は、その分類体系の中で基準の選択の自由が無制限であることがある(中尾 1990:81)。よって考古学者が類型分類を行う場合、いかなる基準を選択するかが問題になる。つまり、分類基準が何かということをはっきりさせれば、分類を行った考古学者が何を目的に分類を行ったかが明らかになる。

しかし、誰にでも通用する客観的な分類基準など存在しない。上記でいう動的分類を使用し、考えられる限りのさまざまな遺跡、遺構、遺物の属性を取り上げて数量分析をし、類似性・相異性をとらえることができると反論する人はいるかもしれない。しかし、考えられる属性の数や質は人によって違うだろうし、分析後の類似性・相異性のくくり方も異なるてくるであろう。

このように分類することは、個人個人のモノに対する認知レベルの問題に還元されるのである。ここにおいて、分類することは、分類したその人の世界観の表明なのである(池田 1992:94)。現在、通説として採用されている編年観などは、広く認められている分類の判断に過ぎない(E.H. カー 1962:14)。

上述の問題意識を受け、本稿では、①人間が分類を行う過程というものはどういうことを少し考察し、②考古学分類を行うことの考察を少々してみたい。

### 2 分類すること

池田清彦氏はソシュール学者でもある丸山圭三郎氏の『文化のフェティシズム』という著書を引き、丸山氏の主張を次のようにまとめている。「コトバはあらかじめ存在しているモノに与えられた名称ではない。そもそもモノはあらかじめ存在などしていない。世界はコトバによって切り取られ、はじめてある同一性を与えられ、モノとしての存在を主張し始めるのである。ところが人はモノの存在を

絶対的なものとみなし、これを崇拜してやまない。これぞ根源的なフェティシズムである。」(池田 1992:14) 人間はコトバがあるからこそ、抽象概念をイメージすることができ、「非在の現前」(丸山 1984)を行うことができる。よって、分類することは、非在している現象を基準によって現前化させ、我々が認識できるようにするという作業にほかならない。分類がコトバによって行われる限り、分類には常に恣意性がつきまとう。分類以前に存在するア・ブリオリなモノなど存在せず、モノが意味をもつのは常に分類によって差異性、つまり二項対立的に相対的な価値が与えられたときであり、ア・ポステオリなものなのである。

分類することによって、現象は個人個人のオリジナルな知における世界観によって切り取られ、モノとして同一性を、相異性を与えられ、モノが何であるかの説明が可能になるのである。ここでいうオリジナルな知とは、個人個人が生きてきた過程で得てきたもの、つまりその地域、時代の人間のコードである。例えば、それは究極的にはコトバであり、ひいてはコトバによって概念化されたモノの見方ということができる。よって、分類することは存在させようとする現象としてのコトをあたかも存在しているようにみせることなのである。その際の分類基準は、分類者のオリジナルな知から導き出されたものであるから、その基準を示すことは、その分類者がどのようにモノをみているかを表明する意味、また他者がそれを吟味する意味で重要である。

他者が、それはどのような基準であるのか、その基準を的確にとらえることができれば、その分類を行った者がどのような目的で分類を行ったかが理解されやすくなるであろう。

### 3 分類基準の重要性

分類のための基準がいかに重要かは何度も述べてきたことである。中尾氏の言葉を借りれば、「クライテリオン<sup>①</sup>(分類基準)のシステムを変えれば、全植物を全く異なった分類体系で分類できる。(中略)分類は必要に応じて利用し、自分はまたおのれの独自の分類体系をつくり、それを駆使してみるべきであろう。それらの異なった分類体系は、何の支障もなく、共存できるはずである。現実問題としては、人間の数だけ異なった何かの分類体系が存在していると見た方がよいだろう。

一つの分類体系の中で、いろいろ論議が起こっていることが多いようである。その論議は、どうも分類基準の採否、その評価をめぐって起こっていることが多いようである。分類とその基準は二人三脚で走るのだから、片足である分類基準に問題が起これば、当然速く走れなくなるということになる。だからいかなる分類基準を選んで二人三脚の足を結び合わせるかは、非常に注意を払わねばならないわけである。」(中尾 1990:53)(下線筆者)。この「全植物」を「全遺跡、遺構、遺物」に置き換えてみると、この言葉が考古学にいかに必要かが理解されよう。

実際の分類を行う前に分類基準が属性の何を反映するのかをしっかりと検討して、分類するのが非常に重要である。大津忠彦氏の「古代東地中海沿岸地域における土器型式学－考古学的「器形」と文献史料に記された名称」(大津 1997)ではパレスティナでの例が示されている。しかし、この例がすべてに当てはまる訳ではないことを断つておく。

ランスは、「パレスティナのやきものの歴史を扱うとき、その専門家は、編年の範囲で次の 5 つの基準を基本的にもっている」(Lance 1981:43)としている。

①形(form)、②形の変異(form variant)、③装飾(decoration)、④胎土(ware)、⑤製作技術(manufacture)

(大津 1997の訳を踏襲した)。ランスは①から⑤までの基準で分類した結果は何を表すのかを次のように述べている。

①機能②時間③パレスティナ地域ではあまり重要ではない④技術の習熟度⑤製作技術の変化  
これらの分類基準は地域をパレスティナに限定してはいるが、分類基準と分類結果の関係にある一定の判断を下している。この判断をもとに、他者が分類を行った場合に、その分類が満足いかなかった場合には、上記の分類基準に立ち戻って議論することが可能になる。例えば胎土で分類された結果は、产地を示している場合があるという批判が起こった場合には、④胎土で行った分類は④技術の習熟度を表すという分類結果を再考する必要があるだろう。

分類基準が生み出す分類結果を常に検討し、分類結果が満足いかなかった場合は分類基準の採否が妥当でなかったとフィードバックして検討することが必要である。分類基準と分類結果を何度も検討し、分類基準と分類結果が整合性をもった時に、理論的仮説が提示できるのである。

#### 4 分類によって切り取られた変化、画期

属性というものは時間的流れのなかで欠落、追加、変容を繰り返していく。その変化の過程は革命的社会変化が起こらない限り、ほとんどが漸次的なものであると推測される。考古学的に設定された型式が細分化されていくのは、漸次的変化の一部分を抜き出しているといえる。新たな土器型式が加えられるということは、漸次的な変化の一部分を抜き出しているということである。だが、漸次的な変化の中でも変換期というものが設定可能な場合がある。その変換期が我々のいう画期である。

その画期は当時の人々が設定したものではなく、あくまで我々が設定し、切り取ったものである。我々がいかなる分類基準を探り、分類したかによって、その画期も変化することに気を付けなければならない。分類基準と分類結果が妥当で、ある画期が見いだせるということは、やはり何らかの変化が当時の社会にあったということを指摘しているから、その画期の意味の考察が可能になる。ここにおいて、当時の社会復元という考古学の目的の一つを理論的に考察していくことが可能になる。

#### 5 二項対立による理解

分類することとは究極的には二項対立でモノをとらえることである。人がモノに価値を見いだせるのはその差異性がそれぞれのオリジナルな知で確認できた時である。これは、人間がモノに差異を見いだす根本的な恣意性である。我々が、対象としている過去の人々にも当然モノをつくりだしている以上その差異を生じさせる恣意は存在している。我々考古学をやっている者が過去の差異を考えるにあたるにはどのような方法論があるであろうか。やはり、当時のコード（制度、約束事）を構造的に理解することである。上述したように、人間は究極的には二項対立でしかモノを理解することができないから、過去の人と我々がそのコードの違いを理解するには、究極的な人間の分類構造である二項対立から始めるしかないであろう。

ここでは、例えば中央と周縁という二項対立で縄文土器の型式を考察してみたい。例えば縄文時代の土器型式における中央とは一般的に保守的で変化に乏しいといえる。周縁は変化しやすいといえる。言い換えれば、中央の変化の乏しさというのは土器づくりの約束事がしっかりしているということであり、周縁ではその約束事が希薄になりがちであるということである。つまり中央では土器製作にお

けるコードが確実に規定されており、周縁ではコードは揺れ動いている。よって、型式どうしの接触から変化の起こり方とすれば、まず、周縁部分が変化し、中央は最後まで土器型式のコードを維持する、あるいはしようとする。具体的にいうと、中央はある程度漸次的に変化するが、周縁は約束事が揺らいでいるためにプラスティックに変化する場合が多いということである。このように考えると、揺らいでいない、あるいは変異の少ない土器変化のみられる時期、地域に上記の考え方をあてはめて、いわゆる中央と設定できた土器が純粋な型式と設定できるのでないだろうか。そして、周縁での土器のまとめは純粋な型式ではないにせよ、共時的変異、通時的変異の大きい型式と理解できる。ここにおいて、型式に中央と周縁という概念を適用させて、中央であるものを第一型式、周縁であるものを第二型式として理解したい。

ケーススタディとして、円筒式土器文化と大木式土器文化の中央とそれぞれの周縁ということが考えられると思う。筆者は、縄文土器については最近勉強し始めたばかりで、ここに縄文土器の例を提示するのは、先学者に対して大変恐縮であるが、筆者が感覚的に考えたことについて少し述べさせていただきたい。いわゆる縄文時代中期の東北地方北部、北海道南部に展開した円筒上層式と東北地方南部に展開した大木式土器の関係を円筒上層式の側から、中央と周縁の二項対立でみてみる。まず、青森県ではa～d式まで変化は漸次的である。秋田県も同様で、岩手はa、b式は漸次的変化、c、d式は大木式の文様が表現される。北海道南部でもa～d式までは漸次的変化であるが、d、e式で大木の文様が表現される。この上記に述べた両型式の関係は先学者がたびたび述べているし、両型式における定義設定の論争があることはいうまでもないが、中央と周縁という二項対立的に見方を変えた観点から、筆者の考えを述べさせていただくことをご容赦願いたい。現在の行政区画を用いるのは適切ではないし、しかも粗い見方であるが、中央は漸次的な変化の青森、秋田、周縁は影響されやすい岩手、北海道南部といえる。大木式土器が北進していったという見方で説明すると、北海道が青森より早く大木の影響を受けるというのは矛盾するかもしれないが、中央である地域では外部からの影響はあった場合でも、上述したようにコードが確実であるからそのコードが変容するまで時間がかかるということで説明ができる。大木式土器は北進したであろうが、中央であるコードが確実な青森地域では大木式土器は存在しても、円筒式土器に与える変化・影響は遅く、コードが揺らいでいる周縁である北海道南部地域では変化が早く起きたということである。このような中央(第一)型式と周縁(第二)型式が縄文時代を通じてあると考えられる。この方法は他の時代でも想定しうると考える。上記のケーススタディはあくまで浅学である筆者が感覚的に述べたもので、分析などもしていない。ここで強調したいのは、分類の最小単位である二項対立でモノを見るという視点、方法を強調したいということである。

そして同時に、すべての縄文土器の型式を同列に扱っていくことへの問題意識も提起したい。

## 6 おわりに

考古学という学問が分類に始まり、分類に終わると言つても過言ではないほど分類学に依拠している以上、その学問体系を深く考えていくことが肝要である。ただ何となく分類したというのではなく分類が正しいのか、また分類の目的は何か、分類したことによってどんな結果が得られたのかなどの議論が始まらない。想像的理論を生み出し、その理論をテストするための分類基準の明確な分類をし、その結果が暫定的理論として成立した場合でも、他の批判的なテスト可能性をいつも持ち続ける過程

が重要なのである

批判的合理主義者の哲学者カール・ボバーは「AINシュタインは自らの理論について、ある出来事は必ず起こるが、別のこととは起こり得ないと主張する。だからそれは、別の理論とは矛盾するので、もし起こればその理由の説明がつかず、理論が反証されることを認める仕組みになっている。」(関 1990:8) 科学的な理論というのは、どんな反証にも答えられる悪い意味で柔軟な理論ではなく、常に自らの理論を厳しいテストにかけられる用意があるものなのである。例えば、「明日は晴れるか曇るか雨が降るか雪が降るか」よりも「明日は雲一つない快晴」といった方がより厳密性が高く、反証される可能性も高い(関 1990:3)。科学的な理論とはこのようなもので、どうとでもとれるような理論は科学的ではない。

現在受け入れられている歴史観というものは、たまたま現在に適用されているだけであり、それが正しいとは限らない。我々の設定した時代区分は、時代と共に変化していくもので、現在設定されている歴史観は、我々の現在の社会をよく反映した歴史観である。例えば縄文時代と弥生時代というように、あたかも別の時代と設定されているが、他の分類基準を探った場合には双方の時代は同じ時代になってしまふかもしれないし、まったく別の歴史観がみえてくる可能性もある。そもそも縄文時代、弥生時代、古墳時代などという、～時代とは何であろう。原始、古代、中世、近世も同様に何であろう。これは当時の人々が認識したものではなく、我々に広く共有、認識、判断された歴史観である。また、これらの歴史観は我々が作り上げた枠である。その枠のなかで議論はいつも起こっているように見える。そして、その枠を超える理論が生み出されたとき、構造の見方が転換され、いわゆるパラダイム転換という現象が起きるのである。

E.H.カーラーは、歴史を知るにはまず歴史家を研究せよと述べている(E.H.カーラー 1962:27)「歴史というのは、歴史家がその歴史を研究しているところの思想が歴史家の心のうちに再現したものである。(中略)歴史家が何を捕らえるかは偶然にもよりますけれども、多くは彼が海のどの辺で釣りをするか、どんな釣道具を使うか—もちろん、この二つの要素は彼が捕らえようとする魚の種類によって決定されますが—によるのです。全体として、歴史家は、自分の好む事実を手に入れようとするものです。歴史とは解釈のことです。」

#### 謝辞

以下の方々には貴重な御意見をいただき、貴重な文献を貸していただきました。末筆ながら感謝いたします。中村哲也氏。木村淳一氏。斎藤慶吏氏。

#### 註

1)中尾佐助氏はいろいろなニュアンスを含めるためにクライテリオンという言葉を使用しているようであるが、本稿ではクライテリオンを基準と読み替えることにする(中尾 1990)。

#### 引用・参考文献

- 池上嘉彦 1984『記号論への招待』岩波新書  
池田清彦 1992『分類という思想』新潮選書

- 大川清・鈴木公雄・工藤普通1996『日本土器事典』雄山閣
- 大津忠彦 1997「古代東地中海沿岸地域における土器型式学—考古学的「器形」と文献史料に記された名称」『考古学雑誌』第82巻 第4号 59-77頁
- 大塚達朗 1996「(1) 土器—山内型式論の再検討よりー」『考古学雑誌』第82巻 第2号 11-25頁
- 大村祐 1999「山内考古学の一侧面—「山内考古学の見直し」に寄せてー」『考古学研究』第46巻第2号 112-122頁
- カーリー, E.H. 著 清水幾太郎 訳 1962『歴史とは何か』岩波新書
- クロード・レヴィーストロース著 荒川幾男・生松敬三・川田順造他共訳1972『構造人類学』みすず書房
- 小林達雄 2002『縄文土器の研究』学生社
- 小林行雄 1933a「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』第4巻 第8号 223-238頁
- 小林行雄 1933b「弥生式土器研究の前にーその説明に代えてー」『考古学』第4巻 第8号 239-242頁
- 坂本真弓 2002「大木系土器の受容傾向ー円筒土器と大木系土器の共伴事例からー」『研究紀要』7号 青森県埋蔵文化財調査センター 29-39頁
- 鈴木克彦 1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター 1-56頁
- 駿乗博己 1996「(1) 弥生時代の様式論」『考古学雑誌』第82巻 第2号 62-80頁
- 関雅美 1990『ポバーの科学論と社会論』勁草書房
- ジャック・ルゴフ他 二宮宏之編訳1999『歴史・文化・表象 アナール派と歴史人類学』岩波書店
- 高橋正勝1994「中期の土器 北海道南部の土器」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文時代の研究』4 雄山閣 10-20頁
- 茅野嘉雄 2002「いわゆる結節回転文から見た円筒下層式について」『専修考古学』第9号 3-24頁
- ド・ソシュール, フエルディナン, 小林秀夫(訳)1995『一般言語学講義』岩波書店
- 中尾佐助 1990『分類の発想』朝日新聞社
- 中島皆夫 1994「小林行雄の様式認識過程」『考古学史研究』第3号 52-72頁
- 成田滋彦 2000「円筒上層式に於ける大木7b・8a式について」『村越潔先生古希記念論集』弘前大学教育学部考古学研究室OB会 53-66頁
- 馬渡峻輔 1994『動物分類学の論理—多様性を認識する方法ー』東京大学出版会
- ポバー哲学研究会2001『批判的合理主義—第1巻: 基本的諸問題』未来社
- 丸山圭三郎1984『文化のフェティシズム』珪草書房
- 山内清男 1939「日本遠古之文化」佐藤達夫編1974『日本考古学選集21山内清男集』築地書館 所収
- 横山浩一1985「3 型式論」『岩波講座 日本考古学1 研究の方法』岩波書店43-78頁
- 藤阪豊・川島淳夫・高橋由美子 編著1992『記号学小辞典』同学社
- Renfrew, C. and P. Bahn.
- 1991 *Archaeology, Theories Methods and Practice*, second edition, Thames and Hudson, New York.
- Lance, H. D.
- 1981 *The Old Testament and the Archaeologist*, Fortress Press, Philadelphia.

# 雪国の考古学

## －忘れられた縄文の冬－

福田 友之

### 1 見えてこない縄文の冬

ここ数年来、縄文時代の低地遺跡調査が大規模に行なわれるようになり、木製品等の植物質遺物の出土例が加速度的に増えてきた。本県でも、平成4年度から調査が始まった青森市三内丸山遺跡(前期)以降、八戸市是川中居(晚期)、野辺地町向田(18)(前期)、さらに青森市岩渡小谷(4)(前期)・近野(中期)等の遺跡から縄文時代の木製品等が出土しており、石器時代と言われる縄文時代においても、これらが重要な生活用具であったことが実感として理解されるようになってきた。

ところで、テレビや新聞紙上には、連日のように遺跡調査や考古学上の発見を伝えるニュースが登場し、学会や大学・地方公共団体等から刊行される関連印刷物は、それこそ山のようである。各地で行なわれる遺跡見学会や遺跡関連の講演会・シンポジウム等にも多くの市民が参加している。また、他の分野と提携した学際的な研究も積極的に行なわれており、考古学は今や裾野を広げて突き進んでいる学問の観すらある。近年とくに注目されるようになった縄文時代についても同様で、多種多彩な研究成果が発表され、さまざまな縄文觀が示されるようになってきた。しかし、仕事の関係もあってその渦中に身を置きながら、いつもある種の物足りなさを感じられてしまうがない。それは、おそらく筆者が雪深い津軽に住んでいるからであろうが、縄文時代の雪国や冬の生活に関する遺構・遺物等の研究がほとんど見られないのである。

縄文文化は、言うまでもなく東日本地域を中心にして展開した先史文化であるが、その地域の大半は、冬には深い積雪を見る北国である。とくに東北・北陸地方や北海道などに住む人々の大半は、1年のうち3分の1以上を1m以上の深い積雪(図1)(注1)や寒さと宿命的に関わらざるをえない自然環境下にある。これらの地域においては、縄文時代にも冬には多量の降雪が

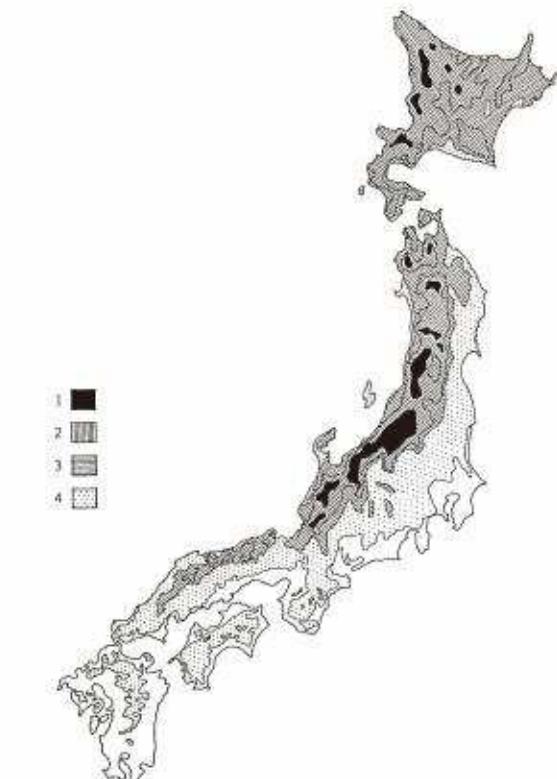


図1-4 日本の最高積雪深の平均の分布  
1: 200cm以上, 2: 100-200cm, 3: 50-100cm, 4: 10-50cm (気象庁編: 日本気候誌第2集、地図出版社、1972より抜き改める)。

あったことはほぼ間違いないと推測されるが、そうだとすれば、この地域に住んでいた縄文人の生活の基本姿勢は、まず「積雪と厳しい寒さのある冬をどのようにして乗り切るか」ということであった

に違いないのである。しかし、彼らの冬の生活に関する考古学研究者側からの発言はほとんど聞こえてこない。

このような状況のなかで、近年出土例が急増している木製品等の植物質遺物は、研究者側の関心・研究テーマの持ち方次第では、この問題に対する新たな視点を提供するものとして期待される。

## 2 朝日山(2)遺跡出土のソリと民具資料

遺跡から発見される遺構や出土品の用途を考えるために、民具資料等との比較を行なうことが有効であるというのは、考古学の概説書を見れば必ず書かれている基本的な研究方法である。

東北地方や北陸地方等の民具に関するものに、江戸時代後期に著された、三河出身の紀行家菅江真澄の東北地方・北海道の『遊覧記』<sup>(注2)</sup>や越後塩沢の文人鈴木牧之の『北越雪譜』<sup>(注3)</sup>などがあるが、それには今から200年前や160年以上も前の人々の生活が生き生きと描かれており、当時の雪国の生活を具体的に窺い知ることができる。そして、これと大差のない生活が、青森県内の市町村史や資料館・博物館等に収蔵された民具資料を見れば、ついこの間まで続いていたことが実感される。

さて、平成14年(2002)になって、当センターが平成12年に行なった青森市西部の朝日山(2)遺跡の発掘調査において、深さ約2m50cmの井戸跡(第343号土坑)から小型の木ソリが出土していることが判明した。長さ約37cm、幅約20cmの大きさで、台木(滑走部)(図2-1・2)と棒状木製品(遊木・横木・ユギ)(図2-3・4)各2点の部材からなり、平安時代～中世のものと考えられている<sup>(注4)</sup>。遊木が取まる乳の部分が、欠損してはいるものの4ヶ所にあり、さきに述べた江戸時代後期の民具例のなかで、東北・北陸地方で広く用いられていた「四乳」(ヨツジ)を持つヨツヤマソリ<sup>(注5)</sup>に酷似している。これは、津軽地方でも最近まで用いられていた型式の荷ソリである。今回出土したソリは非常に小型であるため、具体的にこれに何を載せて引いたのか、あるいは子供用なのか、漠としている。今後の研究課題であろう。

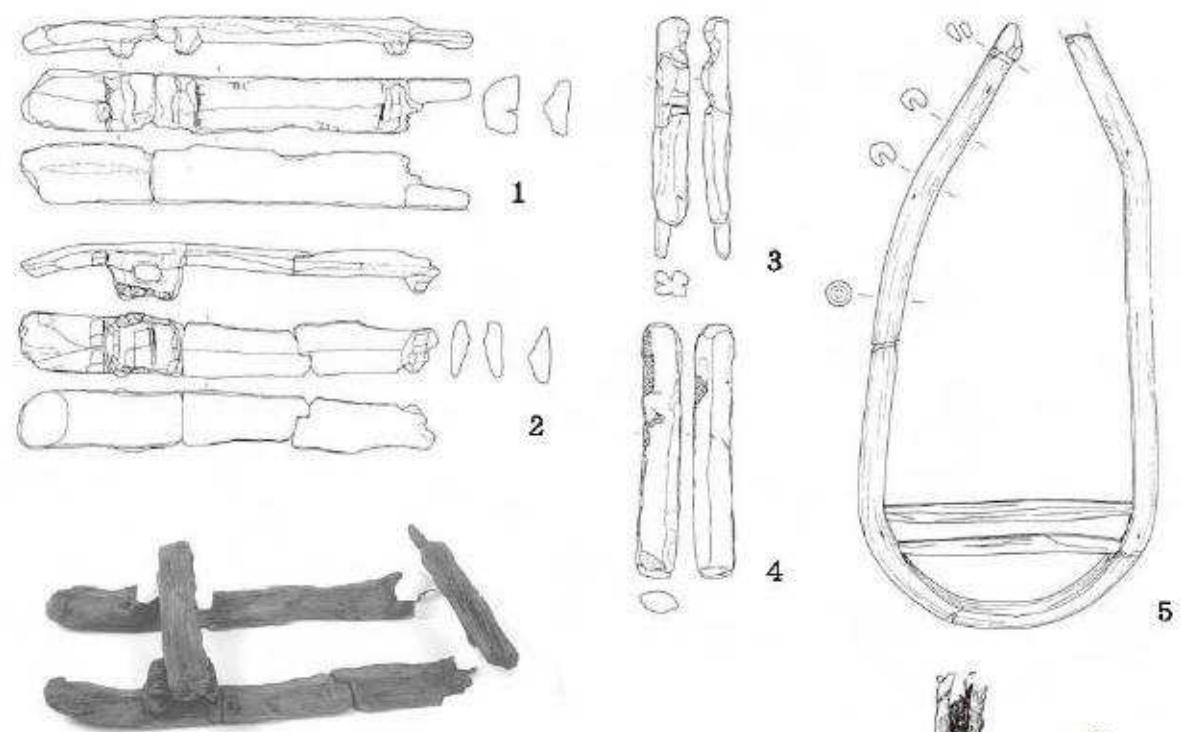
出土品と(文献に著された)民具資料等との酷似に直面してみて、雪上で物を運ぶという方法が長期にわたってほとんど変わっておらず、しかも雪に対する処し方が、雪国ではほぼ共通し地域差があまりなかったことを認識させられた。そして、考古資料と雪に関連した民具資料との比較が、今後必要になってくることを強く予感させられたのである。

雪に関わる用具類は、江戸時代から中世・古代へ、そしてさらに1,000年、1,500年前へと遡って、かりに縄文時代晚期に雪上運搬具としてのソリがあったとすれば、その形態は朝日山(2)例と類似していた可能性が考えられる。そしてまた、ソリのほかにも、雪に関わる、たとえば雪ベラなどの除雪具類、履き物・防寒具類の多くも、降雪地帯の民具資料に形態が受け継がれているものと想定される。

本県を特徴づける雪に関した木製品が、平安時代以降の例とはいえ、ようやく一例確認されたわけであり、今後の類例增加を期待させる出土品となったことの意味は大きい。

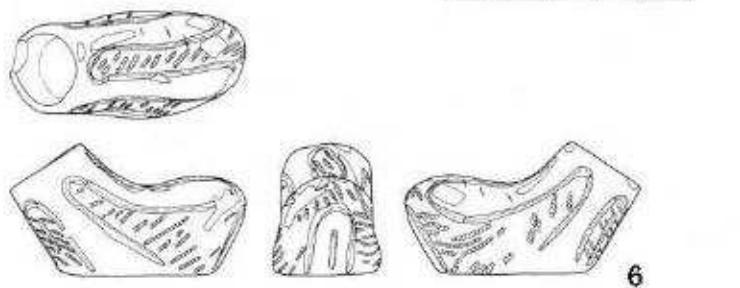
## 3 考古学におけるこれまでの冬の取り扱い

さきに、雪国の生活とくにその冬の生活に対する考古学研究者の側からの発言がほとんど聞こえてこない旨述べたが、雪国や冬の生活への視点を含めた縄文文化研究がまったく行なわれて来なかつたというわけではない。故山内清男氏の「サケ・マス論」<sup>(注6)</sup>、小林達雄氏の「縄文カレンダー」<sup>(注7)</sup>、



(朝日山(2)遺跡の4乳ソリ)

0 (1~5・7)  
20cm



0 (6・8)  
10cm

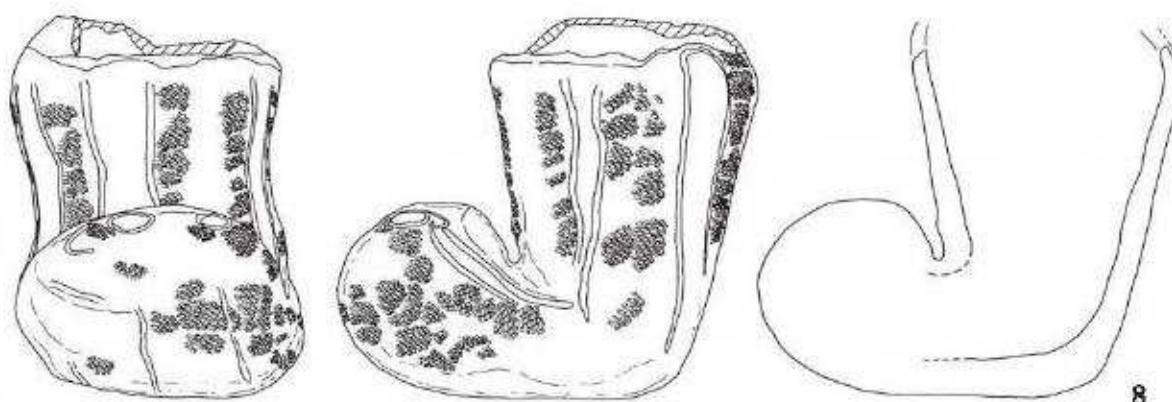


図2 雪に関連した遺物

岡村道雄氏の「貝塚からみた食料採集の季節性」(注1)、渡辺誠氏の「大型住居跡」(注2)や「植物食」(注3)などの研究、さらに同氏(注4)や尾関清子氏の「アンギン」(注5)の研究、宮本長二郎氏の「住居・建物跡」(注6)の研究等は、縄文時代の雪国の衣・食・住を考えるうえで重要な視点を我々に与えてくれるものであった。

また、博物館などの常設展示においては、たとえば豪雪地帯にある新潟県十日町市博物館などの展示「縄文ムラの冬の一日」(平成3年展示オープン)があったにせよ、それまでの東北地方・北海道などの雪国の博物館では、全国画一的な「雪のない季節の展示」が主流であった。しかし、その後開館した博物館には、『名寄市北国博物館』(平成8年開館)や『新潟県立歴史博物館』(平成12年開館、館長は小林達雄氏)などのように、常設展示に縄文時代の冬の生活を意識して取り入れている博物館も見られるようになってきている。とくに、後者は、豪雪地帯としての新潟県の歴史的特徴を、ジオラマ等によって縄文時代から近年までを具体的かつダイナミックに展示しており、今後の雪国の博物館展示のひとつの方向性を示したものとして評価されるものである。

さきに紹介した研究のなかで、渡辺誠氏の「縄文文化の発達とブナ帯」の論考(注7)は、縄文時代における雪国で使われたとみられる遺物を具体的に取りあげており、筆者の思いと共通する部分が多く、小文のきっかけとさせていたいたいものであるが、この論考で、渡辺氏は八戸市是川中居遺跡から出土した縄文時代晚期の蔓性のカンジキ(雪上歩行具)と見られるもの(図2-7)(注8)や長野県(伊那市手良)から発見されていた縄文時代中期の深軋形土製品(図2-8)(注9)などを紹介している。

雪国の冬の生活を示す遺物としては、この後、筆者知っている範囲では、秋田県河辺町松木台Ⅲ遺跡から縄文時代中期後半(大木9式期)の軋形土製品例(図2-6)が出土しており(注10)、さらに同県五城目町中山遺跡からは縄文時代晚期前半の樹皮製品(図3)も出土している。この樹皮製品は直径30cmほどのドーナツ状のもので、枝に着いたままの杉の葉を、幅2.6cmほどの杉皮で巻き束ねたもの(注11)であり、秋田マタギが使用した「ワラダ」に類似すると指摘されている(注12)。ワラダは、奥羽山系に住む秋田・岩手県等のマタギたちが、冬にノウサギやヤマドリ・キジを生け捕るために用いた薙製の狩猟用具で、ドーナツ状の本体に木の取っ手を串刺しにして取り付けたものを、対象物に向かって空中に投げて用いたものである(注13)。また、時代はより新しくなるが、北海道札幌市K39遺跡では擦文時代の蔓製カンジキ(図2-5)(注14)も出土している。さらに平安時代の遺構として、津軽地方にみられる堅穴住居跡に伴う周溝が、冬の排水を目的としたものであるとする見解も提示される(注15)など、少しづつではあるが類例が増え、問題意識を持った研究者も現れてきている状況である。

雪国の生活に関わる遺物・遺構に関する研究・論考が少ないのは、考古学のよりどころである「遺構」・「遺物」、つまり雪国の生活を示す具体的な資料が非常に少ないとすることによるものと間違いない

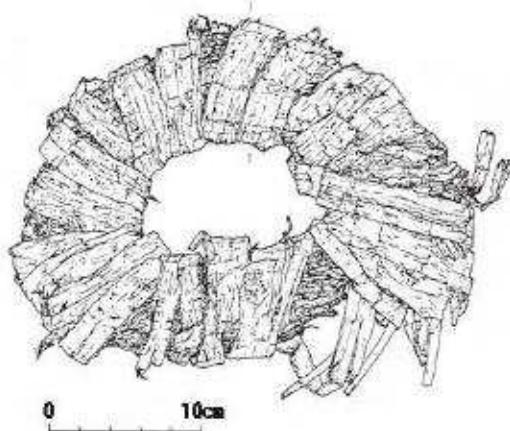


図3 ワラダ状樹皮製品(秋田県中山遺跡)

い。またこれには、雪国の冬という視点に立って出土品等を見てこなかったことも大きな要因としてあげられる。これまででは、出土品の用途を推定する際には、無意識のうちに、冬の季節を除いて春から秋までの雪のない季節を念頭に置いてきたように思われる所以である。

#### 4 「雪国の考古学」の視点から

雪に関する考古資料を探索・研究するためには、民具資料等との比較が重要であることは当然のことである。しかし、一般的にはこれで良いとしても、雪国に住む筆者にしてみれば、これだけでは基本的に不充分である。研究を行なう前には、その前提として雪国の冬の生活、つまり雪や寒さのなかで暮らしてみることが必要条件にならう。冬の生活経験なしに頃のなかの知識だけで、考古

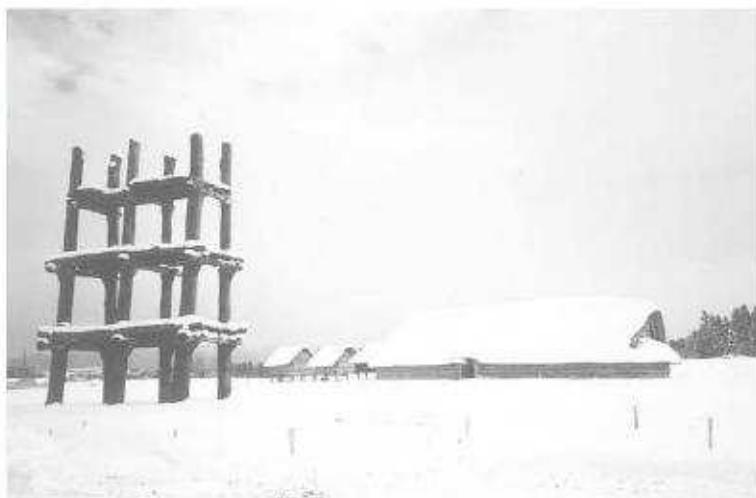


図4 冬の三内丸山遺跡(1997年3月)

資料と民具資料等との関連を説き、論文を書いたとしても、表面的なものでしかなく、雪国に住む研究者を納得させることは難しい。

このように述べると、若い研究者からは、「今の雪国には、ロード・ヒーティングなどの融雪装置や雪下ろし不要の無落雪住宅がある。住宅は機密性が高く暖房施設にも便利なものがある。また、除雪・排雪にはブルドーザーやロータリー車・ダンプトラック等の大型除・排雪機がある。資料館や博物館に展示されているかつての冬に用いた民具資料とは、もはや結びつかない生活があり、雪国の冬の体験をしたとしても余り意味がないのではないか」と言われるかも知れない。確かに、もっともなこととは思われる。しかしそれは、明治であれ江戸であれ、中世・古代・縄文等であれ、いつの時代においても、程度の差こそあれ当てはまることがある。これを理由にするのであれば、考古学自体はもはや成立しえなくなるであろう。要するに言いたいのは、雪の中で生活し、雪や氷の性質を知り、雪の寒さ・冷たさ・厳しさ、そして楽しさを実体験としてもっているかどうかが重要であるということである。その体験があってこそはじめて、雪や冬に関するさまざまなことに推察力を働かせることができるようになり、出土した木製品等を見る目が養われると思われるからである。

冒頭に述べたようにここ数年来、本県でも縄文時代の木製品が多数出土するようになり、この方面的研究が急務になってきている。この研究を行なう際には(木製品以外の各種出土品も対象になることは言うまでもないが)、雪国に住む研究者の視点で遺構・遺物の用途を考え、雪国や雪国の冬の生活を考古学的に明らかにするという、「雪国の考古学」の視点を持つことが必要となる。これによって縄文文化の研究は、基本的な部分において裾野がより広がることが期待できる。そして、この研究を行なうのは多雪地帯にあって、毎年雪に悩まされながら生活してきた北日本に住む研究者ということにならうが、そのなかでも、縄文遺跡が密集し、本州で最も高い緯度に位置する豪雪地域・津軽に住む研究者がよく似合う。

## 『注』

- (1)木下誠一 1996 『理科年表読本 雪の話・氷の話(第5刷)』丸善、P. 7  
ちなみに青森市の2002~2003年ひと冬の最深積雪(平均値)は最大1m14cm、総降雪量は7m94cmであった(青森地方気象台による)。
- (2)哲江真澄著、内田武志・宮本常一編訳 1965~1968 『哲江真澄遊覧記1~5』東洋文庫54・68・82・99・119 平凡社
- (3)鈴木牧之編撰・京山人百樹削定、岡田武松校訂 1971 『北越雪譜(第18刷)』岩波文庫1261~1262 a、宮 栄二監修、井上慶隆・高橋 実校註 1993『校註 北越雪譜 鈴木牧之』野島出版(新潟・三条)
- (4)青森県埋蔵文化財調査センター 2002 『朝日山(2)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第325集、P. 182
- (5)関 秀志 1985 「江戸時代の文献に見える櫛」『雪と生活』第4号 雪と生活研究会
- (6)山内清男 1964 「日本先史時代頃説 III 縄紋式文化」『日本原始美術1』講談社
- (7)小林達雄 1977 「縄文土器の世界 2 縄文世界の社会と文化」『日本原始美術大系1=縄文土器』講談社、小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日選書557
- (8)岡村道雄 1984 「里浜貝塚西畠地点の貝塚を残した集団とその季節的な生活」『月刊考古学ジャーナル』No.231 ニュー・サイエンス社
- (9)渡辺 誠 1980 「雪国の縄文家屋」「小田原考古学研究会会報」第9号
- (10)渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣考古学選書13
- (11)渡辺 誠 1985 「第4章 縄文文化の発達とブナ帯」「ブナ帯文化」思索社、P. 101
- (12)尾関清子 1996 『縄文の衣』学生社
- (13)宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- (14)杉山壽榮男 1942 『日本原始織維工藝史 原始編』雄山閣、図版91
- (15)綿田弘美 1997 「長野県伊那市手良出土の靴形土器」「長野県立歴史館研究紀要」第3号、P. 75
- (16)秋田県埋蔵文化財センター 2001 『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第326集、P. 214
- (17)五城目町教育委員会 1984 『中山遺跡発掘調査報告書』、P. 39
- (18)小林達雄編 1988 『縄文人の道具』古代史復元3 講談社、P. 112
- (19)太田粗重・高橋喜平 1988 『マタギ狩猟用具』日本出版センター
- (20)札幌市埋蔵文化財センター 2001 『K39遺跡 第6次調査(第4分冊)』札幌市文化財調査報告書65、P. 230
- (21)木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『月刊考古学ジャーナル』No.462 ニュー・サイエンス社

# 南部地域の古代製塩土器について

森 淳

## 1 はじめに

現在この地域の古代の様相はかなり分かりつつあるが、製塩、製鉄などの專業集団、専門作業については一部の遺構、遺物の出土しか分かっておらず、ましてやそのようなものはかなりの確率で報告書から落としがちな資料である。今回八戸市、岩手県種市町のご好意により今までの調査で出土した製塩土器について拓本、図面を取らせて頂いた。資料の収集だけでそこから何かを導き出すところまではいけないが、資料紹介といった形でここに取上げたいと思う。

## 2 研究史

青森県で最初に古代土器製塩に関する資料が紹介されたのは、1969年に北林八洲晴氏が夏泊半島沿岸各地で発見した平安時代の製塩土器を白砂式と仮称し、土製支脚とともに紹介したのがはじまりである。1970年代同氏は陸奥湾沿岸部を中心に製塩土器をまとめ、橋善光氏は下北半島の調査から製塩土器と擦文土器文化とのかかわりを指摘した。1980年代に入り各地の発掘調査から製塩遺構などが発見され、八戸市根城東構地区から南部地域ではじめての古代製塩土器出土報告がなされた。また本県の縄文時代および平安時代の土器製塩資料がまとめられた「土器製塩の研究」が出版された。1990年代全国の土器製塩研究の現状を総括した「日本土器製塩研究」が出版され、東北地方では仙台湾を中心とした太平洋岸と陸奥湾から広く出土することが明らかになった。2000年代発掘調査等により多くの事例報告がなされ、調査研究が行われている。



第1図 南部地域の古代製塩土器出土遺跡

### 3 南部地域の古代製塙土器出土遺跡

本稿では南部地域の古代製塙土器出土遺跡について、遺跡の立地と海岸までの距離、製塙土器の特徴、時期などを述べる。基本的に輪積痕が明瞭に残り、二次加熱を受け変色や剥離しているものを製塙土器として扱っている。また製塙土器との関係が指摘されている土製支脚も一緒に取り上げた。

#### ①八戸市根城3丁目出土博物館寄贈資料

昭和58年に八戸市根城3丁目、根城小学校南東にあるアパート建設予定地で発見された製塙土器である。標高20m前後で太平洋まで約4.5km、馬渕川まで700mに位置する。口縁部は口径28.6×24cmの楕円形をし、指でつまみ上げたもので、胴部下半から口縁部にかけてゆるやかに外傾するものである。外面は指ナデ調整が行われ、輪積痕が明瞭に残っている。内面は口縁部付近のみヘラナデ調整が行われ、胴部はきれいに指ナデ調整が行われている。同じ場所から9世紀後半～10世紀前半の土師器片が寄贈されている。

#### ②八戸市根城東構遺跡

馬渕川中流域、河岸段丘北端部の標高20m前後に位置し、太平洋まで約5kmである。昭和56～57年に発掘調査が行われた。全て小片だが竪穴式住居15軒、土坑2基から製塙土器片が出土している。口縁部は推定口径24～36cm、器厚1cm前後のもので、口唇をヘラで調整した後に内外面の調整を行った口唇断面が凹状になるもの、指でつまみ上げた口縁部が波打つものがある。外面は指ナデ調整され、輪積痕が残っている。内面は横、斜位ヘラナデ調整が行われている。胴部は器厚0.5～1.8cmのもので内外面ともに指ナデ調整である。内面は丁寧に調整を行っているため輪積痕が残っているものが少ない。断面をみると内面に関しては輪積みをしたあと指ナデによる整形を行い、化粧粘土をはりつけて内面をなだらかにしていると考えられ、その化粧粘土が加熱によりはじけ剥がれてしまっている。底部は2片出土し、推定底径11cmでどちらも柱目状圧痕が残っている。またSI72のカマドから底部に透かしをもつ円筒状中空タイプの土製支脚が1点出土している。土坑（Sk89：13片、Sk127：2片）出土のものは供伴資料がないため時期は不明であるが、竪穴式住居出土のものは供伴資料から8世紀後半（SI115：6片）、9世紀前半～10世紀前半（SI72：3片、SI89：5片、SI92：3片、SI100：2片、SI116：4片）、9世紀後半～10世紀前半（SI75：71片、SI79：1片、SI94：1片、SI97：1片、SI113：17片、SI114：14片）、時期不明（SI112：17片、SI131：2片）の時期設定をしている。このうち一番古いSI115出土の製塙土器に関しては、覆土出土の小片でありその特徴、時期を把握できない。

#### ③八戸市岩ノ沢平遺跡

馬渕川西岸、標高55～60mの丘陵段丘面にあり、太平洋まで約9km、馬渕川まで約1kmに位置する。平成4年の発掘調査で13号住居から製塙土器胴部12片、底部2片が出土している。いずれも小片で内外面とも表面が粗く、内面は剥離しているものが多い。胴部は器厚1～1.5cm、外面は指ナデ調整が行われ、輪積痕が残っている。内面は指ナデ、ヘラナデ調整が行われている。底部は直立気味に立ち上がるるもので指頭痕が明瞭に残っている。9世紀後半の時期設定をしている。

#### ④八戸市牛ケ沢(4)遺跡

八戸市中心部から南南西約6kmの階上町との市境にあり、標高約50～100mの天狗袋段丘上に位置する。太平洋まで約9km、南側には松館川の支流が東西に流れている。平成12～14年の発掘調査で7軒の竪穴式住居内（73号住：1片、82号住：9片、98号住：20片、101号住：1片、103号住：8片、

104号住：1片、117号住：1片）から製塙土器が出土している。口縁部は指でつまみ上げた器厚0.3～1cmのものである。外面指ナデ、内面横位ヘラナデ調整が行われている。胴部は器厚1～1.8cmで、外面指ナデ調整、内面は指ナデのものと横、縦、斜位ヘラナデ調整のものがある。底部は推定底径15cmで垂直に立ち上がる形をし、粘土を3層重ね厚く作っている。また95号住居からは螺旋状に粘土紐を積んだ円筒状中空タイプの土製支脚が2点出土している。外面は指ナデ調整、内面はヘラ状工具で整形している。平成15年度報告書刊行予定のため供伴資料の詳細は不明だが、9世紀後半～10世紀前半にあてはまる住居ということである。

#### ⑤八戸市館平遺跡

八戸市庁から南東へ約3.5km、太平洋まで約4.5kmに位置する。遺跡は新井田川と松館川が合流する右岸、標高6～37mの高館段丘上に立地している。平成15年度の調査で竪穴式住居内（SI2：1片、SI3：1片）から製塙土器胴部片が出土している。外面は指ナデ、内面は横、縦位ヘラナデ調整のもので化粧粘土が剥離し、下の面に横位ヘラナデ調整が見られる。土製支脚は1点出土している。円柱状中実タイプのもので二次加熱による剥離が激しい。表面は指ナデ調整が行われ、広がる裾の部分には指頭痕が残っている。底面には工具による調整痕が残る。平成15年度報告書刊行予定のため供伴する資料の詳細はわからないが、9世紀後半～10世紀前半にあてはまる住居ということである。

#### ⑥階上町山館前遺跡

階上岳北東山麓段斜面、標高150～170mにあり、太平洋まで約4.5kmに位置する。平成8年度調査の4号土坑から土師器片、うにの殻、貝殻と共に製塙土器片が出土している。この土坑は廃棄用の土坑と考えられ、隣接する2号住居床面から出土した土師器片と接合している。製塙土器は口縁部4片、胴部93片出土している。口縁部は器厚0.3～0.5cmで外傾するか、直立するものの他に、胴部上で内反して直立気味に立ち上がるものもある。指でつまみ上げてつくるものと口唇をヘラにより平口縁に調整するものがある。外面は指ナデ、内面は剥離したものが多く一部ヘラナデが残るものがある。胴部は器厚1～1.5cmで、外面は指ナデ調整が行われる。内面は口縁部同様、剥離部分が多く一部に指ナデ調整を行っている。また遺構外から土製支脚が円柱状中空タイプ2点、円柱状中実タイプ1点が出土している。表面は指ナデ調整が行われ、広がる裾の部分には指頭痕が残っている。供伴資料から9世紀後半～10世紀前半に設定したが、現在10世紀後半～11世紀前半で考えられている。

#### ⑦種市町二十一平遺跡

平成15年度登録された遺跡で、太平洋岸、県境より岩手県側へ500mほどいった総面積20,000m<sup>2</sup>、標高10m未満の砂利浜にある。現状は多くの製塙土器片、土製支脚片、焼け石の散布がみられ、分布調査では天箱3箱の表採ができた。口縁部は推定口径20～36cm、器厚0.3～1.2cmのもので外傾するか、直立するものと考えられる。口縁部は指でつまみ上げてつくるもの、口唇をヘラにより平口縁に調整するもの、ヘラ調整した後内外面調整を行い口唇断面が凹状になるものがある。底部は直立気味に立ち上がるものが多いが、張り出すもの、小さな底部をもつものがある。底部圧痕には木葉痕、砂底があり、粘土を2～3層重ね厚く作っている。外面は指ナデ調整による指頭痕が明瞭に残り、内面は化粧粘土をはり緩やかに立ち上がらせるものが多い。推定底径は14～32cmである。供伴する土師器が出土していないため時期不明である。土製支脚は小片が多く全体形を把握できるものは少ないが円柱状中実タイプ、円柱状中空タイプ、円筒状中空タイプの3種類がみられる。

#### 4 まとめ

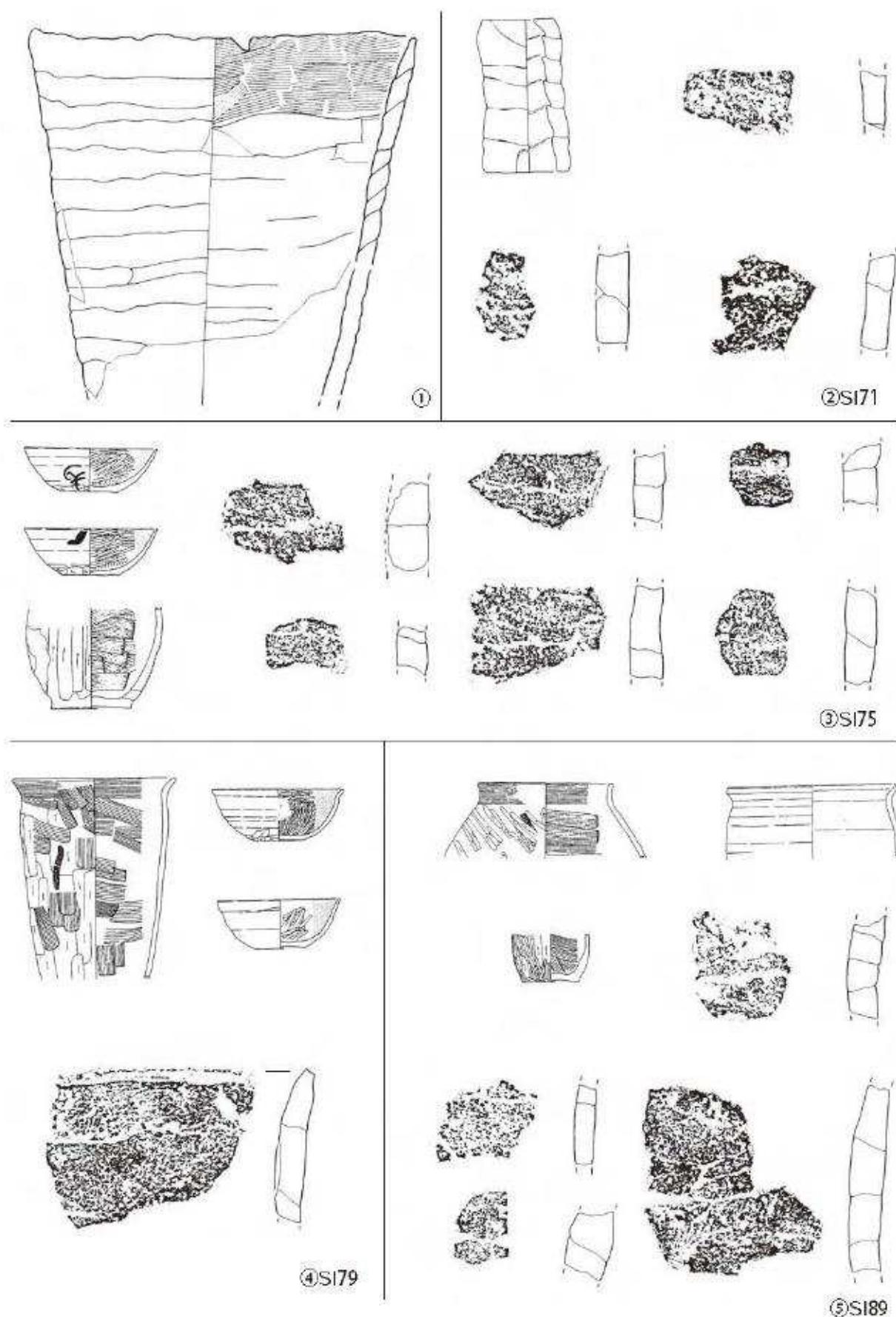
製塩土器の特徴：〔口縁部〕指でつまみ上げた口縁が波打つもの、ヘラ調整により平口縁を呈するもの、口唇をヘラ調整した後内外面調整を行い断面が凹状になるものがあり、直立気味に立ち上がるものの、内反するもの、外傾するものがある。外面は指ナデ、内面は横、斜位ヘラナデ調整するものがある。〔胴部〕外面は指ナデ調整され、輪積痕が明瞭に残っている。内面は外面と違い丁寧に縦、斜位ヘラナデ調整が行なわれているものが多く、化粧粘土などで輪積痕の凹凸を無くしている。〔底部〕直立気味に立ち上がるものがほとんどであるが、外傾するもの、小さな底をもつもの、張り出すものがある。土師器甕と比べて粘土を2～3層重ねて厚く作っているものが多い。底部圧痕は木葉痕、砂底、柾目などを残すものがある。〔色調・胎土〕赤褐色、灰白色、黄褐色のもので二次加熱により粗く、剥離しているものが多い。炭化物などの付着はみられないが、根城東構、牛ヶ沢(4)遺跡のものには胎土中に黒色の小さな粒が多く入っているものもある。〔時期〕ほとんどのものは9世紀後半～10世紀前半の範疇に考えられるものが多い。一番新しい段階の資料は10世紀後半～11世紀前半のものと思われる山館前遺跡出土資料である。〔土製支脚〕円柱中空タイプ、円柱中実タイプ、円筒中空タイプのものが7遺跡中5遺跡について確認できた。〔立地〕ほとんどの遺跡が馬渕川、新井田川沿いに位置する。山館前遺跡だけが川沿いにないが、遺跡から海が一望できる場所にあり、土坑からうにの棘、貝殻などが一緒に出土していることからも海へ行き来していたものと考えられる。また種市町の二十一平遺跡は、南部地域の製塩生産遺跡として考えることができる最初の遺跡である。昭和の前半くらいまで太平洋岸の青森県八戸市金浜、階上町追越、柳、小舟渡、岩手県種市町種市、八木、小子内、有家、久慈市桑畑、侍浜、白前、麦生といった地域は塩の生産が行なわれている。しかし多くの場所が湾岸工事、津波などの影響で破壊され現在見ることができない。この地域の古代製塩を考える上で重要な遺跡になると思う。今回は資料紹介のみで、研究紀要としては未熟な掲載になってしまった。現在種市町千田政博氏、北上市君島武史氏と太平洋岸の製塩遺跡に関して分布調査を行っている。今後も継続して調査研究を行い、また報告していきたいと思う。

※ 今回、本稿を作成にあたり八戸市博物館、八戸市文化課、種市町教育委員会には数々の便宜を図って頂いた。また藤田俊雄（八戸市博物館）、宇部則保（八戸市教育委員会）、小笠原善範（八戸市教育委員会）、大野亨（八戸市教育委員会）、小保内裕之（八戸市教育委員会）、小久保拓也（八戸市教育委員会）、千田政博（種市町教育委員会）、君島武史（北上市教育委員会）の各氏からご教授、ご指導頂いた。この場をおかりして心からお礼申し上げる。（順不同）

※ 八戸市、種市町出土の未発表資料及び未掲載資料に関しては、各担当者から資料掲載の内諾をもらっている。また八戸市根城岡前遺跡、市子林遺跡、田向冷水遺跡の未発表資料中にも製塩土器片が確認されているということである。

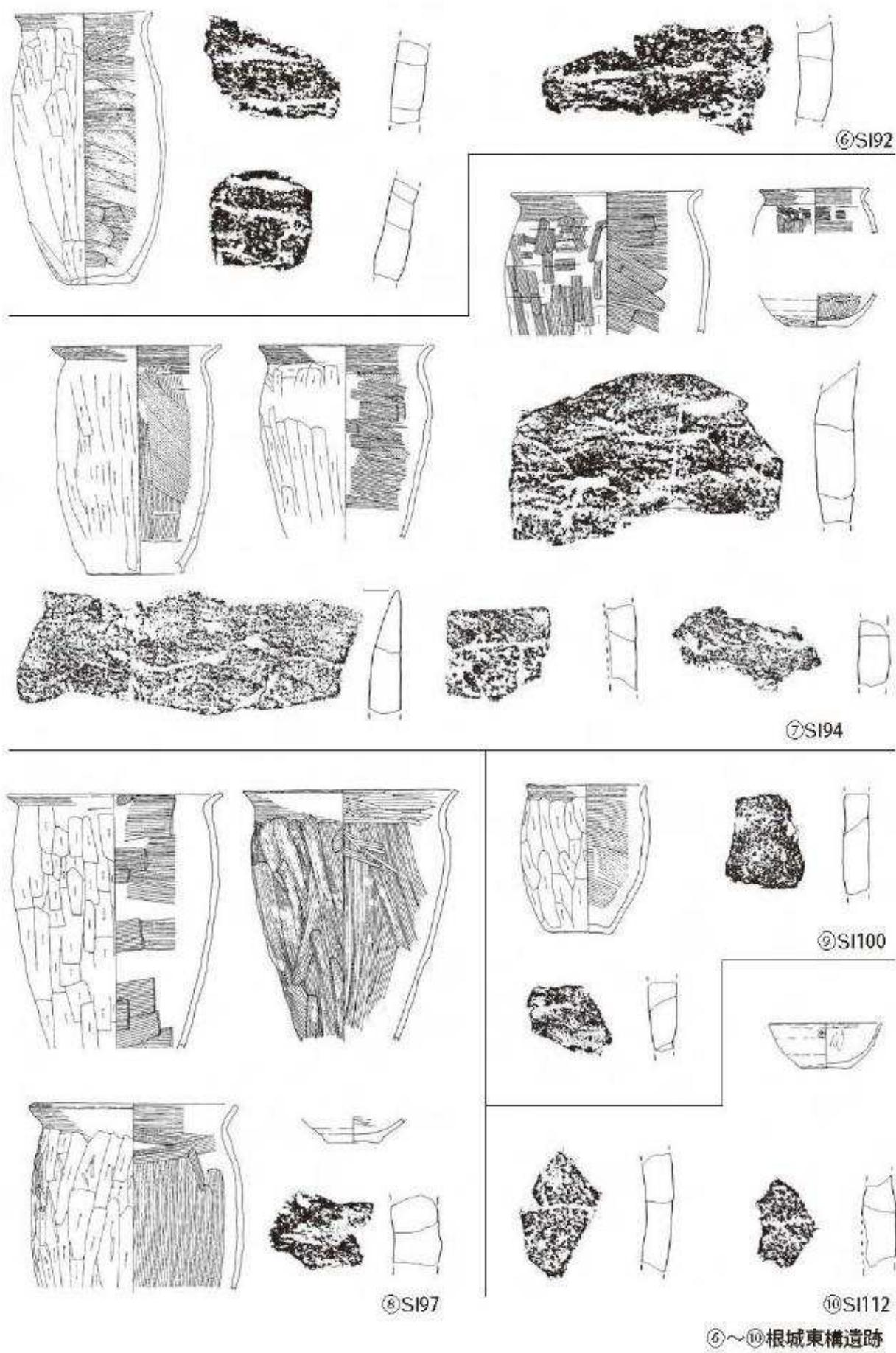
※ 図版は原本：2分の1、根城4丁目：4分の1、土製支脚：4分の1、他の出土資料に関しては縮尺不同で載せた。

※ 〔参考文献〕 八戸市教育委員会：「史跡根城跡発掘調査報告書V」（1983）、「岩ノ沢平遺跡発掘調査報告書II」（1993）、「大仏遺跡II」（2003）、階上町教育委員会：「山館前遺跡発掘調査報告書II」（2001）、北林八洲晴：「考古学研究第18巻4号—青森県陸奥湾沿岸の製塩土器—」（1972）、「北奥古代文化第5号—陸奥湾沿岸における土器製塩—」（1973）、「日本土器製塩研究—青森—」（1994）、横善光：「うとう第80号—下北半島の製塩—」（1974）、「北海道考古学第13—青森県宿野部上野平遺跡—」（1977）、近藤義郎：「考古学研究26～27巻—土器製塩の話1～4—」（1979～1980）、一町田工：「青森県考古学第2号—尻高(5)遺跡・鶴沢遺跡の製塩土器—」（1985）、柴田陽一郎：「秋田県埋蔵文化センター研究紀要8号—秋田県内における土製支脚について—」（1993）、濱田宏：「岩手県埋蔵文化財センター研究紀要XIX—岩手県内出土の土製支脚—」（2000）、宇部則保：「海と考古学とロマン—東北北部型土師器にみる地域性—」（2002）、君島武史：「北上市立埋蔵文化財センター研究紀要第1号—東北地方の製塩土器—」（1999）

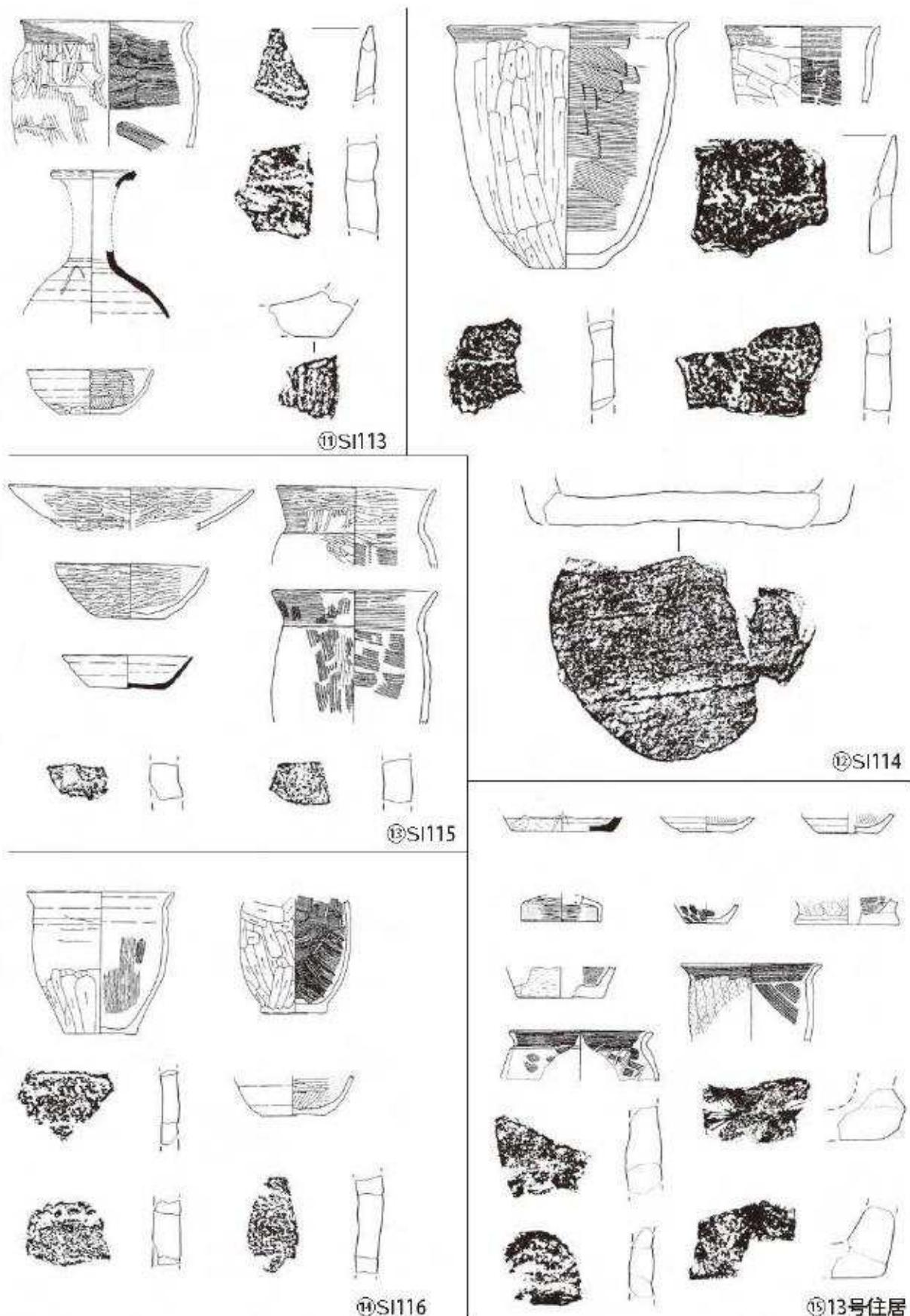


①根城3丁目 ②～⑤根城東構造跡

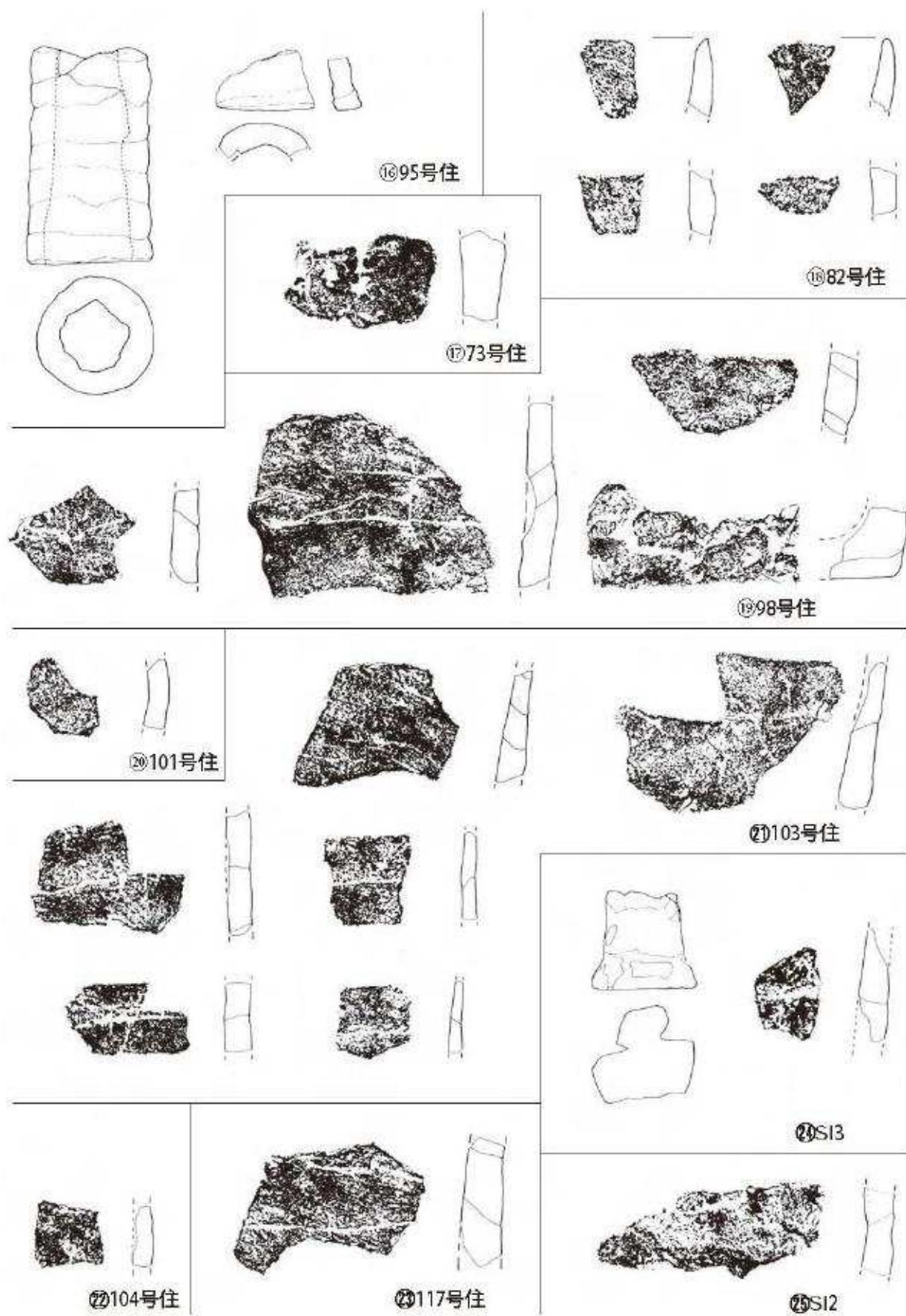
第2図 南部地域の古代製塩土器



第3図 南部地域の古代製塩土器

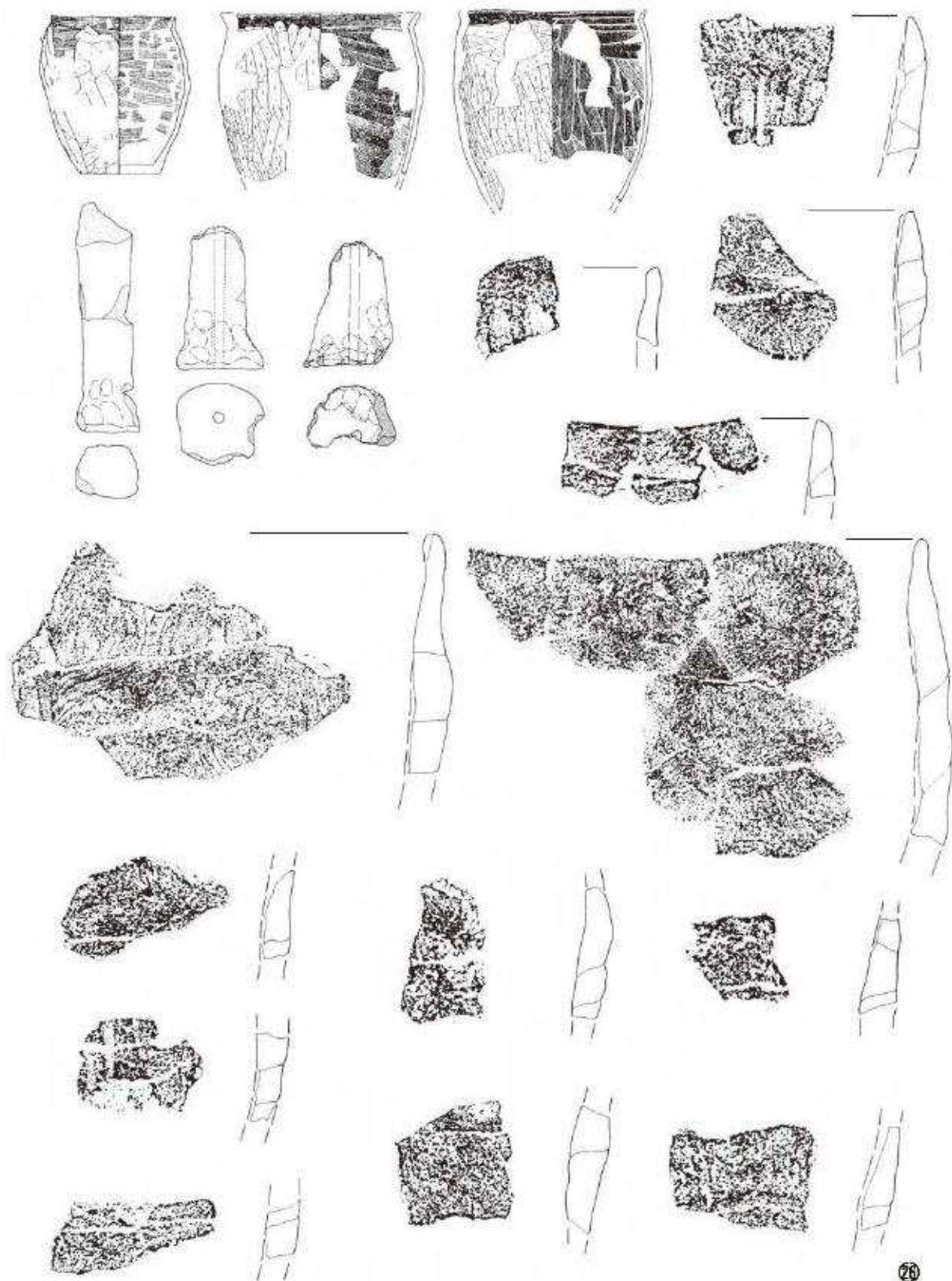


⑪～⑭根城東構遺跡 ⑮岩ノ沢平道跡



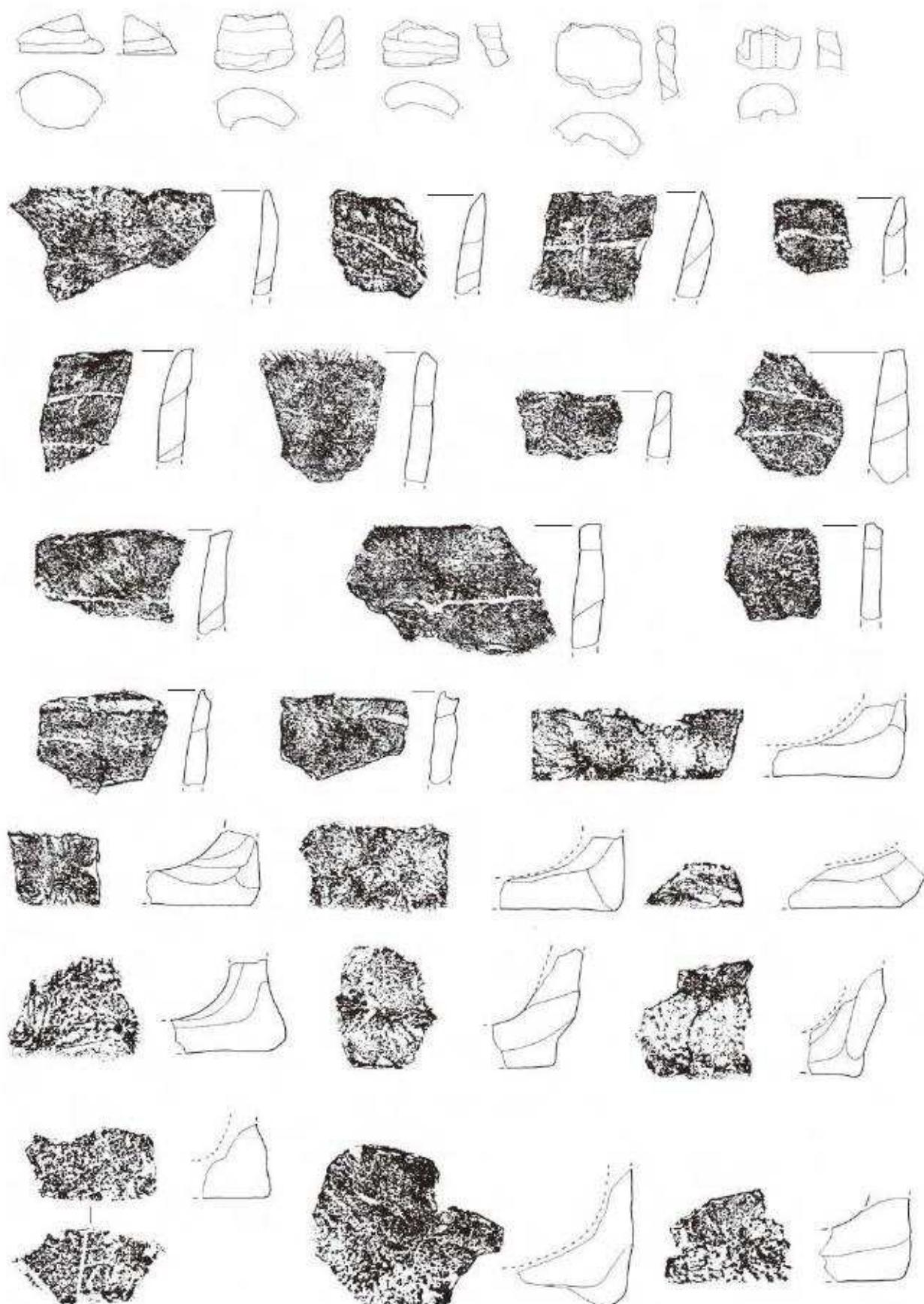
⑯～㉓中ヶ沢(4)遺跡 ㉔～㉖館平遺跡

第5図 南部地域の古代製塩土器



㉙山館前遺跡

第6図 南部地域の古代製塩土器



②二十一平遺跡

第7図 南部地域の古代製塩土器

# 松ヶ崎遺跡から出土した円筒上層式土器

中村哲也

## 1 はじめに

松ヶ崎遺跡は、八戸市の南東部、新井田川と松館側に挟まれた段丘上に位置する。本遺跡は古くから著名で、昭和32年には江坂輝彌氏により発掘調査が実施された（江坂 1957）。西側には隣接して西長根遺跡が所在する。この二つの遺跡は、古くは地点貝塚として認識されていたため、個別の遺跡として台帳登録されていたが実際には同一の遺跡である。遺跡の範囲は東西約400m、南北約400mの範囲である。遺跡付近は一部で宅地化が進み、個人住宅の建設や、八戸市南霊園の造成に伴い発掘調査が実施され、次第にその様相が明らかになりつつあるが、遺跡の全容は未だ不明な点が多い。そこで、本稿では松ヶ崎遺跡から出土した円筒上層式土器を紹介し、遺跡の変遷に関する知見を追加するものである。

## 2 既往の調査

松ヶ崎遺跡・西長根遺跡のこれまでの調査を一覧表にまとめた。（文献番号は参考文献に対応）

番号	調査年	遺跡名	調査主体	検出遺構	調査面積	時期（出土遺物）	文献	
1	1957	松ヶ崎	江坂輝彌	貝塚	不明	円筒下層	1	
2	1957	西長根	江坂輝彌	貝塚	不明	円筒上層	1	
3	1966	松ヶ崎	滝澤幸長	地点貝塚 包含層	2 17m <sup>2</sup>	円筒下層d 円筒上層a 円筒上層c 円筒上層d 後期	2	
4	1967	松ヶ崎	音喜多富寿 松山力	住居跡 貯蔵穴	1 1	約100m <sup>2</sup>	中期・後期	3
5	1993	松ヶ崎	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 竪穴遺構 土坑 屋外炉	25 1 3 3	225m <sup>2</sup>	円筒上層d 円筒上層e 楓林 最花	4
6	1994	松ヶ崎A	八戸市教育委員会	なし	24m <sup>2</sup>	古代	5	
		松ヶ崎B		なし	24m <sup>2</sup>	中期～後期	5	
		松ヶ崎C		竪穴住居跡 土坑 屋外炉 柱穴状ピット	16 6 1 1	155m <sup>2</sup>	円筒上層e 楓林 最花	6
7	1992	西長根	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 土坑 屋外炉 捨て場	24 37 1 1	1,780m <sup>2</sup>	円筒上層c 円筒上層d 円筒上層e 楓林 最花	5
8	1997	西長根	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 土坑 土坑墓	11 33 8	200m <sup>2</sup>	円筒上層b 円筒上層c 円筒上層d 円筒上層e 楓林 最花	7

9	1998	松ヶ崎	八戸市教育委員会	土坑 1	50m <sup>2</sup>	円筒上層 a	8
10	1999	松ヶ崎	青森県埋蔵文化財調査センター	土坑 5	3,900m <sup>2</sup>	中期後葉～後期初頭 十腰内 I	10
11	1999	西長根	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 2 土坑 2	200m <sup>2</sup>	円筒上層 c 円筒上層 d 円筒上層 e 楳林 最花	9
12	2000	松ヶ崎	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 1 竪穴遺構 1 土坑 27 柱穴状ピット 1	191m <sup>2</sup>	円筒下層 d 大木10式平行期 十腰内 I 式	11
13	2001	松ヶ崎A	八戸市教育委員会	竪穴住居跡 2 土坑 28	324m <sup>2</sup>	円筒下層 d 円筒上層 a 円筒上層 c 円筒上層 d	12
		松ヶ崎B (試掘)		遺構多数	310m <sup>2</sup>	円筒上層 d 円筒上層 e 最花	

### 3 出土土器の紹介

紹介する土器は、八戸市十日市字西の立花歎氏が自身の所有する畠から出土したものを八戸市教育委員会文化課の村木淳氏に寄贈したものである。筆者は平成11年度に同遺跡を発掘調査する機会があり、その際、報告書に掲載する条件で村木氏から預かったが報告書作成時には、紙数等の制約で掲載することがかなわなかったため、本稿で紹介するものである。

出土した土器は9個体分である。1は波状口縁を呈する。文様帶は口縁部の狭い範囲に限られ、下端は1条の隆帶で区切られている。口唇部には1条の隆帶が巡り、波頂部からは2条の隆帶が垂下する。隆帶上にはLR原体の側面圧痕が施される。口縁部文様帶にはLR原体の側面圧痕による平行線文間にC字状（あるいは馬蹄形）のLR原体による側面圧痕が施されている。胴部には羽状繩文結束第1種が横位に施されている。

2は二股の突起により波状口縁が形成される。文様帶の区画のあり方は、1と同様である。

口縁部文様帶にはL原体の側面圧痕による平行線文間にC字状文（馬蹄形圧痕）が施される。隆帶上にはL原体による側面圧痕が施される。胴部はLR原体が横位回転されている。

3は平縁で、口唇部と頸部に1条の隆帶を巡らし、文様帶を区画する点は1・2と同様だが、文様帶内は網目状の隆帶が施されている。4・5・7・8・10・11・12は口縁部片で、隆帶と、棒状工具による刺突が施されている。13～17は胴部片で、文様はLR原体の横位回転か羽状状文結束第1種の横位回転である。

土器の時期は1・2が円筒上層 a 式～b 式、3が円筒上層 b 式～c 式、6～8・9～12が円筒上層 c 式と考えられる。すべて円筒上層式前半のものである。なお、1・2を円筒上層 b 式に限定しない理由は、従来円筒上層 a 式とされてきたものとC字状（馬蹄形）圧痕が併存することが確実で（小笠原2002 青森県教育委員会2001・2003）、口縁部文様の中の単位文様のみが型式を弁別する基準にはなりえず、一方でそれ以外の諸属性の区分点が共通理解になっているとは考えにくいからである。

#### 4 集落の変遷

2で取り上げたこれまでの調査の位置を図に示した。ただし、上表中3・4は位置の特定が困難であった。また、1・2は位置不明である。遺跡の範囲は、西は新井田川に面する段丘崖付近まで、東は台地東部の沢地形までである。占地のあり方には大きく3段階の画期が認められる。

第1期 前期～円筒上層c式期

第2期 円筒上層c式期～最花式期

第3期 (大木10式)～後期初頭

第1期は前期から円筒上層c式までで、遺跡の東部を主に占めている。第2図中の4・9、および本稿掲載遺物出土地点が該当する。遺構の分布状況は未だ不明な点が多いが、音喜多・松山(1967)八戸市教育委員会(2001)を参照すれば、住居・土坑が近接して存在するようで、集中的な土地利用がうかがえる。

第2期は円筒上層d式～最花式期までで、遺跡の西半部に占地しているようである。多数の遺構が重複し、集中的な利用の痕跡が伺える。一方、遺跡南西方の弥次郎窪遺跡では、住居跡が検出されず、土坑が20基前後分布する。遺跡周縁部のあり方を示していると思われる。

第3期は大木10式平行期以降で、松ヶ崎・西長根遺跡の範囲では、活動痕跡があまり認められなくなる。大木10式平行期かその直後の住居跡は、第2図中の12で検出されているが、それ以前の遺跡西半部の集中的な利用とは対照的である。これに近い時期の住居は遺跡東方約250mに位置する黒坂遺跡(青森県教委員会 1998)で10軒が検出されているが、住居跡数は第2期のそれとは大きな隔たりがありそうである。また、螢沢式等と称される時期～十腰内I式期の可能性が高い住居(8軒)・土坑(63基)は遺跡南西方の弥次郎窪遺跡で検出されている。

#### 5 周辺の集落の動態

松ヶ崎遺跡周辺には、同時期の遺跡が多数知られている。図3に、周辺の縄文時代中期の遺跡(一部後期を含む)を示した。青森県遺跡地図に縄文時代中期の記載のあるもの・報告書で縄文時代中期の遺構・遺物が掲載されたものを掲載した。付近は、新井田・松館川により形成された段丘地形が発達しており、それぞれの段丘を支谷が解析し、それぞれ独立した台地を形成している。蟹沢遺跡・重地遺跡は前期末葉～中期の集落遺跡として知られている。一王寺(1)遺跡では前期末葉～中期後葉、後期前葉の遺物が出土している。それぞれの台地ごとに同時期の遺跡が存在する状況を見て取ることができる。松ヶ崎遺跡の所在する台地では、大木10式平行期以降、占地や、土地利用の集中度が大きく変化することを指摘したが、他の台地ではそのような変化は十分に確認できていない。新井田川左岸の新田遺跡では、大木10式期の集落の存在が予測され、松ヶ崎遺跡と同様な変化が起きた可能性も考えられよう。

#### 6. 終わりに

本稿では松ヶ崎遺跡採集遺物を紹介し、遺跡の変遷について予察を行った。松ヶ崎遺跡を含む八戸市南部域は、縄文時代中期の遺跡分布が密で、遺跡の動態をとらえる上で興味深い。全容が明らかでない遺跡が多いので、発掘調査の進展を待つ一方、遺物の出土位置を丹念に追跡することで、ある程度の見通しを得ることも必要であろう。

## 参考文献

- 1 江坂輝彌 1956 「十日市貝塚群出土の鳥獸魚骨から観た縄文文化の食糧資源」『奥南史苑』1 青森県文化財保護協会八戸支部
- 2 音喜多富寿・松山力 1969 「八戸市松ヶ崎遺跡調査報告書」(青焼き 22p)
- 3 滝沢幸長 1967 「八戸市十日市松ヶ崎貝塚」
- 4 八戸市教育委員会 1994 「八戸市内遺跡発掘調査報告書6」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集
- 5 八戸市教育委員会 1995 「八戸市内遺跡発掘調査報告書7」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 6 八戸市教育委員会 1996 「八戸市内遺跡発掘調査報告書8」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第65集
- 7 八戸市教育委員会 1999 「西長根遺跡－平成9年度発掘調査－」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第80集
- 8 八戸市教育委員会 1999 「八戸市内遺跡発掘調査報告書11」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 9 八戸市教育委員会 2000 「八戸市内遺跡発掘調査報告書12」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第83集
- 10 青森県教育委員会 2000 「松ヶ崎遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第291集
- 11 八戸市教育委員会 2001 「八戸市内遺跡発掘調査報告書13」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 12 八戸市教育委員会 2002 「八戸市内遺跡発掘調査報告書14」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 八戸市教育委員会 1997 「八戸市内遺跡発掘調査報告書9」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 八戸市教育委員会 1998 「八戸市内遺跡発掘調査報告書10」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第87集
- 八戸市教育委員会 1981 『是川仲居・塙田遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第5集
- 青森県教育委員会 1998 『青森県遺跡地図』
- 1998 『弥次郎塙遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
- 2000 『黒坂遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第291集
- 2001 『笠ノ沢(2)・(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第305集
- 2003 『笠ノ沢(3)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第346集
- 小笠原雅行 2002 「第IV章 第2節道具 1. 土器」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県

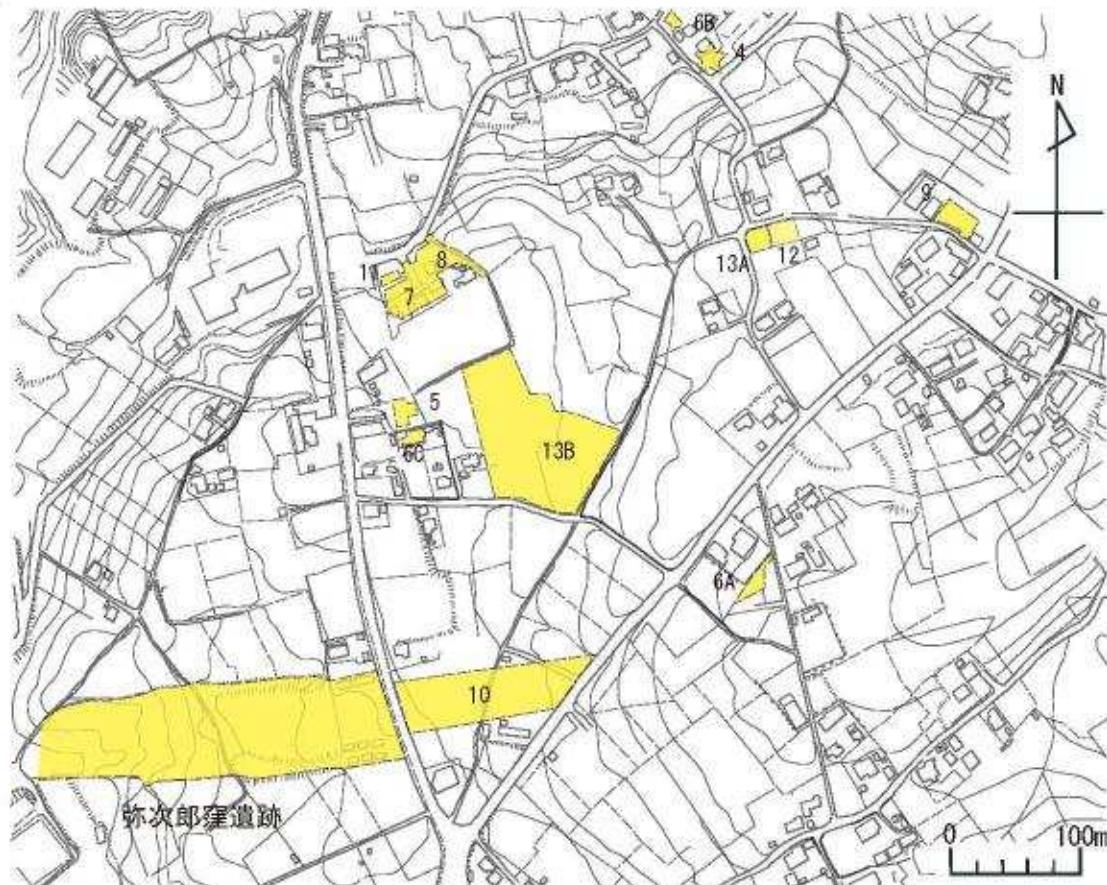


図1 松ヶ崎遺跡調査区位置図 (S=1/5,000)

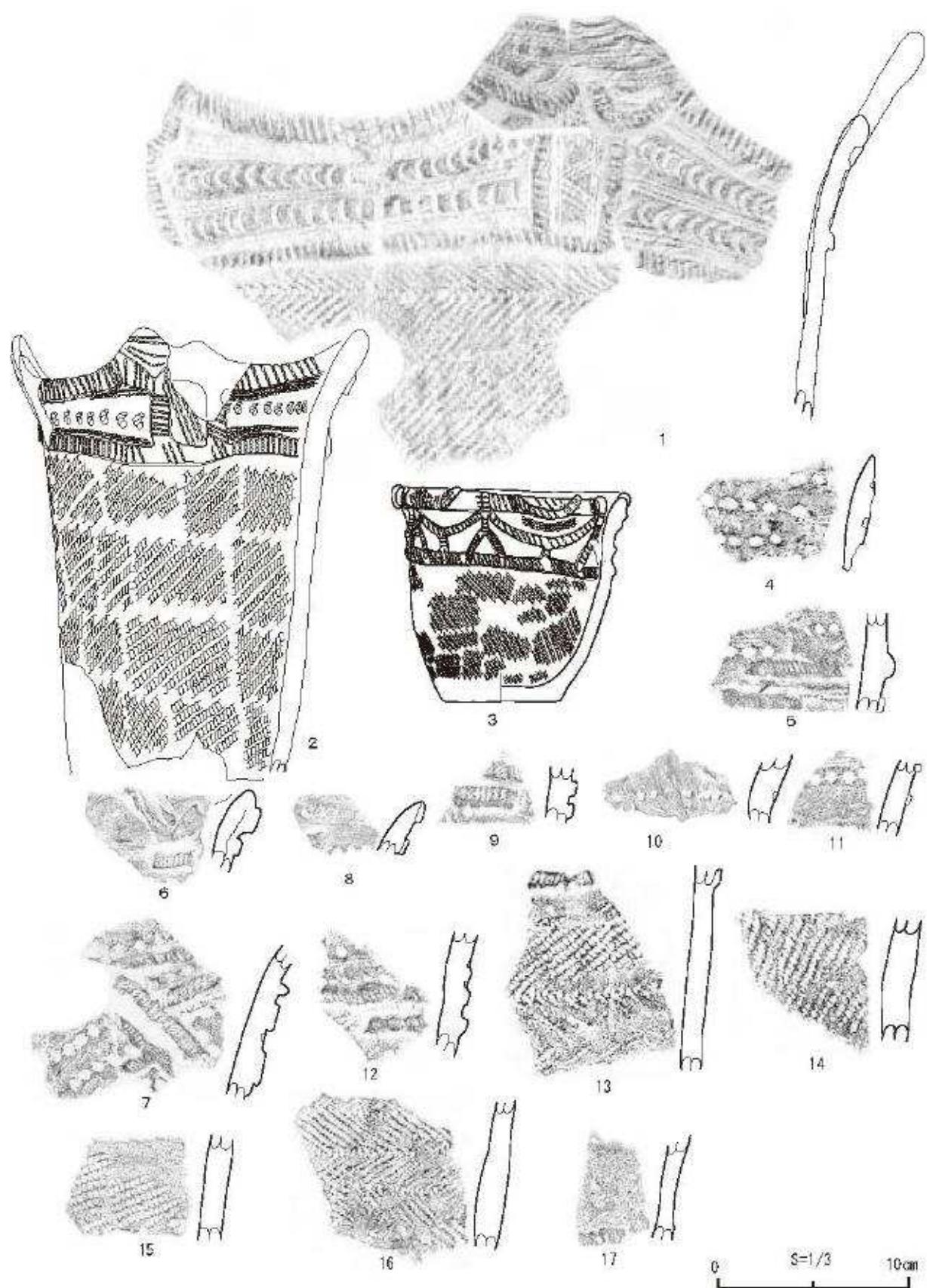
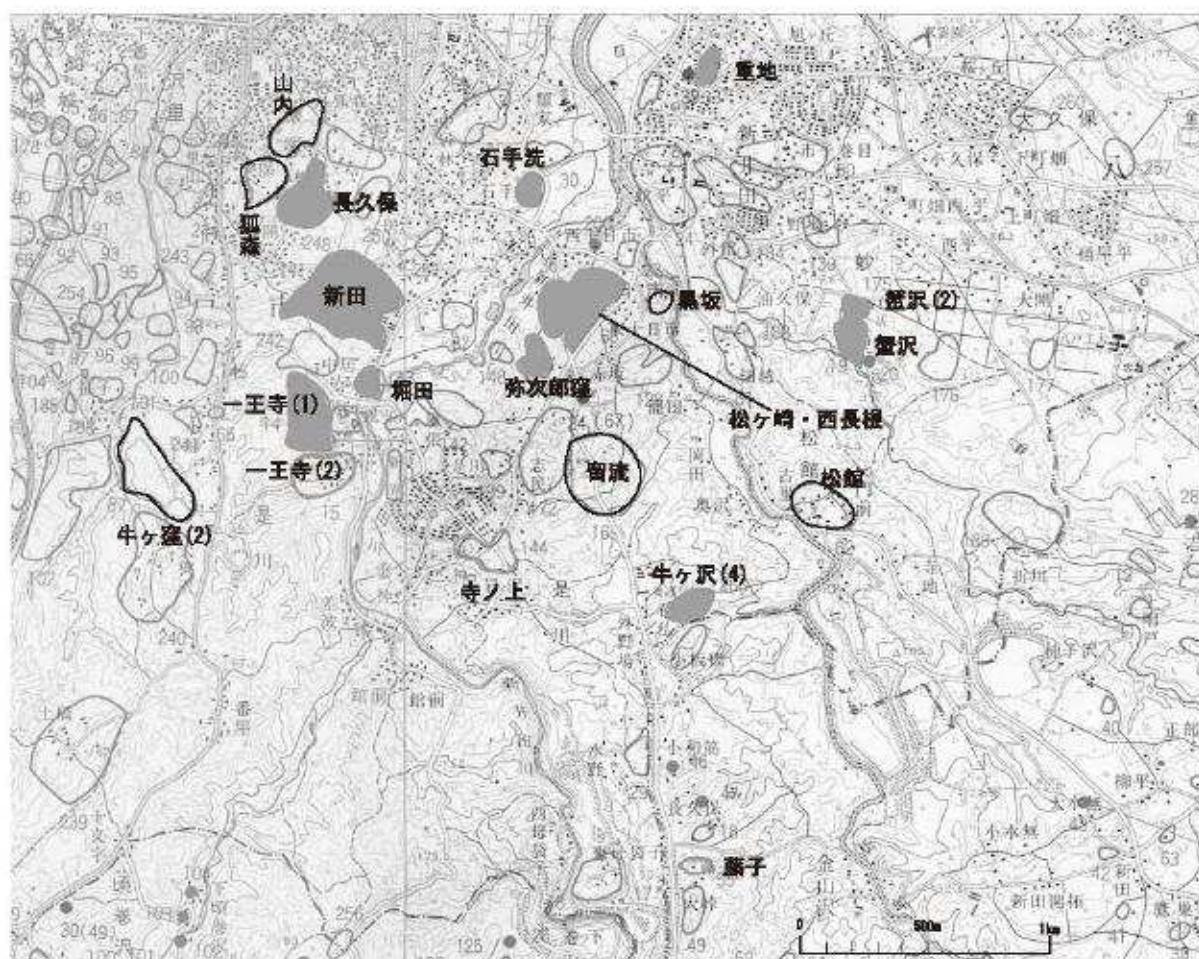


図2 採集土器実測図



遺跡名	時期	遺構種別	備考
長久保	円筒上層c～大木10式平行期?	住居跡 4 土坑 約10	2002年度調査 埋文センター 小山氏教示
新田	大木10式平行	住居跡 1以上 土坑 3以上	2003年度 埋文センター 試掘（筆者担当）
一王寺(1)	中期前葉～後葉	住居跡 土坑	
弥次郎塗	中期中葉・後期初頭	住居跡 8 土坑 69	住居跡は後期前葉の可能性もある。
黒板	大木10式平行?～後期初頭	住居跡 10 土坑 36 埋設土器 2	
蟹沢・蟹沢(2)	蟹沢・蟹沢(2)	住居跡 土坑	
重地	前期末葉～中期	住居跡 31 土坑 約300 竪穴遺構 14 埋設土器 3	
牛ヶ沢(4)	前期末葉～中期末葉	住居跡 10 土坑 38 埋設土器 8	
石手洗	円筒上層d・e	住居跡 5 土坑 13	
是川堀田	中期末葉～後期初頭	土坑 3	

図3 松ヶ崎・西長根遺跡と周辺の遺跡 (S=1/50,000) 積りつぶしは遺構の確認された遺跡

# 青森県畠内遺跡出土縄紋晚期土器付着炭化物の炭素14年代測定

小林謙一・今村泰雄・坂本 稔・佐藤智生

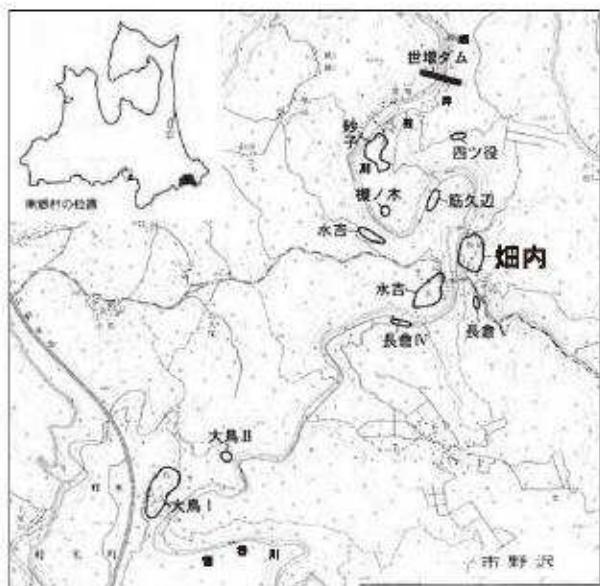
## 1 遺跡の概要

畠内遺跡は、青森県八戸市街地から新井田川を遡ること約20キロ、岩手県境を臨む山間の地に存在する（図1・写真1）。国営八戸平原開拓建設事業の一環である世増ダム建設完了に伴い、現在はその姿を湖水の底に現かせる程度に過ぎないが、青森県埋蔵文化財調査センターによって平成3年度から平成13年度までの8次調査の間に得られた資料は膨大であり、その詳細は報告書等の刊行物として公にされている<sup>1)</sup>。

主な成果としては、縄文時代早・前期、弥生時代前～後期、江戸時代集落跡の検出が挙げられるが、圧倒的な土器出土量に象徴されるように、とりわけ縄文時代前期の資料が充実している。

このように、今後より一層の研究が期待されている本遺跡だが、このたび日本学術振興会科学研究費 平成14年度基盤研究(A・1)（一般）「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」（課題番号 13308009）の一環として、8次調査時に出土した縄文時代晩期末～弥生時代後期の土器付着炭化物の<sup>14</sup>C年代測定を行う機会を得た。

今回、5点の土器から<sup>14</sup>C年代測定用の炭化物を採取したが、このうち<sup>14</sup>C年代を得た縄文晩期末葉の2点について報告し、その年代的位置づけにおける検討材料としたい。



↑写真1 建設中の世増ダムと畠内遺跡(北から)

←図1 畠内遺跡と世増ダム建設事業で  
調査された遺跡(岩手県側を含む)

註)

\*1) 報告書は畠内遺跡I～IVが刊行されている（青森県埋蔵文化財報告書第161・178・187・211・262・276・308・328・345集）。このほか、一般向けの図録として『世増ダムの遺跡』（青森県教育委員会2003）がある。

## 2 測定試料の出土状況

報告する2点の試料（A0107・A0133）に関する出土状況を以下にまとめる。

調査年度 平成13年（2001） 8次調査				
報告 告 畠内遺跡IX（青森県教育委員会2003 青森県埋蔵文化財報告書第345集）				
試料名	出土地点	グリッド	層位	報告書図番号
A0107	弥生遺物集中地点	CE-64	Vb層か	55-22
A0133		EZ-66	Vb層	55-32

表に記した弥生遺物集中地点とは、8次調査において縄文時代晩期末葉～弥生時代後期までの遺物が集中して出土した範囲の事を指しており、周辺には弥生時代の堅穴住居跡も存在する（図2）。

同地点は縄文前期頃から埋没を開始した沢あるいは小支谷であり、これらの遺物が包含された時点にはほぼ埋まりきっており、若干の窪地になっている様子が窺えた。

遺物包含層は上下に二分される。すなわち、上層が弥生中・後期の資料を主体とするVa層、同じく下層が縄文晩期末～弥生前期の資料を主体とするVb層である。

双方の層とも厚さ10～20cm前後を測り、縄文晩期末から弥生前期に降下した十和田b火山灰（To-b）を含んでいる。なお、Va層直上は10世紀半ばに降下したとされる白頭山火山灰（B-Tm）によつて覆われていた。

なお、本遺跡における縄文時代晩期末～弥生前期に関する報告を下表にまとめる。

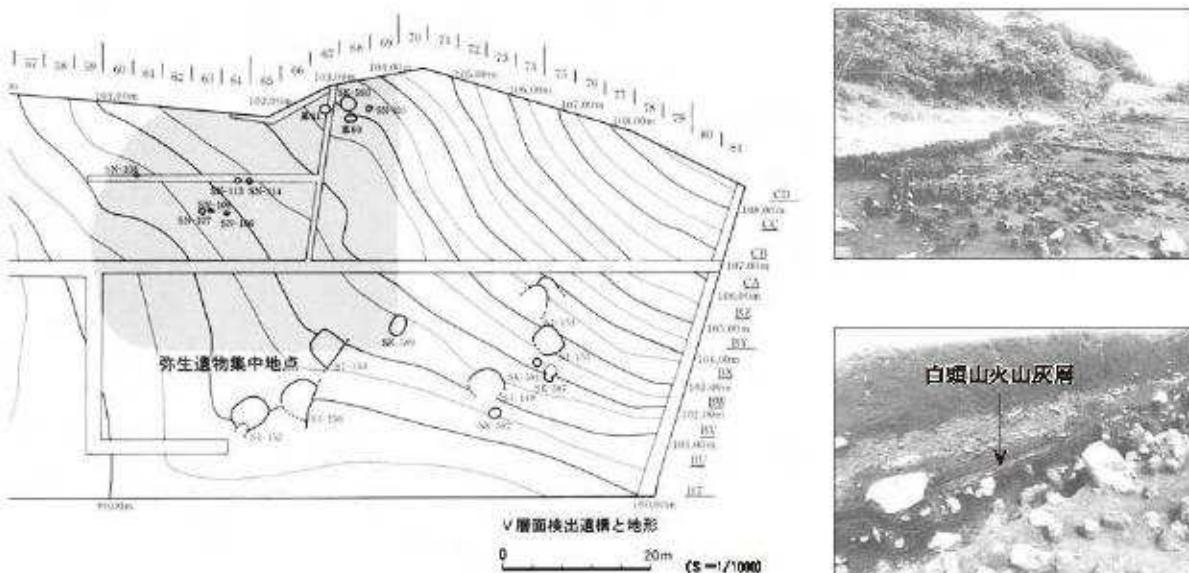


図2 畠内遺跡8次調査におけるV層面検出遺構  
(一部、近世墓と時期不明の遺構を含む)

写真上 CD-65周辺のVa層検出状況  
写真下 CD-65周辺の調査区壁際土層

報告書名	検出遺構・遺物	報告書名	検出遺構・遺物
畠内遺跡I（第161集）	住居3・土坑（4土）・土器・石器・土偶	畠内遺跡VI（第276集）	土器・土偶
畠内遺跡II（第178集）	住居1・土器・石器	畠内遺跡VII（第308集）	土器
畠内遺跡IV（第211集）	住居2・屋外炉3・土器・石器・土偶・クマ形石製品	畠内遺跡VIII（第326集）	土器・土製品
畠内遺跡V（第262集）	土坑1・土器・石器・土偶・石偶	畠内遺跡IX（第345集）	住居1・遺物集中地点1・土器・石器

畠内遺跡における縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の報告

### 3 測定の実際

#### a 測定対象資料と炭化物の状態（図3）

A0107（図55-32） 大洞A式に比定される變形土器口縁部破片。口縁内側に、良好な煮焦げ着き状の炭化物が認められた。

A0133（図55-22） 大洞A2またはA'式に比定されるほぼ完形の變形土器。口縁外側沈線内に、煮こぼれ状に付着した炭化物が認められた。

このほか、弥生前期と考えられるA082からも、22mgの試料を採取し、前処理後に、2.49mgの炭化物を回収したが、顕微鏡観察でミネラル分が多く観察され、今回の測定は保留した。

#### b 炭化物の処理

試料については、以下の手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林、(2)(3)は、加速器分析研究所へ委託した分は坂本が行った。その他の試料は、ペータアナリティック社に委託した。

##### (1) 前処理：有機溶媒による油脂成分等の除去、酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

まずアセトンに浸け振とうし、一晩浸け置きして、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（1回）。AAA処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で試料に含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（0.1N-NaOH）でフミン酸等を除去する。2~3回処理を行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した（A0133-2回、A0107-3回）。さらに酸処理を1回行い中和後、水により洗浄した（4回）。各試料は、採集総量、AAA前処理を行った量、前処理後回収した量、ガス精製に供した量、二酸化炭素の炭素相当量をそれぞれ測定してある。基本的に前処理した試料の半分を精製するが、両試料とも2つの測定機関で測定したため、ほとんど全量を使用した。前処理のうち、最初のアルカリ溶液を保存してある。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄（またはコバルト）触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換。測定製カソードに充填。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともにバイコールガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともにバイコールガラス管に封じた。これを電気炉で加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアル

ミ製カソードに60kgfの圧力で充填した。

### c 測定結果と暦年の較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、同一試料を、加速器分析研究所（測定機関番号IAAA）（A0107a, A0133aとしたが、A0133aは炭素量不足で測定できず）と、ベータアナリティック社（測定機関番号Beta）（A0107b, A0133bとした）に委託した。

年代データの<sup>14</sup>CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では<sup>14</sup>CBPとする）。<sup>14</sup>Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の炭素14/12同位体比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。加速器分析研究所では、同時に加速器で測定した炭素13/12比を用い炭素13/12比を調べ補正する。そのため誤差も大きく、参考値とする。ベータアナリティック社は十分な炭素量がある場合、炭素13用ガス試料を質量分析計により測定した炭素13/12比を調べ補正する。A0133bは試料不足のため、炭素13/12比は測定できなかった。炭素13/12同位体比は通常、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの炭素13/12比）偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル、‰）で示される。補正した炭素14/12比から、炭素14年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageで呼ばれることが多い）。

### 〈暦年較正〉

測定値を較正曲線INTCAL98<sup>1)</sup>（暦年代と炭素14年代を暦年代に修正するためのデータベース、1998年版）と比較することによって実年代（暦年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BCで示す。（）内は推定確率である。図は、各試料の暦年較正の確率分布である。

### 番号 試料の重量 (mg)

試料No.	採集	処理	回収	含有率1	精製用	ガス*	含有率2	含有率3
A0107a	33	33	6.63	20.1%	1.82	1.00	55.0%	11.1%
A0107b	33	33	6.63	20.1%	2.47	1.51	61.1%	12.3%
A0133b	22	22	5.02	22.8%	3.49	1.96	56.2%	12.8%

\*は、二酸化炭素の炭素相当量

含有率1は回収量/処理量、含有率2はガス相当量/精製用重量、含有率3は含有率1\*含有率2。

試料No.	測定機関	炭素年代BP		暦年較正cal BC
	番号	$\delta^{13}\text{C}$	$^{14}\text{C}$ BP (補正值)	
A0107a	IAAA30458	(-24.0 ± 1.3‰) <sup>*1</sup>	2910 ± 50	1280 (0.4%), 1260-970 (92.8%), 950-930 (2.4%) cal BC
A0107b	Beta178399	-23.1‰	2790 ± 40	1010-830 (95%) cal BC
A0133b	Beta178400	- <sup>*2</sup>	2600 ± 30	820-760 (91.9%), 670-670 (2.5%) <sup>*3</sup> cal BC

註)

\*1) 加速器分析研究所での  $\delta^{13}\text{C}$  値は、加速器による測定であり、報告された誤差を付す。

\*2) A0133bの  $\delta^{13}\text{C}$  値は炭素量不足のため、測定不能。

\*3) 670-670は、670-665 cal BC の範囲であることを示す。

## <結 果>

縄紋晩期土器の炭素年代測定を行った山本直人・小田寛貴氏の測定を参考に、年代的位置づけを試みる。御経塚遺跡の測定<sup>2)</sup>では、大洞C2式新段階平行（小林青樹1999<sup>3)</sup>）の北陸地方下野式（新）とされる170KD36は2481 ± 85BP、170KD37は2870 ± 97BPである。この大洞C2式新段階の測定値は、ややばらつきがあるが、筆者がこれまでに測定した例を合わせみると、大洞C2式は、おおむね2760-2600BP位の炭素年代が測定される例が多い。較正暦年代では、おおむね920-750cal BCに含まれる年代である。

山本・小田氏の測定による、長野県氷遺跡の氷1式土器（小林青樹氏によれば大洞A新または大洞A'に平行する）の付着炭化物の炭素年代は、試料番号10K0R01が2437 ± 12BP、試料番号10K0R03が2462 ± 19BP、氷2式土器（小林青樹氏によれば砂沢並行）試料番号10K0R04の付着炭化物の炭素年代は2428 ± 20BPである<sup>4)</sup>。また、東海地方櫻王式土器（大洞A'平行の弥生前期土器とされる）試料番号23HRU08は、2350 ± 77BPである<sup>5)</sup>。これら晩期末葉の測定値を、本稿と同じ解析方法で較正暦年すると、760-345cal BCに含まれる。このあたりは、較正曲線が400年近くにわたり平坦になってしまう年代であり、その間の年代を細かく見ることはできない。A0133bは、低い確率ながらも760cal BCまたは670cal BCの暦年代が含まれ、大洞A式の暦年としては妥当と考える。A0107は830cal BC以前と、それよりも古い年代であり、少なくとも大洞A式新期よりは古く、山本氏らの報告や、筆者によるこれまでの測定例<sup>6)</sup>から見ると、新しくとも大洞C2式などが相当する暦年代である。

A0107が、古い年代を示す理由としては、以下の点が考えられる。一つの可能性は、試料自体が古い炭素を持っている可能性である。海洋性の食料に由来するお焦げの場合、海洋リザーバー効果を受けていて、実際よりも古い年代となる場合がある<sup>7)</sup>。本遺跡の場合、海岸部からは離れており、A0107bの  $\delta^{13}\text{C}$  の値は-23‰と若干重たく、海産物のお焦げが混入した可能性もあると考える。

それ以外の理由として、埋没中の汚染の影響が考えられる。本試料の場合、谷部の堆積土中に縄紋晚期後葉から弥生前期の土器が混在して出土しているが、この包含層の上部には、弥生時代中後期の包含層と白頭山火山灰層が自然堆積層として形成されており、層位は安定的であったことから、後世の汚染や攪乱の影響は少ないと捉えられる。

もう一つの可能性として、土器胎土や土壤から付着してきたミネラル分が比較的多い資料であった場合、そのミネラル中の古い炭素が影響を与え、古い年代となる場合も考えられる。しかし、A0107は、炭素含有率は特に低くなく、顕微鏡観察によつても、良好なお焦げ状の炭化物が観察されている。

以上、A0133については大洞A2式からA'式として、これまでの筆者の測定値と整合的な750-400cal BCの暦年代に相当すると考える。A0107は、炭素年代から見る限り、大洞C2式以前の粗製的な鉢形土器である可能性と、大洞A式土器の付着物であるが、なんらかの理由でやや古い年代を示した可能性の2者が考えられる。本遺跡で測定できたのは2例であり、これだけの結果から結論を述べることはできない。今後、測定例を増やして、縄紋晚期から弥生にかけての年代を整理していく、改めて畠内遺跡の晩期末葉～弥生移行期の土器の測定結果について再検討したい。

冒頭で触れたように、この分析は、日本学術振興会科学研究費 平成14年度基盤研究(A・1) (一般)「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」(課題番号13308009) の成果を用いている。本稿を草するにあたり、土器の型式学的位置づけについて国立歴史民俗博物館設楽博己氏の教示を得た。

## 参考文献

- 1) Stuiver, M., et al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40(3), 1041-1083.
- 2) 山本直人2002『加速器質量分析放射性炭素年代測定法による縄文時代集落の存続期間に関する研究 平成11年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)研究成果報告書』
- 3) 小林青樹1999「縄文・弥生移行期における東日本系土器」考古学資料集9 国立歴史民俗博物館 春成研究室
- 4) 山本直人・小田寛貴2002「縄文土器の14C年代(6)」「名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XIII)」名古屋大学年代測定総合研究センター 167-169
- 5) 小田寛貴・山本直人2002「愛知県安城市場内貝塚の14C年代測定」「名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XIII)」名古屋大学年代測定総合研究センター 170-176
- 6) 小林謙一・今村峯雄・坂本稔・西本豊弘2003「AMS炭素年代による縄紋中期土器・集落の存続時間の検討」「日本文化財科学会第20回大会研究発表要旨集」
- 7) 今村峯雄2000「考古学における14C年代測定 高精度化と信頼性に関する諸問題」「考古学と化学を結ぶ」馬淵久夫・富永健編 UP選書 東京大学出版会 55-82

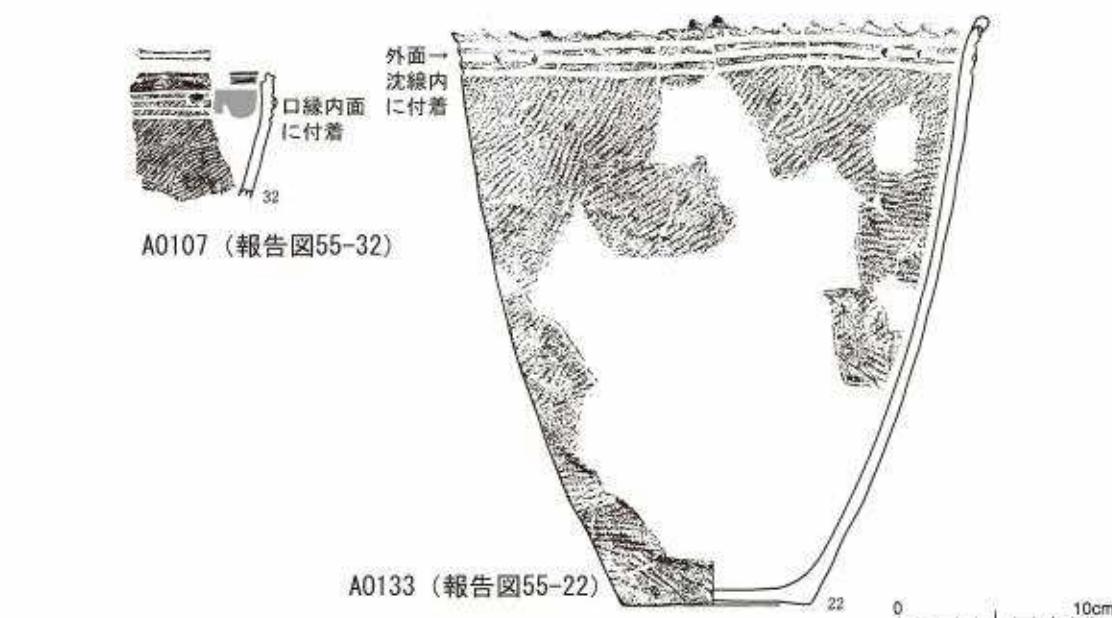


図3 測定試料と採取位置(1/4)

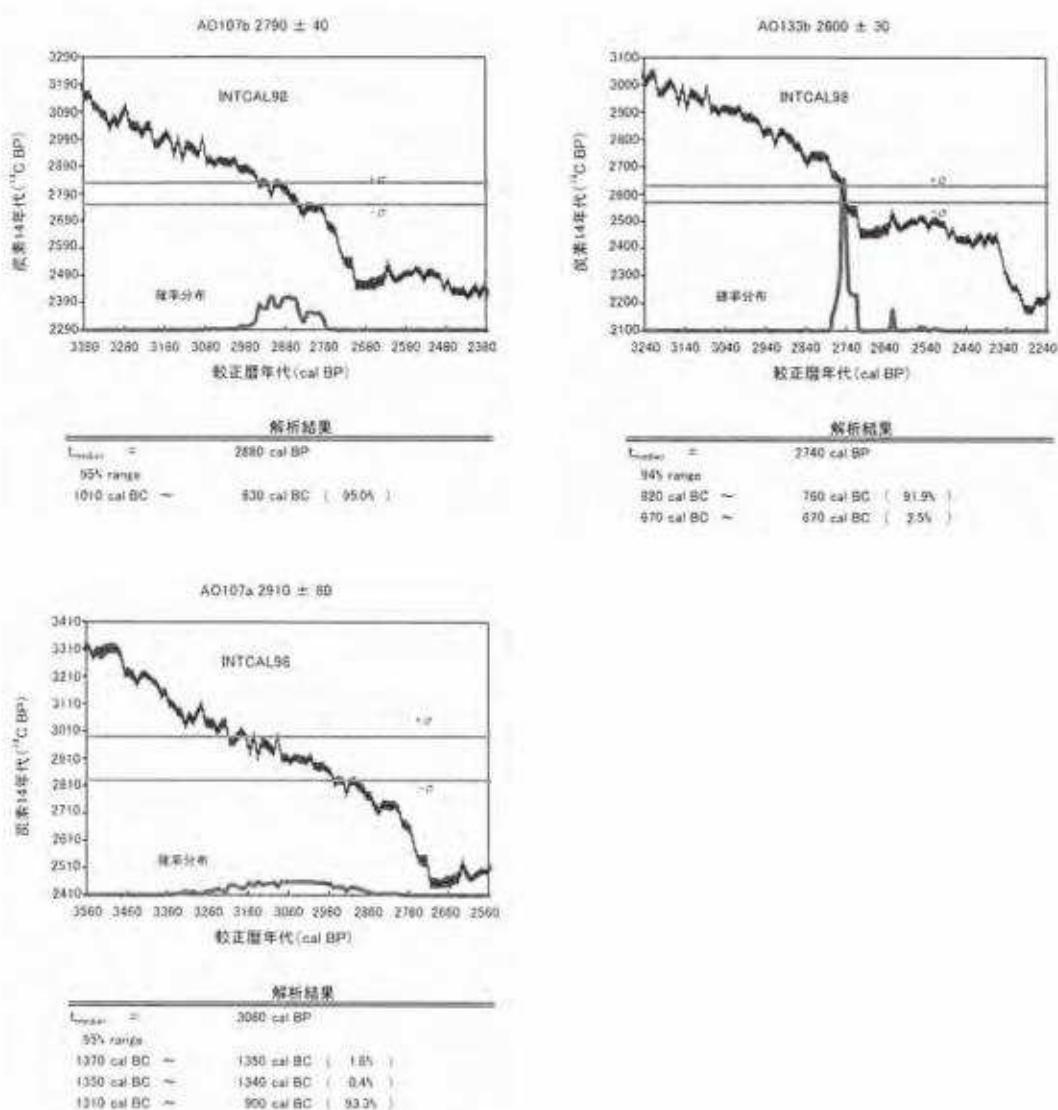
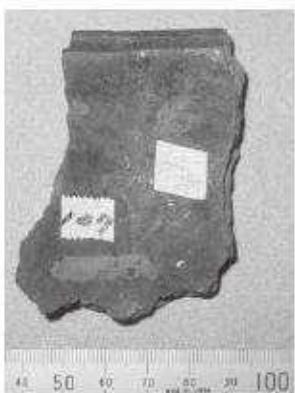


図4 暗年較正の確率分布

烟内遺跡年代測定資料 写真図版



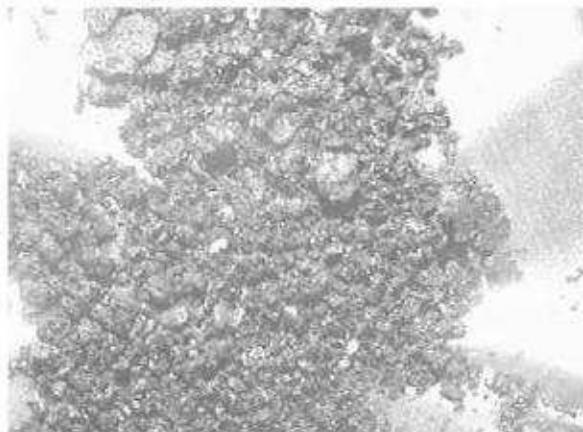
A0107



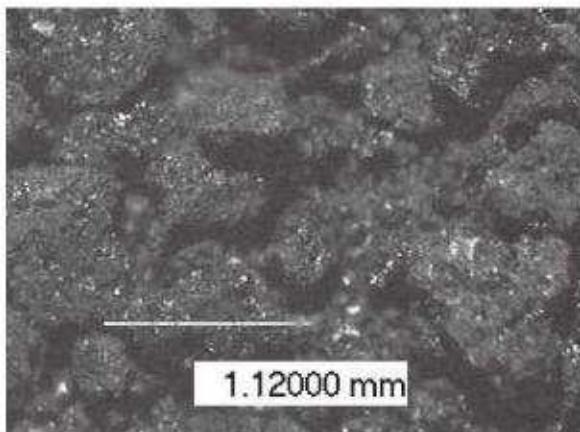
A0107 口縁内面炭化物付着状況



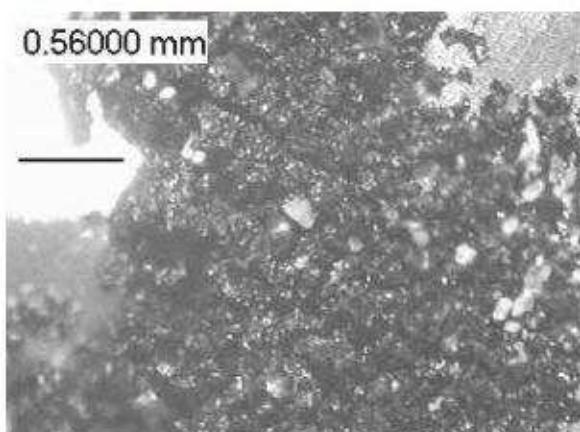
A0133 口縁外面炭化物付着状況



A0107 炭化物前処理前 13倍



A0107 炭化物前処理後 26倍



0.56000 mm

## 資料紹介

# 動物形内蔵土器 —近野遺跡の追加資料—

成田滋彦

## 1 はじめに

平成13年に青森県埋蔵文化財調査センターにおいて、過去の遺物の整理及び収納作業を行ったところ、偶然に土器の破片の中から発見したものである。

遺物の注記では、74・06・29と注記があり、注記から昭和49年度の近野遺跡の第二次調査であり、私も参加して調査を行っていた。何故に、このような貴重な資料を見落とし、報告書に記載しなかつたかについては、発見した遺物が掲載外の一括資料として収納されており、当時は動物と理解せず壺形土器の把手として理解し、掲載外に分類してしまったかもしれない。

とにかく、本県では出土例の少ない動物形内蔵土器(藤沼1997)であり、今回新たに図を載せ記載する事とする。

## 2 遺物の説明

**出土状態・時期** 注記では、EF-210表土と記載している。遺構外の出土で、表土のため他の遺物との共伴関係は不明であるが、製作等から判断すると縄文時代後期の十腰内I式と思われる。

**土器** 器厚は0.7cmと薄く、胎土には細砂粒を含んでいる。色調は器内面がHue10YR にぶい黄褐色6/3、器外表面がHue10YR にぶい黄褐色5/3であり、器内面は動物と同じ明るい色調を呈する。焼成は、ほぼ良好であり精製土器の類と考えられる。

**動物** 形態は、四肢をひろげ貼り付いている。指先部は明確でなく、広がった状態である。頭・尾部は突起状態で明確には表現していない。腹部は、やや中央部でえぐれ、背部は斜位に製作している。

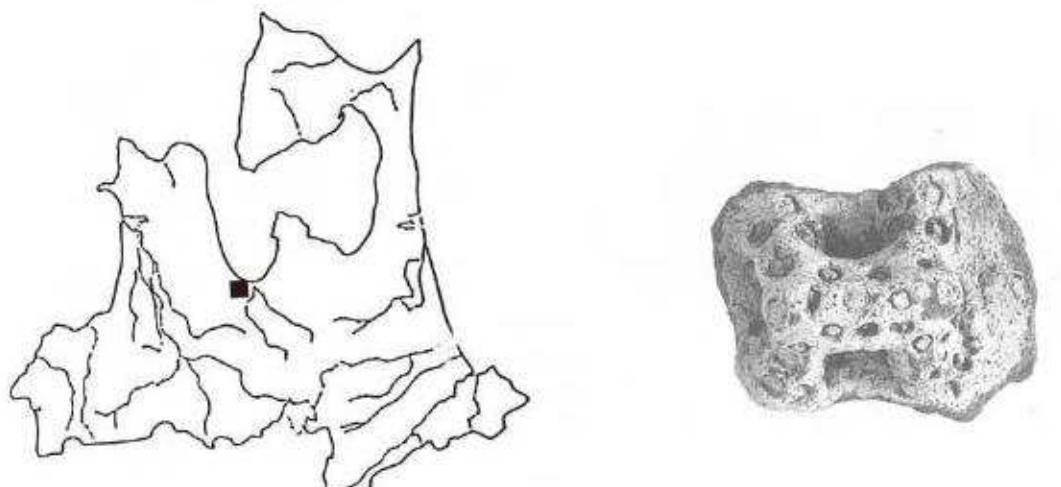
文様は、直径2mmの円形刺突を施文しており、背部に一列、側縁部に各々一列に規則的に施文している。この様に全面に円形刺突を施文する例は、六ヶ所村上尾駿(2)遺跡(遠藤1988)にもみられる。全体の形状から表現を観察すると、頭を下げ尾を上げた威嚇のポーズにも見えるし、頭部を上げ尾を下げた従順なポーズにも見え判断に悩む資料である。

## 3 おわりに

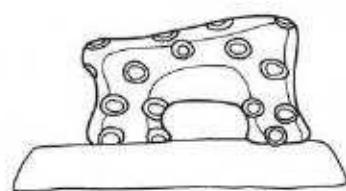
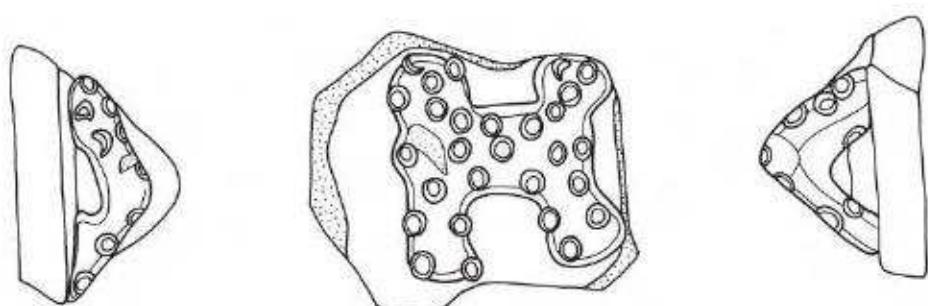
今後は、整理のさいの遺物の選別を反省し、本資料も含めて動物形内蔵土器を検討していきたい。

## 参考文献

- 遠藤 正夫(1988)「上尾駿(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告 第115集 青森県教育委員会  
藤沼 邦彦(1997)「縄文の土偶」 講談社



遺跡位置図



動物計測値

全長2.7cm・幅3.0cm・高さ1.7cm

縮尺 1分の1

図 動物形内蔵土器

## 執筆者一覧

- 齋藤 淳 中里町立博物館 学芸員  
岩田 安之 青森県埋蔵文化財調査センター 文化財保護主事  
福田 友之 青森県埋蔵文化財調査センター 次長(調査第一課長兼務)  
森 淳 階上町教育委員会 社会教育課 主事兼社会教育主事  
中村 哲也 青森県埋蔵文化財調査センター 文化財保護主事  
小林 謙一 総合研究大学院大学 博士後期課程 日本歴史研究専攻  
今村 峰雄 国立歴史民俗博物館 情報資料研究部 教授  
坂本 稔 国立歴史民俗博物館 情報資料研究部 助手  
佐藤 智生 青森県埋蔵文化財調査センター 文化財保護主事  
成田 激彦 青森県埋蔵文化財調査センター 調査第二課長

---

## 研究紀要 第9号

- 発行年月日 2004年3月5日  
編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15  
電話 017-788-5701  
FAX 017-788-5701  
印 刷 不二印刷工業株式会社  
〒030-0902 青森市合浦一丁目10-16  
電話 017-741-5439  
FAX 017-741-2541
-



BULLETIN  
OF  
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH  
AOMORI PREFECTURE

No. 9

---

CONTENTS

**Articles**

- A Study of the Ancient Iron Artifacts at the Northern Part of Tohoku Region. SAITO Jun
- Problems of Archaeological Classification:  
A Semiological Approach to Archaeological Classification. IWATA Yasuyuki
- Archaeology in the Snowy Country:  
The Lost Days of the Winter Season in the Jomon Period. FUKUDA Tomoyuki
- A Study of the Pottery-Used-for-Salt-Making in the Ancient Period at Nanbu Region. MORI Atsushi
- Introduction of the Upper-Ento-Type-Pottery  
Excavated from Matsugasaki Site. NAKAMURA Tetsuya
- Analysis of the Radiocarbon Dating to the Carbon Adhered to the Jomon Ceramics: The Samples in the Final Jomon Period Excavated from Hatanai Site. KOBAYASHI Kenichi  
IMAMURA Mineo  
SAKAMOTO Minoru  
SATO Tomoo

**Information about Artifacts of Archaeological Research**

- Information about the Pottery with built-in the Animal Shaped Clay Figurine:The Additional Artifacts Found at Chikano Site. NARITA Shigehiko

---

March 2004  
CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH  
AOMORI PREFECTURE